

奏でることを忘れた少年

TAKACHANKUN

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

星川優はギターを愛してやまない少年だった。

しかし、ある日を境に奏でることをやめてしまった。

そんな彼は一人のギタリストと出会い、情熱を取り戻していく…

目次

星川優は平和に過ごしたい	1
憂鬱の優	6
生徒会長襲来	13
おたんちんってよくよく考えたら危ない響き	21
女子もバンドをやる時代	28
その熱は	34
忘れてしまった感情	41
出会い、始まり	51
大魔姫の姉	56
超カッコいい追求大作戦	64

お前の言うカッコいいってやつを	71
大饗宴という名の公開処刑	79
生徒会長がアイドルだった件	88
バンドがやりたくて	98
欠けているもの	112
文化祭が何故か他校と合同になりました	116
た	
思わぬ再会	124
5人の夢	132
幼馴染	143
文化祭開幕	155
アイドル×女優×おねーちゃん	

あつたはずの青春

168

心を震わせる音

174

もうお前とは

187

黄昏ブラックコーヒー

194

幼馴染の不安

204

過去と向き合う時

216

ギタリストとして

223

Reminiscence

231

逢沢優歌

240

大切なこの時間

247

涙の理由は

256

もういいよ

265

もう二度と

277

もうやめだ

287

ライブハウスデビュー

298

怒涛のゲストバンド達

306

次もその次も何度だって

312

小さな変革者

326

俺の奏でる音を

334

表舞台へ

341

ラーメン銀河にて

347

幼馴染のこれまで

354

あとは頼んだ

364

御簾を上げようぜ

371

ライブ前夜

379

初舞台は大舞台	385
You are unstoppable	
le!	390
頂点獲れよ	397
学校の放送で自分の名前を呼ばれると	
一瞬ドキッとするよね	408
不合格の理由	417
闇の中から	424
LAST PIECE	432
Turns into Lock	438
交わる二つのR	447
頂上バトル開戦	457

勝者は	463
かけがえのない人達と	469
何も知らない	477
不穏な予感	487
パレオは何処へ	493
ちゅという少女	502
パレオと令王那	511
きつといつか	519
俺ができること	531
始まりは	537
誓いと出会い	545
番外編	
一周年	557

星川優は平和に過ごしたい

「ふわあ……」

これで何回目だ？ 欠伸。

だって眠いんだもの……しようがないよね。

今は高校の入学式の真っ只中である。

校長が話しているのだが……

いや、まじで何分話すの？

かれこれ30分近くは経ってる。

簡潔にまとめろっての。

出会いを大切にーとか宣っているが

正直どうでもいい。

そんな運命的な出会いなんてあるわけないじゃん。

勉強に部活に恋愛？ 何それって感じだわ。

脚色されたドラマに毒された幻想だろ？

そんなもん……

俺の祈りが届いたのかくそ長かった話も
ようやく終わりを告げた。

「えっと、次は生徒会長の挨拶…です。」

ええ…まだあんの？もういいって。

「みんなー！入学おめでとう！生徒会長の

氷川日菜です！」

へえ、あれが生徒会長ね。

中々かわいいじゃん。プラス1点。

「羽丘は勉強も大事だけどー生徒会長的にはー…」

もうわかったから、早く終わらせてくれよー。

「るん♪ってしよーっ!!」

…はあ？

なんだそりや…フリーダムすぎるだろ。

原稿みたいなのふっ飛ばしちやったよ…

るん♪ってなんだよるん♪って…

それで、誰もツッコまないかい…

それどころかこいつらノリノリだったわ。

大丈夫か…この高校。

俺…来るところ間違ったかな？

先行き不安しかない。

入学式も終わり、教室にきたわけだが…

「入りたくねー…」

気づいちちゃったんだけど、この高校

男子生徒が全然いない。

圧倒的に女子の比率が高い。

というか俺以外にいんのかってレベル。

家から近いってだけでテキストに受験しちまったからな…。

情報なんて全然知らん。

いうて、つい最近こつちに引つ越してきたわけだし…

絶対浮くじゃん俺。

目立たず平和にが星川優のモットーだっていうのに…

「はあ…」

ため息も何回目だろ。

とにかく、立ち止まってもしょうがないし教室入るか。

「超大魔姫あこなるぞ！」

「ええ…」

完全に出鼻くじかれた。

なにあれ。

るんるん生徒会長の次は厨二病娘かよ。

勘弁してよホントに。

「ああっ…あっ…ああっ…」

今度は何だよ、次から次へと

イベントに事欠かねーなこは。

見るとプリントが散乱して大惨事となっていた。

いかにもどんくさそうな地味メガネっ娘が慌てている。

あーあ、やっちゃまったね。御愁傷様。

「もう…おたんちん…」

「ええ…」

おたんちんて…言うやつ初めて見たわ。

あいつ、どこの生まれよ。

「ごめんね！大丈夫？」

「え？」

「みんなに配るの？」

「はい…出席番号が1番だから先生に頼まれて…」

拾ってやらんこともないこともなかったが

どうやらその必要もなさそうだ。

というか目立つのもやだし。

ちようどいい、この隙に教室入らせてもらおうか。

こうして俺は不安ばかりの学園生活を

踏み出しましたとき。

憂鬱の優

「ちよつといいい？」

頭上から声が聞こえる。

その声で意識が覚醒する。

まったく誰だ？

俺の睡眠を妨害しやがって。

ん？待てよ？

俺の睡眠を妨げる存在っていったら

かーちゃんぐらいなもんなんだが…

明らかに他人の声だ…ホントに誰だ？

この感触…机かこれ。

「あれ…(ハハ)、ど(ハハ)？」

「学校の教室だよ。」

…そうだった。入学式だったっけ今日。

ていうかこの子、さっきおたんちゃん娘（仮）

のプリント拾ってあげてた優しい
女子生徒じゃん。

俺に何か用かね？

「これ、プリント。渡したいんだけど。」

「あー…悪い悪い。おもいつきり爆睡してたわ。」

「登校初日だよ？」

そう言われましても…この状況でどう

モチベをあげろというんだ。

…そうだ。

ちやうどいい機会だし、この子に聞いてみつか。

「ちよいと聞いてもいい？」

「何？」

「見た感じ女子生徒ばかりなんだけど…男子生徒っていないんかな？」

いるよな？

いるに決まってるよな？（迫真）

「んー…羽丘は去年まで女子高だったみたいだし…いない…かも？」

「まじすか…」

聞きたくなかった衝撃の事実。

「はあー…女子高だったんかよ、ここ。」

今日一のため息出たわ。

それにしたって男子生徒のもう一人や二人くらいはいてもいいだろうに…どんな奇跡よこれ。

「知らなかったの?」

この女子生徒も半ば呆れ顔である。

「だってさー俺こっちに越してきたばかりだし…家から近いってだけでテキストに受験したのよ。」

「適当に受験して受かるところでもないんだけどね…」

「え、そうなん?」

「うん。羽丘は進学校だから。」

「ええ…」

聞きたくなかった衝撃の事実その2

「知らなかったんだ…」

うん、知らなかったんだ…。

無知は罪つてのは本当だな。

「今みたいに寝てたら授業についていけなくなっちゃうよ?」

え、この子俺の心配してくれてんの?

さつきはプリント拾ってあげてたし…

ひよつとしていい子?

「だいじょーぶ。俺やればできる子。」

「…自分で言っちゃおう?」

「言っちゃおう。」

だって俺だもん (謎の自信)

「…ふふっ。名前、聞いてもいい?」

「ああ…えっと、田中 一郎です。」

「…絶対嘘でしょ?」

うっそ、何でバレたん?

仕方ない、真面目に自己紹介すつか。

「星川 優ってんだ。よろー。」

「私、戸山 明日香。よろしくね。」

誰とも関わる気はなかったんだけどなあ…

なんかいい感じに談笑みたいなのしちまったよ。

それを悪くないとも感じてしまった。

いかんいかん。

人間関係なんて煩わしいだけなんだ。

これからは会話も最低限にしよう。

…それでいいんだよ。学園生活なんて。

程なくして先生がやってきた。

自己紹介という名のくそイベを消化した後

HRをやって家路についた。

「つだいまー。」

「おかえり。」

「疲れたわー。」

「疲れたって…今日は授業もなかったんでしょ？」

「まーそうなんだけどさ…」

色々と…ね。

「そうそう、優の写真たくさん撮っておいたから！」

「別に撮らんくてもいいって言うたやん…」

「で、学校は楽しめそう？」

「それがさ、男子生徒が俺だけっほいんだよね…」

「良かったじゃない。」

「かーちゃんよ…何故そうなる。」

「しかも進学校なんだってさ。勉強もきついんだろなあ…憂鬱だよもう。」

「さっきは強がったがやっぱりきちーわ。」

「頑張りなよ！」

「へーへー…」

「さてと、こういう時はひと昼寝でもしますかね。」

「そういえば優、話は変わるんだけど」

「何？」

「あーちゃん…元気にしてるかねえ」

「あー…」

…懐かしいな。

引越してきたとはいったが

俺はもともとはこっちに住んでいたのだ。

あーちゃんとはその時に遊んでいた子である。

唯一俺が気を許していた仲間でもあった。

「今何してんだろ…元気にしてっかなー」

「会いにいつてみれば？」

「いや…いやよ。」

何話していいかもわからんし、直前まで引越すの言わなかったこと怒ってるだろうし。

わんわん泣いてたなー。あの時は。

まあ、今はまだいいか。

落ち着いたら会いにいつてみよう。

いつになるかはわからんが…いずれな。

生徒会長襲来

入学式も終わり、今日から本格的な授業が始まる。

いざ始めてみると予想通りというべきか

進学校というだけあって授業中に居眠りや私語をしている生徒はいなかった。

真面目ちゃんかお前ら……って俺が異質なだけか。

俺はというと、さすがにそんな中で眠りにつくわけにもいかず、とりあえずノートだけはとっているという次第である。

「はあーっ……」

疲れたわー。

1時間近く授業受けて休憩時間が10分とかおふざけにもほどがあるやろ。
等価交換とやらの法則に則ってその分休ませろ。

「どうしたの？ ため息ついて」

「ああ……えつと……」

なんだっけ、名前忘れちった。

「もう忘れたの？自己紹介したじゃん…」

戸山 明日香。」

「ああ、そうそう！戸山な。」

唯一俺に話しかけてくれる良くできたしっかりしてそうな子。

「戸山はさー…：やっぱ進学校だからこー」

受けたわけ？」

「うん。良い大学行つときたくて…」

ちゃんと考えてんだな。偉いわこの子。

「しっかりしてんなー…」

「そうかな？」

「だって俺らまだ入学したての高校一年よ？卒業後の進路考えてるやつなんてそうそういねーって…」

「そうやって過ごしてたらあつという間に3年過ぎちゃうよ？」

うん、ごもつともですな。

っていつても将来のこととか言われても

ピンとこないしなー。

何してんだろ…：未来の俺って。

「やっと終わったー」

帰り支度を済ませ、教室を出る。

なんだかザワついているが俺には関係ないことだろう。

「あっ！」

…あの、確か生徒会長の…氷川日菜だっけ？

…一瞬目があつたんだが。

…ていうか、俺のほう見て

あっ！って言わなかったか？

…そんなわけないか。ないよな？

「ねえ！君！」

話しかけられてる気がするけど気のせいだろう。

そうだ、きつとそうだ。

「ねえってば！」

よく考えたら生徒会長が俺なんかに話しかけるわけないしな…

「うえっ!？」

変な声出た。だって急に腕掴むんだもんこの人。

「ちよつといいかな？」

「え、えと…用事があるのでええええつ!？」

返事をする間もなく腕を引つ張られ生徒会長は走り出した。

「すぐ終わるよ！お話聞くだけだから！」

すぐ終わらんやつだろそれ絶対！

強制イベントかよ！

…それにしても人間って人一人引つ張ったままこんな速く走れるものなんだなー

…人間ってなんだっけ？

結局俺は生徒会長室に連行されてしまった。

「よかつたらどうぞ。」

「あ、ども。」

副会長的な人がお茶を出してくれた。

あーうめえ。

直感でわかるわ。この人絶対いい人。

「あ、あのー…それでご用件は？」

「んー…男の子の生徒って珍しいから…つい♪」

つい♪じゃねえわ。

感覚派の究極形かよこの人。

参ったな。お茶出された手前、帰っていいですか？なんて言えないしな…

「えーと、氷川…先輩」

「日菜ちゃんでもいいよー！」

いや、ダメだろ。

「お名前聞いてもいいかな？」

「あ、鈴木です。」

「うっそだー！星川 優君でしょ？」

バレとんのかい…じゃあ何で聞いたし。

「優君、学校はどう？楽しい？」

「や、入学したばつかですし…まだなんとも…」

「そっかー、何かあったらこの日菜ちゃんに遠慮なく相談してね！」

絶対嫌やわ。

「つぐちゃんも！相談にのってあげてね！」

「は、はい！」

うん…：やっぱこの人はいい人だわ（確信）

この人に相談しよう。絶対。

「そういえば…：男子生徒って俺しかないんですかね？」

「うん！優君一人だよ！」

すごい良い笑顔で言いきりよったよ。

俺の最後の希望を打ち砕きやがったよ。

良い笑顔で。

…黙っていれば間違いないかわいいのにねえ。

そうか…：仕方ない、腹括るか。

「氷川先輩…」

「なーに？」

「せいぜい頑張りますよ…：先輩の言うような…：るんってするような学園生活、送れるよ
うにね」

「うん！頑張つてね！優君！」

って、んなわけあるかい。俺は平和に過ごしたいんだっつーの。

「なになに、呼び出し？」

「星川何やったの？」

「会長と話したんでしょ？いいいなー」

こいつら、クラスの連中か。

馴れ馴れしい野次馬め。

「別に、男子の生徒は珍しいからって色々話聞かれただけだよ。」

「そうなんだー」

「でも実際、男子いるなんて思わなかったしねー」

そうなのか。

「やっぱ、その…浮いてるよな…俺。」

「え、気にしてんの？」

「かわいいー！」

「星川って面白いんだね！」

かわいい言うなおもしろい言うな。

「別に気にしてねーし！ほら、散った散った！」

「えー！」

冗談じゃない。

何勝手に人を面白いやつ認定してるんだ。

俺は一人で生きていくんだ。

腹を括ったってのはそういうことだ。

おたんちんってよくよく考えたら危ない響き

「やっぱ……ギリ間に合うか……？」

只今俺は何年か振りの全力疾走の真っ最中である。

無遅刻無欠席記録が途絶えちまう！

皆勤賞つてのが俺の唯一のステータスなのに……！

原因？優雅にホットミルク飲んでたら時間過ぎてただけです。すみません。

しかし、努力の甲斐もありなんとか間に合いそうだ。

やりやあできんだちくしようめ！

「ふーっ……間に合ったあー！ギリギリセーフ……」

なんとか教室の前までたどり着く。

どうなることかと……

「いっふっー！」

安堵したのもつかの間背中に衝撃が走る。

……いってーな、誰だよ。

少しはギリギリセーフの喜びに浸らせろっつーの。

…最初から余裕持って来いって？
やかましい…正論だ。

「またやつてもうた…おたんちん…」

なんだお前か。おたんちん娘（仮）

ちやんと前見ろよな。つたく。

…そうだ、ちよつとからかつたるか。

「いや、すまん…おっしやる通り…」

おたんちんだったわ…」

「あつ！違うんです！違うんです！おたんちんっていうのは自分に向けて言ったのであつて…決してバカにしたわけではなくて…」

あはは、面白いなこやつ。

「いーよいーよ、気にしてへんから…それよりプリント…大惨事になってっけど…」

「ああつ！」

「また先生に頼まれたのか？」

「は、はい…」

どうでもいいけど、何で敬語なん？

この子。

「断りやええやんそんなん」

「え、でも…」

いるよな。頼まれたら断れないやつ。

「まあいいや…ほれ。」

「あ、ありがとうございます！」

「そんなかしこまんよ…同い年だし同じクラスだろ？えつと…阿佐ヶ谷さん。」

「あ、朝日です…」

「あ、そうだっけ？わりーわりー…つとこんなことしとる場合じゃねーな。先生が来ち

まう。」

「あ、あの…」

「ん？」

「先生…遅れるみたいです。なので私が

代わりにプリントを頼まれて…」

「フアツ!？」

ちよ待てや…。

「ええー…まじでえ？」

「ま、まじです。」

言わんでええねん。

俺の過去一の全力疾走と達成感とその他諸々返せや。

「星川、遅刻ー!」

「残念だったな、先生来んの遅れるらしいで。つかワンチャンギリセーフやろ。」

「言いつけてやろうよ」

「ねー!」

「メロンパンか？バンオーテンのココアか？何が欲しい？言ってみなさい。購買何でも揃ってっから」

このように　いじられるのが　ふえてきた

一句詠んじまったわばかたれ。

そうなんすよ。

最近ね、女性陣に弄られつつあるの。

打ち解けてきたってプラスに考えるべきなんでしょうけどね…何度も言ってるが俺はさらっさらそんな気はないわけで…ホントに困りますよ。

「やっと終わったー！」

「えっ？」

誰だ俺とシンクロしたのは…

「えと、宇田川…だっけ？」

「いかにも！我は…えっと…漆黒の深淵より舞い降りし…」

「言わせねーよ？」

「ええーっ!？」

「そういうのが好きなんか？漆黒とか…闇とか…」

「うん！何だかカッコよくない？あこ、カッコイイのが大好きなんだ！」

へえ、フツー女子だったらかわいいものが好きってのがセオリーなはずだが…

「しかし、見事にシンクロしちゃったな」

「そーだね！」

「授業大変じゃね？ついていけてる？」

「大丈夫！あこにはロゼリアで鍛えた…なんかこう…すごいパワーがあるもん！」

大丈夫じゃねーなこりや。

…人のこと言えないって？

…やかましーわその通りだわ。

てかロゼリアってなんやねん。

「ところでさ、カッコイイのが好きならそういう感じの本をこの前見かけたから買ってみれば？」

「本当に!？」

「ああ、クトウルフ神話…だかなんだかよくわからなかったけど…たぶんそういう闇系のが載ってると思うぞ？」

「今度みるね！ありがとー！ゆうくん！」

「お、おお…」

なんだ…いい子じゃねーの。

ちよつと変わってるだけで。

「星川くん。」

「あ、先生。」

「後で職員室に来るように。お話があります。」

「」

「どーしたの？ ゆーくん。」

「ちよつと先生とお話してくるわ☆」

君はそのまま純粹なままでいなさい。

女子もバンドをやる時代

月日は過ぎ、早いものでもう4月も終わりである。

待ちに待ったゴールデンウィークという

やつ…なのだが…

「はぁーっ…」

素直に喜ばれへんわ。

確実に襲いかかってくるであろう五月病。

中間テスト。極めつけは文化祭。

連休明けはすなわち地獄の幕開けなのである。

夏休みまでがくそ遠い。

クラスの連中は呑気なものでゴールデン

ウィークの予定を言いあたりしている。

いいね、キミたちは予定があつて…

俺は予定もないしお金もないよ。

バイトはする気になれないし、接客とかイヤだし。

「星川は何か予定あるの?」

そらきた。

「俺ー?ないよ。」

「だよね、家でずつと寝てそう。」

失礼だなキミは…凶星だわ。

「お前らはー?」

「私達は Roselia の主催ライブに行くんだ!」

「ライブ? Roselia だってなんだ?」

どっかで聞いたことある気がするが…

「えっ、知らないの!?!」

「知らん。」

「宇田川さんが所属してるバンドだよ! すっごい人気があつて今度ライブを主催するの。」

えっ、あいつバンド組んでるの?

ってかバンド？

「あいつすげーな…女子でバンドってなかなかハードル高くない？」

「知らないの？今は女子もバンドをやる

時代なんだよ？」

「ほーん、そうなんか。」

楽器やらバンドってのは男っていう

イメージが先行してたから…ちよつと意外だな。

「大ガールズバンド時代って言われてるよね？」

なんじゃそら…大航海時代みたいになつとるやんけ。

「お前らは？楽器やったりしてんの？」

「私達はやってないけど…このクラスにも結構いるよ。楽器やつてる子。」

「へー。」

主催ライブねえ…わざわざゴールデンウィークにご苦労なことで。

いずれにせよ俺には関係のない話だ。

勝手に盛り上がりつつといってくれよな。

「優、優！起きてっつてば！」

微睡みの中誰かの声がする。

もうちよい寝かしてくれ。

「あれえ、戸山じゃん…どしたん？」

「もう…とつくに下校時刻だよ？」

「ああ、そうだった…帰ろうとしたら力尽きたんだ…」

「起こしたから、私達ももう帰るよ。」

「おお…」

つてよく見りや朝日もいるやんか。

結構一緒にいるの見るけど仲いいんだな。

「じゃー俺も帰るかね。」

「宿題、忘れないようにね。」

「わかってるって…誰に言っただよ。」

「この前も怒られてたじゃん…」

「そうだっけ…てか、量エグくね？」

「無理なくやればできる量だと思うよ。」

まさか、宿題があるとはな…とんだ大誤算である。

クラスの連中、殆どが遊びに行く言うとったけど大丈夫なんか？

特に宇田川とか。そういうやライブやるとか言ってたっけ。

「話変わるけどさ、宇田川のやつバンド組んでるらしいな。」

「うん。Roseliaってバンド。連休中にライブがあつて、私と六花も行くんだ。」

「あ、そうなん？」

そりゃまた意外だな。

「優は行かないの？」

「まさか、人の多いところは苦手なんだな。」

それに、女性ばかりが来るに決まつてるし。

「朝日、戸山とはぐれんなよ。」

「う、うん！」

「じゃあね、優。」

「ああ、楽しんでな。」

今回はじゃない。

これからもだ。

ライブには行くつもりはない。

俺はもう…ギターをやめたんだから。
思い出させないでくれ。

その熱は

本日は5月4日の土曜日。天気は快晴である。

「んーいい朝だ…」

時刻は12時35分。

うん。朝じゃないね。

母ちゃんさー何で起こしてくれへんの？

どっか行つてんのか？

星川家の飯担当は基本俺になっている。

なのでいつもは起こしにくるはずなのだが…

居間へ行くと案の定書き置きがあつた。

『優へ お茶しに行つてきます。勝手にご飯作つて食べててね☆』

☆はいらねーぞおばさん。

『出勤！パステル＊レンジャー！』

「…レンジャーってピンクしかおらんやんけ…」

他のメンバーどこ行っただよ。

…って何テレビに一人でツツコミ入れてんだ俺は。

しようもな。

くっそ…宿題さえなければな。

いや、やろうとはしたんすよ？一応。

その前にまずは部屋の片付けだと意気込んだのが運の尽きだったね。小学生の頃にやったゲーム（RPG）を見つけてしまってもう大変。

いやー久々にやると面白いんだこれが。

うーん…いうてあと3日も休みあるし

あとちよつとくらいはやってもいいんでないか？

話的にもいいところだったし…

モヤモヤしたままだと宿題も手につかんやろ。

「ん？」

携帯にメッセージが入っていた。

クラスの女子か…何だろ。

『今日はRoseliaの主催ライブだよー！』

ホントに來ないの？』

Roseliaの主催ライブ？

誰が行くかっての。

ていうか今日だったんだ。

『あこちゃん出るよー！ドラマ凄いいんだって！』

今度は別のやつからだ。

あいつドラマだったのかよ…てつきり

カスタネット担当かと思ってたわ。

『もしかして、宿題終わってないの？（笑）』

また別のやつから…お前ら絶対一緒にいるだろ。

しかも内容…腹立つわー。

宿題？そんなもん楽勝だってんだよ。

星川優を見くびるなよ。

こちとら羽丘受かつとんじやい。

宿題なんぞちやつちやつと終わらせたるわ。

「ただいまー優…ってあら？」

「ノックしいや。」

「ごめんごめん…珍しいねえ、アンタが

勉強してるだなんて…」

「熱はねーぞ。」

「あら、そうかい？じゃあ今日の夕飯は

母さんが作るから…頑張りな。」

「んー。」

…そうか、もうそんな時間か。

夕飯までにもうひと頑張りするか。

…の前に、あいつらにメッセージ返して

なかったのを思い出した。

しかたないから返してやるか。

画面を開くとまた新たにメッセージが来ていた。

『Roselia 凄かったよー！来ればよかったのに』

ふーん、そんなに凄かったのか。

『人もたくさんいたよー！あこちゃんも

凄かった！』

宇田川も…ちゃんとできたみたいだな。

『宿題ガンバー！また学校で！』

見とれよ…今日中に終わらせたるからな。

『おつーおやすみ』

よし、これでええやろ（適當）

「終わったあ…」

長かった。いや、マジで。

…もう深夜の3時やん。

シャワー浴びて寝よ。

…それにしても、あいつら楽しそうだったな。

文面からでもイヤというほど伝わってきた。

それだけ熱狂できるものがあるっていうのはいいことだと思う。

…俺にだって確かにあつたんだ。

その熱が。

けれどそれは…その熱は…今はクローゼットの中に押し込められている。

忘れてしまった感情

連休明け。起きて学校まで普通に来た俺を褒めてほしい。

予想通りというべきか校内は Roselia の主催ライブの話で持ちきりであった。皆が皆、目を輝かせてベースがキーボードがドラムがギターがボーカルが凄かったなと熱弁している。

この羽丘には Roselia のメンバーが宇田川の他にあと2人もいるそうだ。リサ先輩にユキナ先輩というらしい。

思いのほか身近にいたものだ。

まあ、バンド組むなら同じ学校の人と組むのは当然っちゃ当然か。

行きたくねーな…クラス。

絶対あいつらうるさいもん。

「おはよう、優。」

「おーす、戸山に朝日。」

「おはよう。」

お前らは落ち着くわ。騒がしくなくて。

「朝っぱらから Roselia、Roselia って騒がしいよなあまったく…」

「凄かったよね、六花。」

「うん！」

っってお前らもかい。そういやそんなこと言っとな。

「っーか宇田川がドラムって…ちよつと

びっくりだよな。」

「あこちゃん…凄く楽しそうにドラム叩いとったよ。」

「へえ…」

緊張つてものには縁がなさそうだからな…あいつは。

「朝日のような田舎っぺには良い刺激に

なつたんじゃねーの？」

「うん…私も頑張らんと…」

頑張るって？

っっていうか今ちよつとバカにしたんだけど…

「優は何してたの？」

「俺？俺は……世界を救ってた。」

「ええっ!？」

「六花……たぶんゲームの話だよ……」

「大変だったんだぞ、マジで。」

「はいはい……宿題はちゃんとやったの？」

「もちろん。」

この子、最近は俺の保護者になりつつある。

別にそんな心配せんでもいいのに。

「……其方らの召喚に応じてドーン！」

噂をすれば、時の人となった大魔姫（自称）が現れた。

……お前、そのくだり前もやってなかったか？

「あこ、おはよう。」

「おはよう、あこちゃん。」

「おっすー。」

「おはよー！」

朝から元気いっばい全速前進全開だな

こやつは。

「ライブ、楽しかったか？」

「うん！あこもだけどね！リサ姉も

りんりんも紗夜さんも友希那さんもみーんなノリに乗っててやっててすっごく楽し

かったよ！」

「よかったなあ。」

「優も今度ライブする時は見に来てよ！」

「ああ、行けたらなあ。」

行かんと思うけど。

「星川君、悪いけど帰りに職員室まで来てもらえる？」

だつる…。

どうせまた何か頼み事なんだろう。

あの先生、生徒パシリすぎ問題。

まあ、大体俺か朝日なんだけど…

俺はもっぱら力仕事担当である。

先生…俺は肉体派じゃあないんすけど…

体力ないし。

「ごめんなさい、ちよつといいかしら？」

「んあ？」

誰だよ…つて…すっげえ美人…！

声をかけてきたのは腰まで届くであろう

銀髪を垂らした凛とした顔つきの美人さんであった。

「な、なんででしょう？」

こんな人初めて見たけど…上級生…だよな？

何でこんな一年生の階にいるんだ？

「職員室の場所を聞きたいのだけれど…」

「えっ」

職員室…つてうそやん。

この人転入生か何かか？羽丘に来て日が

浅いとか？それを言うなら俺もなんだけど…。

「あ、えっと、俺もちょうど職員室に用があつて…一緒に行きます？」

「ええ、そうさせてもらうわ。」

「……………」

やつべー…物凄く気まずいんですが…

さつきから全然表情変わらんし…

表情筋…鍛えたほうがよろしいのでは？

美人だが落ち着いた佇まいに無表情なのもあつてちよつと近寄り難い雰囲気があつた。

「着きましたよ、ここです。」

「ありがとう、助かったわ。」

なんだかんだ美人さんにお礼を言われるのは悪い気はしない。案内した甲斐があるというものだ。

「お願いね、星川君。」

「はい。」

頼まれたのは案の定力仕事であった。

速攻終わらして帰るか。

「湊さん、バンド活動をしているんですってね？」

「ええ。」

「やるのは構いませんが、こういった

課題もこれからはきちんとかこなしてくださいね。」

「ええ、以後気をつけます。」

あの人…湊さんっていうのか。

どうやら忘れてしまった課題のプリントを出しに来たらしい。

…しかし、どいつもこいつもバンドバンドって…

一体何があるっていうんだよ？

バンド活動のその先に…。

そんなの、ただの自己満足だろ？

頼まれた用事を済ませ帰る頃にはもう

夕暮れ時であった。

「はあーっ…」

誰やねん…俺とため息シンクロしたやつ…

前もあつたなこんなこと。

「つて朝日かよ。」

「あつ、優君。」

こいつ、こんな遅くまで何やってんだ？

「今、帰り？」

「ああ、先生にまた頼まれ事してよ…生徒をパシリすぎだよなまつたく…」

「大変やったね…」

「一緒に訴えようぜ？ブラック教師って…そんなだから彼氏の一人もできないんだってな。」

「そ、そんなん言ったらあかんよ…」

「で、朝日はこんな遅くまで何してたん？帰らんの？」

「私は…ちよつと…」

「ふーん…何か知らんけど頑張れな。」

「んじゃ。」

「う、うん！」

憂鬱になる。

忘れたはずなのに…。

何故音楽に関する話題ばかりが俺の周囲で繰り広げられるのであろうか。

勘弁してほしい。

…昔は好きだった。

子供ながらに文字通り音を楽しんでいた。

楽しいという感情をストレートに弦に乗せて掻き鳴らしていた。

楽しい……か……忘れちまったなあ……そんな感情。

出会い、始まり

小学校の入学祝い。

何が欲しいかと聞かれた俺は最新のゲーム機とソフトが欲しいと言ったのを記憶している。

数日後、何を間違ったのか俺の部屋に置かれていたのは一つのギターであった。

騙されたと思ってやってみるとは父親の弁。

何でも昔ギターを弾いていたらしく、その楽しさを俺にもわかってほしかったらしい。

飽きたらまた欲しいものを買ってやるからと俺は渋々、父親に教えられながらギターをやり始めた。

最悪だった。血は出るわ：マメはできるわ：

かつての相棒に対する最初の印象はとにかく最悪だった。

本当に騙されたのだと思い、やめてやろうと思った。

そうか、やめるか：という父親の顔が心底ムカついたのでコイツだけは抜いてやろうと必死に必死に練習した。

いつしか、欲しかったものに興味がなくなっていることに気づいた。

本当の意味で父親に騙されたのだというのは間違いはなかった。

気づくとその父親よりも上手くなっていった。

元々俺なんか大したことないという父親のしてやったり顔がこれまたムカついた。

結局俺は掌で踊らされていたに過ぎなかったのだ。

そんな俺を幼馴染みも褒めてくれた。

ギターを弾いている俺をカッコいいと

言ってくれた。

その子もピアノを習っていたから一緒に

合わせて弾いたりもした。

『将来はミュージシャンになりたいりするの?』

『うん!なるよ!』

その質問にも自信を持って答えられた。

まだまだ世の中を知らないガキだったけれど、その頃の俺は本当にそう信じていた。

勉強もできなかつたし、運動も散々だったが両親はそんな俺に特に何も言わなかつた。

た。

ギターを取り上げることもしせず、

それどころか幼馴染みの通うミュージックスクールになるところに無理やりブチ込まれた。

個人レッスンであり、今さら教わることでもないようなことばかり教えられたので講義は非常に退屈なものではあったが…。

例えるならば小学校の高学年でたし算やひき算をやるようなものだった。

その退屈だった鬱憤を晴らすかのように

他の専攻のやつらと呼ばびつけてソロライブを行ったりもした。

一種の名物にもなったりしてたりしたっけか…。

『引つ越すなんて聞いてない！何で何も

言わなかったんだよ！優！』

だが、そんな日々も長くは続かなかつた。

父親の転勤で引つ越さざるを得なくなつたのだ。

『優ー！行くなよ……！』

心配をかけまいと直前まで言わなかったがどうやら逆効果だったらしい。

幼馴染みはわんわん泣いていた。

顔が涙と鼻水でぐしゃぐしゃだったのが

おかしくて笑っていたら怒られてしまった。

俺はただ一言だけ言い残した。

『また一緒に弾こうね。あーちゃん。』

あの頃の幼馴染みは今元気になっているのだろうか…。

物凄く人見知りだったから周囲から浮いてしまったりはしていないだろうか。

正直怖い。

あの人に会いに行くのが。

事実、俺は越してきてから会いにいけないでいる。

怖いから。あの人の今を知るのが。

：俺の今を知られるのが。

俺が弱くなかったら：胸を張って会いにいったのかな？

いや、弱くないんなら：そもそもここに

逃げてきたりなんかはしていないか。

大魔姫の姉

「あのさ、ちよつといいか？」
始まりはその一言であつた。

えつと…どなたですか？

こちらのイケメンは。

一瞬、男子生徒かと思つたわ。

背丈も俺とそんな変わらんし…

深紅色の髪を腰まで伸ばした

長髪の女子生徒。

まず、間違いなく上級生であろう。

そんな人が俺に何の用なのであろう。

いつかの湊さんだっけ？彼女のよう

迷子つたわけでもなさそうだし…

『今からアタシと決闘しようぜ!』とでも言われるのだろうか。

ありえなくはない。

うん、他をあたつてくれ。

リアルファイトはまじ無理。

勘弁してちよ。

ぼく痛いのキライ。

勝てないケンカはしない主義。

「そんなに固くなるなよ。ちよつと相談があつてさ…」

相談? 初対面のはずですが…

「(こ)じやなんだし、ちよつと屋上にでもいかないか?」

あつ(察し)

これ終わったやつですな。

屋上ですか? 屋上で何するんですか?

決闘ですか？ 制裁ですか？

今度昼飯奢るんで許してください。

学食は高いので勘弁してください。

そもそも俺何かしましたっけ？

授業も真面目に受けてるし、先生の頼み事も快く引き受け、女子にも優しくしている。もうダメだ。思考がまとまらない。

お母さん。お父さん。

未だ会えずにいる幼馴染。

1年A組の皆さん。

星川優を知るすべての皆さん。

俺は今日プライドというプライドを粉々にされるかもしれない。あしからず。というか助けて。

「悪いな！急に付き合わせて。」

「あ、いえ……」

「そういえば屋上には初めて来たな。」

「絶好の昼寝スポットなので是非とも」

「入り浸りたいんだけど……さすがに他の」

「生徒達の邪魔はしたくない。」

「そういうこともあって屋上は利用していなかったのだが……なかなか良い所じゃないか。」

「陽当たりも風当たりもいい。」

「そ、それで……ご相談というのは……？」

「ああ……つと悪い。まだ自己紹介もしてなかったな！アタシは宇田川巴。」

「ほ、星川優です。」

「そっか、優って言うのか。よろしくな！」

「そう言っただけの背中をバンバン叩く。」

「めっちゃ痛い。」

「あこと同じクラスだったよな？」

ん？何故ここであいつの名が…

「あこって…宇田川あこですか？」

口に出して気づいた。

まさか…

「ああ！アタシの妹なんだけどき」

「お、お姉さんですか!？」

ぜんっぜん似てねえ！

失礼を承知で言うが1ミリも似てねえ。

義理の妹とかいうオチはありませんよね？

「最近のあこの様子を知りたくてさ

こうして優に付き合ってもらったわけなんだ。」

なるほど…本当に相談だったのか。

「よかったあ…」

「ん？よかった？」

「いえ、なんでも…それで、あこさんの

様子でしたっけ？」

「ああ！」

「そういえば最近、一人でぶつぶつ言っていることが増えましたね。」

いつもと違うというか。

「いつも、我が身に宿りしなんちゃらが

バーン！とか言ったりしてるんですけど…最近は何かなくなりましたね。」

「そっか…」

「なんか、悩んでるんでしょうか？」

あつたほうがいいとはいわないが

あの口上を聞けないとなるとそれはそれでちよつと寂しい気もする。

ほんのちよつとだけだけどな！

「あこのヤツ、カッコいいものに憧れててな。」

「あ…それはなんとなくわかります。」

「その…なんていうか…その中にはアタシも含まれてるらしいんだ…」

さすがに恥ずかしいのか、少し顔を赤くして巴さんは話す。

ちよつとかわいいとか思っちまったよ！

畜生！

「それで、そのカツコいいっていのを

具体的に説明するにはどうしたらいいかってわけで悩んでいるみたいなんだ。」

なるほど。

…いや、無理じゃね？

人間無理に短所を克服しようとせず、長所を伸ばすべきだと思う……あれって長所なのか？

「アタシは今回力になれそうになくてさ……アタシの幼馴染が手伝ってくれてはいるんだけど……」

手応えはさほどって感じなのかな。

「やっぱり、そういうのは男子のほうが

詳しいのかなーと思つて優に話しかけたんだ。」

そういうことか……だから俺に。

はあ……仕方ない。

乗りかかった船つてやつだ。

「そういうことなら、俺でよければ力になりますよ。」

「ホントか!？」

わあ近い。近いっす。

「俺も男ですし、あいつの気持ちはわからんでもないんでね。」

俺にもカツコいいものに憧れた時期はある。

「悪いな！助かるよ優！あこのヤツ、良い友達持ったな…これから仲良くしてくれな
！」

友達か。友達なのかな？

まあそういうことにしとくか。

…嫌いではねーし。

超カッコいい追求大作戦

「んー…」

俺は悩んでいた。

『俺でよければ力になりますよ』

ドヤ顔かましてそう言ったまではよかったのだが…

星川優、清々しいまでのノープランである。

「どうすつかなー…」

カッコいいってのを具体的に説明だろ？

そんな宇田川をふと夢想してみるが…

「なんかやだな…」

推しだった清廉潔白を謳うアイドルが実はタバコ吸ってましたみたいな。

そんなのはあいつじゃないよなあ。

無理にアイデンティティーをぶっ壊す必要もないのではないか？という疑念に駆られる。

いや、でも…あいつも殻をやぶろうとしてることだし、ここはやっぱ協力するべきか

：

それとなくあいつから聞き出して助言するってのが一番なのかな。

間違っても、お前の姉ちゃんから相談受けてよーなんてことは口が裂けても言わないが。

「どうしたの？ぶつぶつ言って…」

「おっ！お二人さん…いいところに来た。」

戸山に朝日：…この二人は宇田川と結構仲良いからな。

建設的な意見が聞けるかもしれない。

幸い宇田川もまだ来てないことだし。

「いやさ、実は昨日宇田川の姉ちゃん…」

巴先輩って人から相談を受けてな」

「巴先輩？」

「aftergrowさんの人やね。」

「あふたーぐるろう？…もしかして、バンド組んでる系？」

「うん、aftergrowさんってバンドの

あこちゃんと同じドラム担当の人なんよ。」

じゃあ、姉妹揃ってドラマーなんか。

ていうかバンド名超かっけえなおい。

そんなネーミングセンスがほしかったものだ。

と、話が逸れたな。

「あいつ、自分の思うカッコいいってのを詳しく説明できるようにーって試行錯誤して
るらしいのよ。」

「そういえばあこ、この前そんなこと言ってたような…」

「そのカッコいいって中には巴先輩も含まれてるらしくて…自分は協力できないけど何
とかしてやりたい…そこで俺に相談したららしいのよ。」

「それで、優は引き受けたんだ？」

「まーな。これでも一応男だしな。だから、巴先輩も俺に相談したんだと思うし。」

「なるほど、だから唸ってたんだ。」

「え？俺そんななってた？」

「うん。あーとか、んーとか言ってたよ。」

「それは忘れて。」

だって難しいんだもん。

「あ、ちなみにこのこと宇田川には内緒な。」

「わかってる。」

「でさーなんか良き案ないかなあ…」

「うーん…難しいね。」

「あこちゃん、この前は Roselia のカツコよさを伝えられるようになって言ってたよね?」

「そうだね。」

「となると、カギになるのは Roselia か…。」

うーん、困った。

非常に困った。

俺、Roselia のこと何も知らねー。

「おはよー!」

そんな中来てしまった物語の主人公。

宇田川あこ。

こいつの執筆した小説読んでみたいわ。
擬音祭りになること必至である。

ドーン！とかバーン！とか

「…宇田川、最近いつものアレやらんなあ。」

「え？アレって？」

「…ふっふっふ、皆の者！待たせたな！

闇より顕れし大魔姫あこさんじょー！

ドーン！

…みたいなヤツ。」

刹那、教室の音という音が消え、俺の声だけが虚しく響く。

数名の女子が大丈夫？保健室行く？みたいな顔してたのは納得がいかん。

なんで示しあわせたかのように黙るねん

お前ら。

それで、宇田川には寛容なくせに俺には
理不尽なんだなお前ら。

「あこね、カツコいいって言うのをもつともつと色んな人に知ってもらうにはどうしたらいいかなーって考えてる最中なんだ！」

「そ、そうか。」

誰か、誰か俺のメンタルケアを早急に！

ちなみに戸山達は察してくれたのか、席をはずしてくれた。

「それでね、あすかやろつか達をびっくりさせてあげるんだ！」

「うんうん。」

「モカちゃんにも協力してもらってるんだけど、中々うまくいかないんだー。」

「モカちゃん？」

「うん！おねーちゃんと同じクラスの人。」

そうか、幼馴染にも協力してもらってるって言ってたっけ。

「もしかして、aftergrowってバンドの人か？」

「うん！そーだよ！優、おねーちゃん達のこと知ってたの？」

「ま、まあ噂くらいはな。」

モカちんって人ともコンタクトを取る必要があるか…。

「…俺も協力してやろうか？男子の意見も取り入れる価値はあると思うぞ。」

「ホント!?!ありがとー優！」

手を握るな手を。男子なんだからな一応！

「題して、超カッコいい追求大作戦ってとこか。」

お前の言うカツコいいってやつを

俺にとって、平日の昼飯というのは戦争である。

すなわち購買のパンを買うこと。

学食はあるにはあるのだが値が張るので

基本却下だ。

俺のお小遣いでは手が出ない。

食うより寝ることが好きな俺だが、腹減りのまま寝るのはイヤだ。

弁当を作ってくれば済む話なのだが、母ちゃんは作ってくれんし、俺もギリギリまで睡眠したい勢なのでこれも却下。

前置きが長くなったが、ここでパンを奪取できるかどうか俺の今後を左右するといふことになる。

だが、よく考えてみてほしい。

当たり前だが売店は混雑する。

女子が殺到する。

そんな中俺が割って入れる隙があるだろうか？

結論。ありません。

だつてさ、うっかり女子の身体に触れてみ？

セクハラだ変態だなどと糾弾された日には俺の居場所がなくなっちゃうのよ。

俺のモットーは平和に過ごすこと。

最近はこちらと色々な人と交流を深めていつてる気がするが…そこはブレちゃいかん。

結果、昼飯⇨運ゲーと化す。訳ワカメ。

大抵は残りモノがあつてくれるんだが…

「…ない。」

「いつも大変だねー。」

「はは…」

売店のおばちゃんの励ましにも乾いた笑いしか出ない。

くそ…今週の戦績は3勝2敗か。

誰だよ残りモノには福があるとか言った

ヤツ。

なんもねーわアホたれ。

「お困りかね〜？ 青少年よ。」

「はい？」

泣きそうになっていると後ろから間延びした声が聞こえてきた。

誰だ…今の俺は気がたつて…

「つて多っ!？」

立っていたのは両手いっぱいパンを抱えた女子生徒だった。

いや、両手いっぱいパンを抱えたつて

何やねんつてツツコミが入るだろうが、

これマジな？

どんだけ買つてんだよ！

ただいま絶賛お困り中ですよ…アンタが

たくさんパンを買ったせいだな。

そもそも食いきれんのかそれ。

「二つ差し上げよう〜。モカちゃんからのプレゼント、ありがたく受けとるがよい

ぞー。」

そう言つて一つパンを差し出してくる。

「えっ…いいんですか？」

「もちろんだとも〜。」

マジで？この人女神か何か？

「…ありがとうございます。」

さっきは悪態ついて申し訳ない…モカちゃんとやら…

ん？モカちゃん？

「えつと…いきなりつかぬことをお伺いするんですが…宇田川あこつて女子生徒の子知ってますか？」

「あこちゃん？もちろん、知ってますとも〜。」

やっぱり…宇田川の言つてたモカちゃんつて恐らくこの人のことだな。

「もしかして、aftergrowつてバンドのメンバーの方ですか？」

「ご名答ー。aftergrowのギタリスト、青葉モカちゃんとはあたしのことよー。」

「…ギタリスト。」

「…およ？どうかした〜？」

「…ああ、いえ…何でも。」

「君かね？トモちんの言つてた優君というのは〜。」

トモちゃん…巴先輩のことかな？

「ええ、宇田川あこのクラスメイトやってます。星川 優です。」

「よろしく。」

「あ、こちらこそ。」

なんか、この人の喋り方といい声といいクセになる。

良い意味で。

しかし、ギタリストとは。

人は見かけによらないな。

ギターを持つと性格が変わったりするのだろうか。

「最近あの子、カッコいいを伝えたいとかなんとかって張り切っちゃってましてねー…

先輩も相談に乗ってるとか聞きましたけど…」

「うむ。モカちゃんは国語が得意だからね。」

全然そうは見えんが、失礼ながら。

「なんだかんだ、俺も協力することになりました…先輩に会いたいとは思ってたんです

よ。」

「モカちゃんに会いたいとは…なかなか

情熱的ですな。」

「や、そういう意味ではなくてですな…」

なんちゅう勘違いしとんねん。

「ていうか、パン抱えたまま話すのもアレですし…またの機会にしますか。」

「そうですなく。またね〜優ちゃん。」

…優ちゃん？

「よー何描いてんだ？」

「…ふっふっふ…我「なになに…超カッコいいロゼリア！大饗宴の始まり？」」

「もー！言わせてよー！」

「いやー、ついやつちやうんだよ。わりーな。」

お約束ってやつだよ。

宇田川のやつスケッチブックに何描いてるのかと思っただら…そこまで真剣だったとはな。

「あすかやろつかには内緒だよ！」

「わかってるって…で、どうよ？形になりそうか？」

「うーん、もう少しで形にはなりそうんだけど…」

「ふーん、お前本当に Roselia が好きなんだな。」

「うん！あこ、Roseliaのみーんなが大好き！」

「そうかそうか。」

Roseliaのことは全然知らねーけど、こいつがRoselia好きーつてのはめっちゃ伝わってくるんだよなあ…。

「じゃあ、見せつけてやろうぜ。」

「え？」

「お前の言うカツコいいってやつを。みんなにさ。」

「いいね！それいい！」

「やるんならド派手にだな…お前も好きだろ？」

「うん！」

「aftergrowの人達とか戸山や朝日に声かけてさ、どつかに集まってもらおうや。」

「そこで我が大魔姫あこの真なる饗宴が始まるというわけか…」

それは知らねーけど。

「わかった！あこ、休日でこのスケッチブック仕上げてくる！」

「ま、頑張れな。」

「うん！りんりんにも協力してもらおうから！たぶん大丈夫だよ！」

りんりんって、確かRoseliaの…。

ということは少なくともこいつのこれはRoselia公認ってわけか。
一体どんなバンドなんだよRoselia。ちよつと気になってきたわ。

「ありがとね！優！」

「別に、俺何もしてねーけど…」

巴先輩に頼まれたからだかんな。

そこんとこ勘違いするなよ。

ちよつと嬉しいとか思っただけからな！

大饗宴という名の公開処刑

月曜日の昼休み。

学園の曰く付きの井戸がある場所。

そこが饗宴(?)の場となった。

「おーい、みんな来たっぼいぞー。」

戸山に朝日に巴先輩、モカちゃん先輩。

…と、あと一人知らない人がいる。

誰だろ？

黒髪の一部に赤いメツシユを入れた

女子生徒。

ぶつちやけるとめつちや怖い。

あの人もAftergrowの人…だよな？

「ふっふっふっ…」

「えー皆さん、お時間のない中お集まり

頂き誠に感謝です。」

「もー！言わせてつてばー！」

ばかたれ。打ち合わせしただろうが。

変なアドリブ入れずにその通りにやらんかい。

時間ねーんだつてばよ。

「モカ、あの人は？」

「あこちんのクラスメイトの優ちん。」

「へえ…男子なんていたんだ。」

ですよねー。すみません。

異物が紛れ込んでいますして…。

「大丈夫。優ちんは健全な

男の子だよ。」

モカちゃん先輩、言い方。

どちらとも取れるからねその発言。

誤解だからね？名も知らぬ赤メツシユ

先輩。

まあいい……気を取り直していくか。

「……えーと、ああ？」

宇田川が作成した（恐らくりんりんという人も協力したと思われる）台本に目を落とすが、内容を見て思わず固まる。

俺の役目はこの台本を読み上げること。

なのだが……しかし、これは……

これを俺に読めというのか？

続けるように目配せするも返ってきたのは清々しいまでのドヤ顔であった。

おのれ……覚えていろよ。

「万古不易の闇より命ずるは共鳴——

我が叫——こえ——に共鳴せし、青薔薇の誇りを持つ者達よ——今ここにその姿を顕さん

!

…友希那さんのカッコいい呪文で *Rosealia* の皆がババーン！とさんじょー！

「仮初めの衣を脱ぎ、真なる姿を！」

えーつと…さ、紗夜さん？リサ姉、りんりん、そして大魔姫あこが雷と共にドーンと出てくる！」

ごめん…やっぱりもう帰っていい？

メンタルに計り知れないダメージを負いそうなので…ていうかもう負ってる。

赤メツシユ先輩なんかはもうドン引きしてるもん。

ついでに言うとう戸山と朝日もドン引きしてる。

そういう目で見られてもゾクゾクしないからね？

追い討ちにしかないからな？

なんてこった…大饗宴とは名ばかりの公開処刑じゃねえか。
頼まれたって二度とやらんぞ畜生。

その後もメンタルにダメージを負いつつも

俺は廚二病全開な台詞を効果音を交えつつ

精一杯朗読した。

詳細は割愛する。

俺のメンタル面を考慮して。

「はあ…むっっちゃ疲れた。」

「…でね、紗夜さんのギターがジャーン！ってなって…あこの中の闇の力が覚醒して
ドーン！ってなってね…それからあこのドラムがドドドドドドコドコダウン！って感じ
で締めるの！」

「あ…盛り上がっているとこ悪いけど

ちよつといいか？」

「なにになに？」

「ツツコミ不可避。カオスすぎるわ。」

他でもない俺が置いてきぼりをくらってる。

「えー!」

「お前なあ、結局ドーン!とかダーン!」

とか擬音ばかりじゃねえか: Roseliaの

カツコよさを具体的に表現したかったんだろ?」

「うん!だからあこね!あこのカツコいいを形にするには Roseliaのライブの
カツコよさを伝えるのが一番かなーって思ったんだ!」

いや、だからな: それじゃいつも通りだよって話をしとるわけで: こう、何て言うの
かな? くそ、もどかしい:」

「皆さんはどうでした? Roseliaのカツコよさ、伝わりました?」

「何か: 闇の力がヤバいことだけはわかった。」

わかったのかよ!? 赤メツシユ先輩:」

あんた何者?

「あこちんワールド全開だったね。」

優ちゃんも気合い入ってたし。」

そこは触れないでくれ:」

「でさ、結局あこの言うカツコいって何? 闇の: 力?」

だよな？そうなるよな戸山？

ナイスツツコミ！

「えーっ!?それを今説明したのにー!」

うん、だからできてなかったんだよ…残念ながら。

「でも、Roseliaのカッコよさは何となく

伝わったかな…。」

そう言いながらもフォローは入れる。

そういうところしつかりしてんね戸山は。

確かにな…何となく…本当に臍気だけど、

カッコよさみたいなのは伝わったっちゃ

伝わったかな。

Roseliaのライブは観たことないけど。

「ん?…っっていうかRoseliaのライブを観たことないのって…もしかして俺だけ?」

「そうだったの〜?優ちん。」

「まあ、お恥ずかしながら…」

「アタシ達は一緒にライブしたこともあるぜ。」

「そうだったんですか…」

何だよ…あんだだけ息巻いといて俺だけがあまりピンとこないってオチかよ…なんじゃそりゃ。

「優も今度ライブやる時は観に来てよ！」

「あーわかった…結局、この目で直接観ないことにはわからないってことね。」

「そういうこと。」

「モカちゃん！おねーちゃん！蘭ちゃんも

聞いてくれてありがとうね！」

赤メツシユ先輩、蘭ちゃんっていうのね…

「優もありがとう！」

「いや、俺は別に…」

黒歴史増やしただけやぞ。

「みんな！次の時間移動教室！」

あ、そうだっけ？やべ。

「次の科目の先生、遅れると怖いよ！」

しーない走るか。

カツコいいに真摯に向き合うお前はほんのちよつとだけカツコよかったかな。

口には絶対出さないけど…。
願わくばそのままのお前でいてくれ。

生徒会長がアイドルだった件

「しっかし、びつくりしましたよ。」

まさか、つぐ先輩がAftergrowのメンバー

だったとは……」

「うん。あと1人ひまりちゃんって子が

いて、5人でAftergrowなんだ！」

「名前かっけえつすね…Aftergrowって誰がつけたんですか？」

「それは、巴ちゃんが。」

なるほど、納得。

「先輩はちなみに何の楽器です？」

「私はキーボードだよ。」

「へえ、キーボードですか。」

キーボードってピアノと似たような楽器だっけ。

その辺りの違いは詳しくないからよくわからんけど。

つぐ先輩のキーボードか：絵になるな。

ただいま俺がいるのは生徒会室である。

氷川日菜会長の襲来以来ちよいちよ

ここにお呼ばれするようになった。

殆どが雑談まがいな内容だが。

仕事せんでいいのかと毎回思う。

「はい、お茶どうぞ。」

「あ、いつもいつもすいません。」

そんな気を使わんでもいいのに

：つぐ先輩。

ああ、うまい：優しさが染み渡るわ。

つぐ先輩の優しみ。俺には勿体ないくらいだ。

まじ尊い。

癒し。

失くしてはならないこの空間この時間。

「あたしもバンド組んでるよ！」

「ぶっ!!」

…そう、この自由人さえいなければの話。
ていうか、バンド組んでるって言った？

「大丈夫!!」

「ああ、いえ…ちょっとびっくりして。」

生まれて初めてだわお茶噴き出したの。

「バンドですか？会長が？」

「うん！pastel*paletteってアイドル

ユニットなんだ！」

アイドルでバンド!?

まあ、確かにこの人美人っちゃあ美人

だけどさ…アイドルだなんて…

「またまたー盛りすぎでしょ。」

ねえ、つぐ先輩？」

「あはは…」

…あれ？

苦笑い？

つぐ先輩？

…否定しないの？

「…まじなんですか？」

「…うん。」

「ホントだつてばー！」

アイドルでバンドで生徒会長で？

ただ者じゃないとは思ってはいしたが、

予想に違わぬハイスペックガールだったわ…この人。

「じゃあ…テレビとかに出てたりするんですか？」

「うん！」

「…じゃ、じゃあ楽器とか弾いたりも？」

「うん！あたしはギターだよ！」

ギターかよ…：よりにもよって。

「先輩…ギターって思いの外難しいんですよ？」

弾けるんか？

「えー？あたしはすぐ弾けたけどなあ…」

弾けたのか！すぐ!?!いや、弾けてたまるか！

なんなのこの人？天才か何かの類？

恨めしいわあ、その才能。

「あたしのおねーちゃんもね、ギター

弾いてるんだ！」

「はあ…お姉さんいるんですか？」

姉妹揃ってギターとは…それはそれは仲がよろしいことで。

「うん！Roseliaのギターやってるんだ！」

「は!?!」

Roseliaの!?!

えつと…：氷川先輩がパステル何とかのギターでアイドルで…お姉さんがRosel

i a のギター？

情報量多杉内。

「お姉さんってことは…さよさんって人ですか？」

「うん！そっだよー！」

宇田川がいつも話してるわ。

さよさんって人の話。

しかし、それが氷川先輩…日菜先輩の

お姉さんとはね。

日菜先輩のお姉さんか…

大体想像つくわ。

日菜先輩以上の大物ってことだろ？

『るるるくん♪ってきちやった！』

多分、こんな感じか…やっべえ。

ぜってえ関わらないでおこう…。

いのちをだいたいじにが俺のモットー。

「でもさー良かったよ、優君も学園生活に慣れてきたみたいで。」

「まあ、慣れるもんなんですね…」

「この異空間にも。」

昔っから言われてるけど慣れって怖いね
やっぱし。

俺も感覚麻痺しつつあるもん。

「あ、そうだ！優君！週末に大きなライブイベントがあるんだけどさー優君も来てよ！」

いや、唐突だな！

週末って…

「明後日じゃないすか!?!」

「うん！」

うん！じゃなくて。

「もしかして、先輩のバンドも出るんですか？」

「そ、あたしたちの晴れ舞台！」

すげーな、さすがアイドル。

「頑張ってくださいね。」

「えー！観に来てくれないのー？」

「いや、もう間に合わんでしょ？」

色々と…あれとかこれとか。

間に合っても行かんけどさ。

「じゃあ今度！あたしたちがライブやる時は観に来てよ？」

「わかりました、わかりました。」

何だかどんだん逃げ場がなくなってる気がする俺。

pastel*palette

vo. 丸山 彩

Ba. 白鷺 千聖

Gt. 氷川 日菜

Dr. 大和 麻弥

key. 若宮 イヴ

からなる5人組のアイドルバンド。

今回のWIF（ワールドアイドルフェス）では

デビューライブでの苦い経験を払拭し、

真の意味での新たなpastel*paletteの活躍を期待したい。

「へえー…結構有名なのね。」

デビューライブの苦い経験って何かあったのか？

「は、日菜先輩マジでギターなんだ…」

あと、この白鷺千聖って…

一般常識に疎い俺でも知ってる。

女優さんじゃなかったか？

テレビドラマでよく見かけたことあるし。

バンドなんかやってたのか。

「そんなに楽しいのかねえ…バンドって…」

女優業の傍らバンドやってるってことだろ？

忙しさの極みじゃねえか。

そうさせる何かがあるのか？

そのバンド、*pastel*palette*には。

わからんなあ…。

当然か、ずっと一人で誰かと何かを

分かち合って成し遂げたことなんて

何も無いんだからな。

ま、頑張ってくださいや。

アイドルとして、バンドとして。
陰ながら応援していますよ。

バンドがやりたくて

「もう6月になるのか…」

季節は5月も終わりを迎えるかという頃。

羽丘に入学しておよそ2ヶ月が経とうとしていた。

何だかんだで早いものですなあ…この調子で夏休みまで一気に月日が経ってくれな
いものだろうか。

無事(?) 中間テストも終わり(結果はさておき) 残る大きなイベントは文化祭を残
すのみとなった。

これを楽しめれば念願の夏休みなのだが…それがまだまだ遠い。

「すこやかゴーゴー祭り?」

そんな中もう一つの大きなイベントの話題があがっていた。

6月始めの土曜日に商店街で大規模な祭りをやるらしい。何でも地域の商店街の活性化を目的とするお祭りだそうだ。

…名前には突っ込まんからな。

「うん！それでね、音楽発表会っていうのがあって、おねーちゃん達のバンドも演奏するんだー！」

「へー、Aftergrowが…」

「おねーちゃん、和太鼓も叩くんだよ！」

和太鼓…想像だけどめっちゃめっちゃ似合うな

あの人。

何となく祭り好きそうだし。

「そりやまた、一大イベントだな…宇田川

お前絶対見に行くだろ？」

「うん！あすかと優も行くよ！」

「ごめん、その日は塾あるんだ。」

「俺も予定ある。」

本当は何もないんだけど。

人混みは嫌いなんだな。

「そっかー…」

「朝日と行けばいいじゃん。」

「ろっかはGalaxyのスタッフだからダメなんだ。」

「Galaxy?」

「六花、ライブハウスのGalaxyっていうところでバイトしてるんだよ。」

「ライブハウス!?!」

あいつ、そんなところでバイトしてたのか…

「と、噂をすれば。」

その朝日が大量のプリントを抱え戻ってきた。

また先生にパシられたのだろう。

よくやるわ。

「ああっ!」

「ごめんね!朝日さん!」

あーあ…やると思った。

「何しとんねん…ほら。」

「あ、ありがとう…」

「一体何のプリントだこれ…文化祭の出し物?」

うわあ、めんどくせーのきた。

「うん、帰りのHRが終わった後に少し

時間を取るんやって。」

もうめんどくさい…早く帰りたいのに。

「で、先生…何で俺が文化祭の実行委員なんかやらないかんですか?」

「イヤだった?」

「はい、もの凄くイヤです。」

「はつきり言うね。」

「だって、完璧な人選ミスやないですか。仮にやるにしても最低あと一人はつけてくれないと。」

「それなら、やってくれるの?」

「まあ…それなら…」

もし、断ったら後が怖いだろうし。

相方つけてくれればそいつに丸投げすれば

いいっていうね、ゲス思考ですよ。

「話が早くて助かるわー！星川君。」

「先生、最近キヤラ崩壊してません？」

最初の真面目系敬語キヤラはどこいったんですか？」

「堅苦しいのは疲れるから…」

「なるほど、大変なんすね。」

至極どうでもいい。

「つて相方は戸山かい。」

「私じゃダメだった？」

「丸投げできないじゃん。」

「…ダメに決まってるでしょ。」

畜生、嵌められた。

あの先公まじでふざけんなし。

「えーとじゃあ早速、文化祭の出し物決め始めていききたいと思いまーす。」
もうちやつちやと終わらせよう。

「はい、じゃあ何か案ある人挙手。」

「お化け屋敷かなー」

「プラネタリウムは？」

「迷路とか？」

「薫様のクラスは薫様カフェっていうのやるらしいよ。」

「えっ！薫様が給仕って絶対似合うよ！」

「楽しみー！」

君らさあ、挙手って意味わかるかな？

それに俺、聖○太子じゃないからね？

そんないっぺんに言われてもわからんわ。

最後のほうとか話脱線してなかったか？

薫様って誰？

あと、戸山は何で全部列挙して書いてんの？

あれ全部聞こえたのかよ。

「じゃーもうめんどくさいからメイドカフェってことでいい?」

「何でそうなるの?」

「メイドカフェって言ったら定番だろが…」

もうお前らつべこべ言わずメイド服着ろよ。」

それで、ある程度の男性客は釣れるだろ。

「それじゃ星川も着るんだよ?」

「は?ちよまつ…何でそうなるんだよ!」

何その道連れ理論。

「いいと思うよ、メイドカフェ!」

「賛成—!」

「賛成の反対!お前らただ俺にメイド服

着せたいだけだろ!」

目的と手段が入れ替わってんじゃねーかよ!

「星川が言い出したんだよ?」

「それに関しては…すみません。」

謝るから勘弁してください、まじで。

「いいよ！メイドカフェやる！」

「良い案出してくれたよー！」

「さすが実行委員！」

何なお前らのその無駄な結束手。

「戸山、どうすればいいと思う？」

「諦めたほうがいいと思うよ。」

おいおい。

「宇田川！何か案ないか？」

「…ふっふっふ、よくぞ聞いてくれた…」

魔界より舞い降りし…大魔姫あこが其方の「あーごめん却下で。」

聞いた俺が間違ってたわ。

「えー！でも、あこもいいと思うよ！」

メイドさん！」

お前こら。便乗すな！

くそっ…こうしてまた黒歴史が増えるのか…

仕方がない、元々は自分で蒔いた種だ。

ボルテージは下がる気配がないし、受け入れるしかないか…

「あ、あの…」

「ん？」

そんな中おずおずと手が挙がる。

朝日か？どうした？

まさかお前…救世主になりうるのか？

俺の。

「朝日、何かある？あるよな？いいぞ！

遠慮せず言え！」

頼むぞ！朝日！メイド服なんか着てられるか！お前の案にかかっているからな！

もうおたんちんとかバカにせんから！

「セ…セツシヨンカフェっていうのは…どうかなって…」

「…セツシヨンカフェ？セツシヨンって

音楽やるってことか？」

田舎娘のわりに難しい言葉知ってるじゃねえの。

「うん、お客さんと一緒に楽器弾いたら

楽しいかなって…」

「セツシヨンカフェか…面白そうだね！」

「ね！いいかも！」

朝日、よくやった！お前まじ救世主。

「でも、楽器やら機材やらどうすんだ？」

自前の使うのか？それとも、音楽室の使ったりとか？」

「そつか…じゃあ音楽室の機材も使わせてもらおうよ！」

「星川、お願いね！借りられるか聞いてみて！」

「俺かよ…」

早く帰りたいんだってばよ。

「わかったよ、任しとけ…じゃあ会議終わりねー散会。」

放課後に音楽の先生に事情を説明し、無事許可を貰うことができた。

「つたくよ…何で俺が実行委員なんか…」

大体こんなつもりじゃなかったんだよ。

目立たず、誰とも関わらず、のらりくらりと立ち回るはずが…

「はあ…らしくねえ…」

どうしてこうなっちゃったんだか。

「ん？」

あそこにおられるのは…救世主朝日様では？

「よう、どうしたんだ？」

「あ、優くん。」

「今許可貰ってきたぞ。機材貸してくれるってさ。」

「あ、ありがとう！」

「いいってことよ、お前があそこで案出さなかったらどうなってたことやら…」

「でも…本当に良かったんかな？」

セツシヨンカフェって…」

「好評だったじゃねーか。それに楽器弾けるやつらだって結構いるだろ？そこら辺はお前らに任せるけどさ…」

あとは勝手にやってくれ。

「そういや、Galaxyってライブハウスで

バイトしてるんだってな。」

「うん。一応機材とかは一通り扱えるから。」

「何だってそんな大変そうなところで

バイトしてんだ？」

「えっと…それは…」

「それは？」

「わ、私…バンドがやりたくて…」

バンド…こつちへ越してきてから一体何度聞いたかわからないその単語。

まさか、こいつもか…。

「バンド、やりたいのか？」

「うん…親に無理言つて上京させてもらつたんやけど…メンバーが全然集まらんくて…」

え？ちよつと待て？

「上京させてもらつた？親の転勤とかじゃなくて？」

「うん…私、バンドがやりたくて…東京まで来たんや。」

そう言い切る朝日はいつもとは別人に見えて…

何だよお前…そんな顔もできるんじやねえか。

「親御さん反対しなかつたのか？」

「最初はされたんやけど、東京に行つても絶対大丈夫って認めさせてやるんやって頑張つたら…何とか認めてもらえて…」

…自分の意志で来たってことかよ？

バンドをやるために？

たったそれだけのために

見知らぬ土地に足を踏み入れたってのかよ？

「それでわざわざ岐阜からね…で、肝心のメンバー集めがうまくいつとらんと…」

「そうなんよ…」

「ふーん…楽器は？何やるの？」

「私は、ギターやけど。」

…まじかよ。

お前、ギタリストだったのかよ。

「そうか…ギターか…」

「優くん？」

「いや、なんでもね…頑張れよ。」

「うん！」

少し、ほんの少し…お前と会うのが早ければ…また違った未来があったのかもしれない。
い。

お前と…お前達ともっと音楽について語り合えた日が来ていたのかもしれない。
けど、ごめん。

それはもう無理なんだ。

欠けているもの

「寝た時に見る夢ってのは罪作りなやつだと俺は思う。自分が見たくもないものをわざわざ引つ張り出してきて強制的に観賞させるからだ。」

「夢なんだからもつとこう非現実的な」

「フアンタジックな夢を見せてくれてもいいと思う。」

「何故、現実にあつたことをリアルに再現してくるものかと毒づいた。」

「優、起きた?」

「ああ、おはよう…じゃねえな…悪い、晩飯作るよ。」

「大抵夢ってのは起き抜けに忘れていて、思い出せないことが多いのだが、今回ののは」

「格別に最悪だ。」

「まだ鮮明に残っている。おかげで気分は最悪。」

「大丈夫? あんた顔色悪いよ?」

「どうやら顔に出ていたらしい。」

「大丈夫。ちよつと今日はバタバタして疲れてんだよきつと。」

「そう? それならいいけど…何か行事とか?」

「ああ、今度、学園の文化祭があつてね。」

「へー文化祭…懐かしいねえ…。」

やはり、思い出に残るもんなんだろうか？

「母ちゃんは何か思い出とかあるの？」

「父さんがステージでギター弾いてね…その後すぐだったかねえ…俺の歌どうだった？つて。というか付き合つてくれ！つてどきどき紛れに告白されたのよ。」

そうだったのかよ…。初めて知つた。

あの親父ギターボーカルやつてたのか。

告白の結果は推して知るべしか。

俺がいるんだから。

「あんたもギター弾けばいいじゃない。」

「何でさ、イヤだよ。」

「楽器のこととかはよくわからないけど、父さんより全然うまいと思うよ。」

「…いいんだよ。」

「そうかい、もつたいない。」

もつたいなくなんかないさ。

俺よりうまいやつなんかいくらでもいる。

いや、うまいへタ以前の問題か。

「いつからだだったっけね…あんたがギター弾かなくなったのは。」

「もういいだろ、その話は。」

さつき見た夢の内容がフラツシユバツクする。

俺がギターを弾いていた頃の夢。

悪趣味な編集が施されたくそつたれなりアルな夢。

「ごちそう様。」

「食器洗つとくから、今日はもうゆつくり寝なさいよ。」

「ああ、ありがとさん。」

といつても、夢の続きを見せられそうぞ

寝るのも億劫だ。…いつから弾かなくなつたか…去年の夏の終わりだよ、母ちゃん。

その時に俺は大事なものを失ってしまった。

情熱を失ってしまった。

だから、俺は眩しく感じるのかもしれない。

俺に欠けているものを持っているあいつらが。

クラスの連中。

自分の好きなものに全力な宇田川。

明確な目標を持って、頑張っている戸山。

バンドがやりたくて数々の障害を乗り越え、未開の地に足を踏み入れた

…静かな情熱を内に秘めた朝日。

「どうしてだ？何でそんなに頑張れるんだ？」

疑問に答えてくれるものはいない。

眩きは虚しく虚空に消えるだけだった。

文化祭が何故か他校と合同になりました

「みんなー！花女と文化祭やりたい

かー!？」

「おおー!」

「はいはい。」

現在、生徒集会の真っ最中。

羽丘は本日も平和です。

花女って学校と合同で文化祭を

やるんだと。

理由？聞くだけ無駄だと思う。

「花女と文化祭やるぞー!」

「おおー!」

日菜先輩、あんたのカリスマ性は

大したもんだよホントに。

周りからは楽しみーという声が

ちらほらと。

いやさ…他校ですよ？皆さん。

何が楽しくて見知らぬ人達と文化祭なんかやらなきやいけないんだつちゆう話だよ。

しかも花女…正式には花咲川女子学園

というらしいが…よりにもよって女子校かい。

「はあ…」

女子の分母だけ増えるとか…俺に対する

いじめですか？そりゃあ女子だけって

部分を切り取れば楽園に見えるかもしれないけどさ…実際は地獄よ？

「ありえねーわ…」

「えー？あこは楽しいと思うけどなー？」

お前の意見は聞いとらんわ。

ていうか、いつの間にかいたんだお前は。

「俺は楽しくないの。大体向こうは賛成してんのか？」

「生徒会長がりんりんんだから、たぶん

大丈夫だよ！」

「りんりんって確かRoselia…」

りりんって人、生徒会長だったのかよ。
大丈夫なのか？

向こうは向こうで自由人だったりしないよな？

カオスだぞ？ そうなったら。

「紗夜さんもいるし、あー、すっごく楽しみ！」

紗夜さんって日菜先輩のお姉さんか。

同い年なのか…双子だったんだな。

もしかして、お姉さんがいるから合同とか言い出したのか？

あり得る…あの人なら。

あの人の姉好きは俺も知っているし。

るんっ♪ することおねーちゃんが頭の大半を占めているからな。

あれが二人いるのか…震えが止まらんわ。

「やっぱり、姉ちゃんが好きないように

できてんのかねえ…妹ってのはさ。」

「そうだよー！ ね、あすか？」

「えっ、私は…」

「ん？ 戸山も姉ちゃんいるの？」

「…うん。」

へえ、意外だな。どつちかかっていうと

姉ちゃんっぽかったから。

こんなしつかりした妹さんを持って

お姉さんも鼻が高いだろうな。

「私のお姉ちゃん…花女の生徒なんだ。」

「まじで？嬉しい偶然じゃないの。」

「別に…」

「もー照れんなって…な？」

「照れてないし…」

そりゃあ、知り合いとかいる人はいいだろうけどさ、俺なんか数えるくらいしかいな

いぞっ？

「あ。」

「どうしたの？」

「いや、そーいや…小さな頃からの

知り合いがいるんだけど…越してきてから未だに会いに行つてねーなーつて…」

「前に話してた人？」

「あれ？話したっけ？」

「うん、一個上の先輩でしょ？」

「ああ…うん。」

まじでどうしよう。

なんやかんやで…もう2ヶ月以上も

経っちまったよ。

かといつて、このまま会わんわけにもいかないしなあ。

「その人と連絡は取ってないの？」

「ああ…家は知ってるんだけど…」

「じゃあ、会いにいけばいいじゃん。」

「いや、心の準備がだな…」

「もしかしたらさ、近くに住んでるなら

花女に通ってるかもよ？」

「いやいや、まさか…」

会いたいよ？会いたいけどさ…。

会いたいけど会いたくないっていう

ジレンマってやつ？

…そもそも忘れ去られてたりしたらどうしよう。万が一彼氏とかいたら…：そいつはぶつとばそう。

ああ、くそっ…：被害妄想ばかりが広がる…。

いつから俺はこんな女々しくなつたんだ？

「何ぶつぶつ言ってるの？」

「なんでもない…」

「そういえば、ろっかは？」

「わかんない。どこ行つたんだろ？」

「また、先生にパシられてんだろ。」

「それか、バンドのメンバー集めかな？」

「ああ、そういやこの前そんなこと言つてたな…：バンドがやりたくて東京来たつて…」

「うん…：軽音部の体験入部に行つたり

してたんだけど、うまくいかなかつたみたい。」

あいつ、意外と行動力はあるんだな。

少しばかりだけど見直した。

けど、現実には甘くないんだよな。

この時期つていつたらもうある程度

バンドは組み上がってるだろうし

…仮に今組めても文化祭に出るのは無理だろう。練習時間が足りない。

そんな中、意気消沈した顔の朝日が教室に入ってきた。恐らく、メンバー集めがうまくいかなかったのだろう。

諦める…とは言えない。

あいつの…あの時のあの目は本気だったから。

情熱を宿した目…それが、俺とお前の違いなのか。

いつか、お前の弾いている姿も見てみたいもんだな。

「はあー…」

ため息ばかりついてんな俺。

だって人使い荒いんだもの。

うちのクラスの女子達。

何故に俺一人で備品の買い出しなんか

せにやならんのだか。

「もう無理、ちよい休憩。」

手近なベンチに腰掛ける。

もう夜じやんかよ。

街灯がなけりや真つ暗だぞこれ。

「大体、準備期間が短すぎるんだよ…」

急に女子校と合同になるしさ、実行委員

やらされるわ…挙げ句パシられるって…俺、前世で何かやらかしました…?」

誰か教えてクレメンス。

「何か、悩み事?」

「えっ?」

見上げると、どえれー美人さんがおった。

「星川優君…だよね?」

しかも…俺を知ってらっしやる!?

えつと…どちら様ですか?

思わぬ再会

考えろ、思考をフル回転させる俺。

いつだ？いつ、こんな美人さんとフラグをおっ立てた？

よくやったと思う反面、心当たりがない

もどかしさも感じていた。

「ごめんね？急に話しかけて…私のこと、覚えてるかな？」

覚えてない…と言ってしまえばそれまで

だが…それでは格好がつかない。

思い出せ。知り合いはそう多くないはずだ…自分で言っていて悲しくなるけど…。

ギターだろうか？それともベースだろうか？楽器を背負ってるところを見るとバンドをやってる人なんだろう。

…もしかして、ミュージックスクールに

通ってた頃の知り合いか？

だとしたら…

「あー…ああ！」

思い出した、思い出した。

そうだ、やっぱりミュージックスクール

時代の…いっつも俺の演奏を隅っこで

聞いていた子…名前は…

「もしかして、和奏レイ…さん？」

「うん、久しぶりだね、優君。」

こりや驚きだ。どえれーべっぴんさんに

なったもんだ。

「いやーびっくりした…どこぞのモデルさんかと思いましたよ…」

「ふふ、そんなことないよ。」

初見の人は大学生かなんかと間違うと

思う。

俺の一コ上とはとても思えん。

「優君、引越したって聞いたけど、また東京に？」

「ええ、3月の中頃に。」

「そっか、私と同じだね。」

「レイさんも?」

「うん、私も親の転勤で離れてただけ…春先にこっちに来たんだ。」

「へえ、そりやまた偶然。」

この人とは専攻も違ったし、話したことも数えるほどしかなかったけど何故か印象には残っていた。

「私、好きだったな。」

「えっ!?!」

ちよ、なんて!?

ここにきて何かミングアウトしとるんですか貴方は!?

「優君の弾くギター。」

「ああ…」

びっくりしたわー。

まあ、そうですね。

勘違いですよね…すみません。

「今も続けてるの?」

「あー…今は…ちよつと…」

「そっか…」

レイさんは察してくれたのか、それ以上は聞いてくることもなかった。そして、沈黙。

残念そうな顔を見ると少しばかり心苦しくなった。

「レイさんは？その背負ってるのって…」

話題を変えねば。

俺の話なんか聞いたところで何にもならんだろうし。

「ベース。始めたんだ。」

「映えますね、レイさんが背負うと。」

「そうかな？」

「ええ…バンド、組んでるんですか？」

「…うん、最近スカウトされてね…。」

「スカウト？」

すごいな…スカウトなんて創作の中の話

だと思ってたけど…本当にそんなことあるんだな。

「じゃ、練習帰りだ。」

「今日は違うんだ。バンドのサポート。」

サポートまでやってんのか。

「いいっすね、充実してて…」

「充実か…そうかも。」

あの頃とは違うんだな、この人も。

いや、根っこは変わっていないのかな。

「優君は？何か悩んでいるの？」

「え？」

「ため息、ついてたから。」

「別に、大したことじゃないんですけど…周囲との温度差に戸惑ってるっていうか…」

「温度差？」

「俺の通ってる高校にもバンドやってるって人達が結構いて…詳しくは知らないんです

けどね、みんなたぶん全力なんです…」

「……」

真剣に聞いてくれている。

そういうえば、誰かに感情を吐露するのなんて久しぶりな気がする。

吐き出した感情はあまりに

女々しく、弱々しいものだった。

「それに比べて俺は…何やってんだろうなって…」

「…悩んでるってことは一生懸命な証拠だよ。」

「そんなもんですかね？」

「うん…優君にも一生懸命になれるものはあったでしょ？」

「一生懸命…ね。」

「ギター…嫌いになっちゃった？」

「それは…」

わからない。

俺は奏でるのをやめた。

奏でるのを忘れた…つもりだった。

嫌いに…なったのだろうか？

…答えはやはり出ない。

「…バンド、楽しいですか？」

「まだわからない…かな？でもね、見えてくる景色は確実に違うものになると思うんだ。」

「見えてくる景色…ですか。」

「うん、まだ探り探りだけど…バンドの」

フロントとして頑張っただけならなっ…

まったく…自己嫌悪が加速するだけだぜ…

そんな顔されちゃあさ…

「いつか聞いてよ…私達のバンドの歌。」

「ええ、機会があれば。」

「ごめんね？ちよつと語っちゃったかな…。」

「とんでもない…おかげでちよつと楽になりました。」

「私も…励まされたから…優君の演奏で。」

「ええ…？あんなんですか？」

「うん。」

「そう…ですか…。」

わからんもんだな。

ただ、あの時のあの拙い演奏が誰かの力になっていたことは嬉しくもある。

「好きなものはそんな簡単に

嫌いになれないものだよ？」

「えっ？」

「それじゃ。」

「え、ええ…また。」

嫌いになれない…か。

俺にもくるのだろうか。

またあの頃のように。

ギターを奏でる…そんな日が。

5人の夢

「くっそー、あいつら…こごぞとばかりにこき使いやがって…」

文化祭の準備も本格的になり、今日も今日とて俺は肉体労働に励んでいた。

「頑張ってるねー!」

「ど、どうもです。」

花咲川の生徒も羽丘に入入りするようになり、度々声をかけられるようになった。すんなり異性に話しかけられるコミユ力は羨ましくもある。

しかし、慣れねえ。

他校の生徒さんがいるってのは。

せいぜいカオスな文化祭にならぬよう

祈るばかりである。

「俺は肉体派じゃないって何回言わせんだよ…ったく。」

「あ、ゆうー!」

「おー宇田川。」

「頑張ってるねー!」

「まーなー。宇田川からも何とか言ってくれよ。あいつら、俺のことこき使いすぎなんだよ。」

よく見ると隣には花咲川の生徒さんが。

知り合いだろうか？

「こ、こんには…」

「こんには…えっと、宇田川の知り合い？」

「うんーりんりんだよー」

ああ、この人が。

しかし、思ってたより全然イメージと

違う。

どんなはっちゃけた人物かと思えば…

蓋を開けてみれば大人しそうな優等生タイプの人だ。

「あの、いつもこの子がお世話になってます。」

「いえ、そんな…あこちゃんにはいつも

助けてもらってますし…」

すごく礼儀正しいな…俺なんかに敬語で。

良かったなー宇田川。

こんな人そうはいないぞ？

生徒会長つてタイプの人ではなさそうだけど。

日菜先輩には振り回されてんだらうなー

…御愁傷様です。

「じゃー俺行くな。」

「うん！またねー！」

もう夕暮れ時か。

あつちゆう間だな時間経つものつて。

ちよつと休憩でもしようか。

座れる場所を探していると朝日を見かけた。

あいつ…俺がひーひー言ってる時に何を

やってんだ？

「んーと…なになにに、バンドやりませんか？」

「あ、優君。」

「メンバー募集？」

「うん…」

まだやってたのか。

「仮に、集まったとして…文化祭には出るのか？」

「うん、そう思つとるんやけど…」

出る気なのか。

もう期間は一週間もないんだぞ？

と、そんな野暮なことを言うつもりはないが。

俺が口を出せることでもないしな。

「そーいや、ギターは？いつから弾いてるんだ？」

「えっと、中学校の時から。」

中学からか、結構やってたんだな。

「バンド組んだこととかは？」

「一応、地元では組んでたんやけど…」

「へー、あるのか。」

意外や意外。バンド経験があったとは。

「六花じゃん。」

「ん？」

「あ、リサ先輩。」

リサ先輩って…もしかしてRoseliaの？

楽器を背負ってるところをみると間違いなさそうだ。たぶん、ベースだろう。

「どうも。」

「あ、もしかして…星川優君？」

「え、ええ…そうです。」

あれ？何か認知されてるっぽい？

宇田川のやつが話したりしたのかな？

「あの…Roseliaの？」

「そ、アタシはRoseliaのベーシスト、今井リサ。よろしくね！」

「ええ、よろしくです。」

見た感じギヤルっぽい見た目の人だけど、不思議とイヤな感じはしない。どちらかというとな面倒見のいいお姉さんといった印象を受けた。

しかし、最近よく会うなー…ベーシストとかギタリストとか。

「六花はバンドメンバーの募集？」

「はい…けど、全然集まらんくて…」

「そっかー…ずっと探してるよね。」

「リサ先輩は、文化祭バンドの練習ですか？」

「うん。」

文化祭バンドね。

そういえばあつたな。

羽丘、花咲川合同でバンド組むって話。

じゃあ、Roseliaとしては出ないのかな？

「Roseliaの皆さんは出ないんですか？」

少しばかり気になり、聞いてみる。

「うーん、出たいんだけどね…友希那…」

ウチのバンドのボーカルの子が真面目でさー…そういうのやらないんだ。」

「…なんていうか、ストイックっすね。」

「あはは、そうだねー。」

文化祭は絶好の機会だと思っただが…。

それとも何か他に目指しているものとかがあつたりするんだろうか？

「何か目標とかがあつたりするんですか？」

いかなあ。

柄にもなくお喋りがすぎている気がする。

何故ここまで踏み込んだ質問をしたのだろうか。

リサ先輩は一瞬キョトンとした顔をしたが、すぐに表情は真剣なものへと変わる。

「うん、あるよ。」

そう、眩く様はどこか遠くを見ているようだった。

「FUTURE WORLD FES. (フューチャーワールドフェス) ……つていう大きなフェスがあつてね。」

「FUTURE WORLD FES. ですか。」

「うん、そのフェスにトップの成績で出場すること…それが、目標かな。対バン出るのも主催ライブも全部そのため。」

「なるほど…そのフェスのための通過点に過ぎないと…」

「まあ、そうなるかな…最初は友希那だけの夢だったんだけど…今は5人の夢。」

5人の夢か…。

それぞれが同じ目標を共有していると。

力強い眼差しだった。

ああ、この人は本気で夢を追いかけているんだなと…そう思わせるには十分だった。

「…何て語っちゃったかな？」

「いえ！素敵です！」

「即答かよ。」

そうか。

きつとたくさんしてきたんだろう。

挫折も……後悔も……葛藤も……努力も。

それらに裏打ちされて今の *Rosealia* があるんだろう。

リサ先輩の言葉に触れて、なんとなくだが、それがわかった気がした。

『みんなー！文化祭バンドの公開リハやるよ！講堂までお・か・しだよー！押さない、駆けない、知らない人について行かない！』

押さないし、駆けないし、知らない人にもついて行かないからご安心を。どうやら、文化祭バンドの公開リハをやるらしい。

「日菜のやつ、リハとは聞いてたけど公開ってのは聞いてないぞー。」

「本当、自由つすよね……発想といいそれを実行する行動力といい。」

「あはは、ま、そつちのほうが面白そうだしいいじゃん？それじゃあねー！」

「は、はいー！」

夢のためか。

まさか、そんな壮大な答えが返ってくるとは思わなかったなー。

「宇田川のやつがあれほど気に入る理由がわかった気がするわ。」

「うん……でらカツコいいわあ。」

「朝日は？」

「え?」

「どうして、バンドやりたいんだ?」

「私は…憧れのバンドさんがおって…」

ああいう風にキラキラしたいなって思ったの。」

キラキラねえ…。

そう言うお前の目だけはキラキラしてっけどな。

バンドに憧れてか、それがこいつのバンドをやりたい理由。まったく…眩しいったらありやしねえや。

「そんじゃ、そのためにもバンドメンバー集め、頑張らんな。」

「うん、頑張る!」

「お、おお…頑張れな。んじゃ。」

「え?リハは?」

「リハだろ?別に観なくてもええやんか…それに、頼まれごと終わつたらんしな。」

バンドなんて俺には縁のない世界だ。

音楽っていうのに人生の大半を尽くしたのは事実だが…何も残らなかった…

いや、残ったのは虚しさ…虚無感だけだった。

ひたむきで真つ直ぐなその姿は、捻じ曲がった俺には眩しすぎる。

「始まるってー合同リハ！」

「お前ははしやぎすぎなんだよ！」

「えー、リハだよ！リハ！有咲だって楽しみでしょ？」

「そりや、楽しみだけど…」

ん？

今聞き覚えのある声が…それに、ありさって言ったか？

「いやいや、まさか…」

振り返るがもう誰もいない。

まさか…そんなことあり得るのか？

「まじで…？？」

いるのか？

花咲川に？

あの『あーちゃん』が？

「ウソだろ？」

講堂に引き返すか？

いや、でも人違いだったら恥ずかしいし、大体世の中に何人ありさって名前の人間がいるって話だよ。

「偶然……だよな？」

幼馴染

『今日の1位は水瓶座のあなたー！』

昔の顔馴染みと再会できるかも？

ラッキーアイテムは傘です！』

「雨、降ってねーけど。」

思いつきり晴れてるし。

…昔の顔馴染みと再会ね。

占いのほうはもしかすると、もしかするかもな。

「優、のんびりしていると学校遅れるよ。」

「ん。」

いよいよ、明日。

早いもんで文化祭の開幕前日となった。

「形になったもんだな…セツシヨン

カフェも。」

揃えられた機材の数々。飾り付け。思えば初めてかもしれない。こき使われたとは

いえ、これほど頑張ったのは。

「いよいよか…」

「星川、明日は頼んだよー。」

「わーってるって。」

まったく、どこまでいき使えば気が済むんですかねえ。この子らは。

「お前からこそ頼んだぞ。セツシヨン

しなきゃ始まらねんだからな。」

「わかつてるって。」

しかし、楽器を構える姿はなかなか様にな

なってるな。

あの朝日ですら少しばかり補正がかかって見える。それにしても…

「朝日、ヘッドレスギターって…ずいぶんマニアックなの使ってたんだな。」

「え、何？星川ってギター詳しくかったりするの？」

「へ？いや、そんなことねーけど。」

しまった…と思うがもう手遅れ。

つい、口をついて出ちゃった。

俺のあほ。ばか。おたんちん。

「常識だろ？そんなくらい。」

「うそー？知ってる風な口調だったけど？」

「ギターやってるの？」

「やってねーよ。」

くそ、水を得た魚のようにお前らは。

「とにかくだ、明日は頑張ろうぜ。」

これ以上喋ると更に墓穴を掘りそうだ。

なので、強引に話を打ち切る。

「どっか行くの？」

「外の空気吸ってくる。」

「はー…良い天気ですな。」

外は清々しいまでの晴れやかさであった。

いいねーこの空気。

至福だわー。

文化祭前日ということもあり、今日は簡単な仕上げ、謂わば最終チェックの段階。
なので、予定としては比較的楽だ。

「頑張ったなあ…俺。」

うん、褒めてやりたいよ。今回ばかりは

頑張った。だからかな、文化祭を良いものにしたっていう気持ちも出てきたのは。

「つて、これからだよな。」

そんな時である。

独り呟く俺の前を見覚えのある姿が横切った。

やっぱり、間違いない…！

あの人は…

「ちよ、ちよっ…い！」

声をかけようとしたがやめた。

このままじゃ、味気ない。

どうせなら何かドラマチックな劇的な再会を果たしたい。

しかし、何たる偶然か。

合同で文化祭をやることになった他校に

昔の幼馴染がいるとは。

「勿体ないなーせつかく作ったのに、捨てちゃうなんて…」
「仕方ないよー」

お？良いところに…おあつらえ向きなものが。

「それ、頂いてもいいですか？」

「え？いいけど。」

「すみません。」

手に入れたのは般若（？）のような顔をした

被り物。なんでこんなの作った？

それはさておき、これで驚かせてやろうって寸法だ。

待っててくれよ、あーちゃん。

すげーもん見せてやるから。

「あの一すいません。」

「はい…つてうわああああつ?!」

はは、良いリアクションだ。

「ふ、不審者?! 曲者?! 変質者?!」

なんつー三段活用だよ、全部似たような意味だし。あーウケるわ。

弄りがいがあるのは変わってねーな。

「そのどれでもないですよ。」

いやー久しぶりですねって…あれ、ちよつ

…あれ?」

……取れねえ。

すつぽりおさまっちゃったのか?

「ま、待ってろ! 今通報してやるから!」

「ちよ、通報はシヤレにならん! 先輩! 俺ですよ! 俺!」

「誰だよ! アンタみたいな不審者に知り合いはいねー!」

「だって取れねーんですもん! ちよつとだけ時間くださいって!」

劇的な再会がカオスな再会へと変わった瞬間である。どっちもテンパって会話が噛み合わない。

「ほら! 羽丘の制服! 俺、羽丘の生徒!」

「羽丘は女子高だろ! 下手な嘘つくな!」

「違うんですって！今年から変わったんですよ！」

ダメだ、このままではキリがない。

せつかくの再会が台無しだ。

…自業自得ってやつか。

「ああ、もう！昔よく遊んだじゃないですか！」

「…え？」

「覚えてませんか？あーちゃんって呼んでた子のこと。」

「お前…もしかして…優？」

あ、やっとわかってくれたかな。

「星川 優か!？」

良かった。忘れ去られてたらどうしようかと。

「あつたりー…あーやつと取れた。」

「お前…何でこんなところにいるんだよ!？」

「言つたつしよ？羽丘の生徒ですよ、俺。」

「そうじゃねえ！静岡に引つ越したんじゃねーのかよ?」

「まあ…色々とありまして…でも、びつくりしましたよ…先輩が花咲川にいただなん

て。」

「そりや、こつちのセリフだ。」

「ですよねー。」

「ま、なんだ…久しぶりだな。」

「ですね。」

占いつてやつも案外当たるもんなんだな。

こうして幼馴染と再会できたわけだし。

「何か変な感じだな。お前に敬語使われるとき。」

「だって、俺らももう高校生ですよ？」

さすがにあーちゃんはまずいでしょ。」

同級生に上級生を渾名で呼ぶやつもいるがな。

「そうか…お前ももう高校生か。」

「これからは、市ヶ谷先輩って呼びますね。」

「…気持ちわりー。」

「何で!?!」

「しかし、でかくなつたなお前も。」

「そういう先輩は、その…あんまし変わってないですね。」

「余計なお世話だ。」

いや、でも…

「…成長はしてるか。」

「やっぱり通報するか？変態がいるって。」

「冗談です。」

やっぱり、俺も男だし視線が自然とそこにいくのには抗えないわけですよ。

言ったら本当に通報されかねるので口には出さないが。

「…つといけね！これから生徒会なんだった！」

「生徒会？先輩がですか？」

「ああ、悪いな。これ以上お前には構ってらんねーんだ。」

「なんだー残念。」

「それじゃあな。」

「ええ。」

生徒会だなんて、いつの間にそんな…

成長したなあ。ちよつと涙腺が…

「あ、そうだ。」

「ん？」

「あのさ、優。」

「どうかしました?」

急に恥ずかしそうにして…

まさか…。

「愛の告白とか?」

「ねーよ。」

そんな速攻否定せんでもええやん…

「私さ、学校の友達同士でバンド組んでんだ。」

「バンド?」

先輩もかよ!?

みんなさあ、バンド組みすぎちやう?

それとも偶然?

「ああ、でさ、ウチら文化祭で演奏するんだよ。」

「え、演奏!」

何それ。

絶対観るわそんなん。

「だから、その、お前にも観てほしいなって…」

「…何とかして最前列確保します。」

「いや、そこまではしなくていい。」

「そうか…バンドか…変わりましたね…先輩も。」

「そうか？」

「ええ。昔なら絶対考えられなかった。」

何だよ、俺の心配は杞憂だったわけか。

バンドか…あのあーちゃんが。

友達つくって、生徒会入って、バンドもやって…

俺の知らない間にちゃんと青春してんじゃないの。

この人もこの人で、前に進んでたんだな。

「止まっているのは俺だけか…ってな。」

「は？何か言ったか？」

「いーえ…演奏、楽しみにしてますよ。」

「ああ、一応トリってことになってるから。」

「トリですか…了解。」

「じゃあな。」

「じゃ、頑張ってくださいね。」

やべーと急ぐ先輩はどこか遠くの世界の人に見えた。誰よりも近い距離にいたはずなのに。

あの様子じゃ、バンドの人達ともうまくいつてるのだろう。

「変われば変わるもんだな。」

成長を嬉しく思う反面、少し寂しくも思う。

「それに引き換え…俺は何をやってんだろうな。」

そう言いつつも心のどこかでは思ってるんだ。

もう、変わることはないのだと。

俺はこのまま、無気力に人生を消化していくのだと。

何かきっかけがほしい。

前に進むきっかけが。

何でもいい。

俺の人生観をひっくり返すような…そんな出来事が…起こってくれたりしないだろうか。

文化祭開幕

「今日は待ちに待った文化祭！みんなー！最高にるん♪ってしよーねー！」
「おぉー！」

「盛り上がってますなー。」

始まった文化祭。

始まってしまった文化祭。

スタートの合図は鳴った。

あとはゴールまで突っ走るだけ。

「楽しんでなー。」

花咲川へと行く戸山、朝日、宇田川らを

見送り教室へと入る。

俺は初日からがっつりシフト入ってるもんでね。

ま、展示なんて見て回るつもりはないけど。

っと最初のお客さんだ。

「よし、やるか。」

改めて気合いを入れ直す。

「星川、3番席にこれ持つてって！」

「りようかい。」

「5番席、注文何だっけ？」

「アイステイー、抹茶ラテ、タピオカドリンクな。」

「ごめん！終わったら入り口の受付事務お願い！」

「へいへい。」

何コレ。

客の入りが予想以上にやべえ。

正直。パネえ。泣きそう。

肝心のセッション組のほうはは滞りなく

やつてるようだ。さすがに楽器経験者揃いなだけはある。

「はあー、何とか落ち着いたかな。」

「休憩、入っていいよ。」

「おー、そうさせてもらおうわ。」

つていつても回るところとかないんだよな。

一緒に回るやつもないし。

ぼっちは辛いね。

「大丈夫？」

「う、うん……ちよつとくらつとしただけだから……」

「少し、休んだら？」

「大丈夫。」

はあ、何で無茶するかねえ。

「保健室、行つてこいよ。」

「え、でも……」

「俺が代わりに入るからさ。」

「休憩中でしょ？」

「いいから、暇でどうしようかと思つてたところだよ。連れてつてやつてくれ。」

「う、うん。」

「ごめんね。」

「いいつて言つてんだろ。こういう時ぐらひは男を見せさせる。」

女子に無茶させて休憩なんかしてられるかつてんだ。

客入りも落ち着いてきたし、何とかなるだろ。

「星川ーあつちにも注文取ってきて！」

「はいはい。」

「ごめーん！ー番席の注文なんだっけ？」

「言うから復唱せーよ。」

「あの一すみません。」

「はいはい、何でしよう？」

「ごめん、何とかなんないかも。」

「普段の運動不足のツケが回ってきたか。」

「あいにくと気合いか根性とかいう便利なものは俺の中には搭載されてねえ。」

「けれど乗りきらなければ。文化祭のトリを飾る幼馴染のバンドの演奏のためにも。」

「ここで燃え尽きるわけにはいかない。」

「も、燃え尽きた…。」

「お疲れー。」

「助かったよー本当に。」

「…終わったんだな。」

「うん、明日は星川のシフト無しにするってみんなが決めたから、文化祭楽しんできなよ。」

！

「いつの間に…」

「まったく、いらん気遣いしやがって。」

「けど、せっかくのこいつらの厚意を無下にもできないし、お言葉に甘えておきますか。ともかく、1日目終了。」

「ゆう！お疲れー！」

「戸山達も戻ってきたようだ。」

「おー、お前ら楽しんできたか？」

「うん！楽しかったよー！」

「明日は頼んだぞ。」

「ふっふっふ…よかろう、この大魔姫あこに任せるがよい！」

「優、だいぶ疲れてるね。」

「体中ガツタガタだわ。」

「ともかく明日はフリー。」

「先輩のバンドの番まで適当に時間潰すでしょう。」

「しかし、2日目波乱の文化祭となることをこの時の俺はまだ知らない。」

アイドル×女優×おねーちゃん

文化祭も2日目。

俺は空いた時間をどう潰すか思案していた。

「ソフト入ってないっていつても、回る

ところもないんだよな。」

花咲川にでも行くか？

でも知り合いかいらないし…

市ヶ谷先輩は生徒会で忙しいだろうし…

さて、どうすつかな。

「Aftergrow、ライブやるんだって！」

「いいね！行くこう！」

丁度よく耳寄りな情報が。行ってみるか？

「あ、優君！」

おっと？いきなり氷川日菜と遭遇して

ラスボス
エンカウント

しまった。

たたかうとにげるってコマンドは
存在しないけどな。つまりは無理ゲー。

「今からおねーちゃんのとこ行くんだけど、優君も行く？」

「いや、俺は……」

「決まり！行くー！」

「だと思った。」

強制イベントだものね。

そりゃ、まあ、こうなるよね。

はいはい。わかってましたよ。

遂に、ご対面か……氷川姉。

「おねーちゃんー！」

「ちよ、何も走ることないっしょー！」

「こっちは全身筋肉痛なんだっつーの。」

「あ、日菜ちゃん。」

「花音ちゃん！おねーちゃんいる？」

「う、うん。」

「つ、疲れたー…」

「ふええー!?」

ふええー!? つてそんな怖がらんでも…

「どうしたの花音…つて貴方、大丈夫？」

「は、はい…何とか。」

「やつほー！千聖ちゃん。」

「え？」

千聖ちゃんって…白鷺千聖さん!?

この人、花咲川の生徒だったのかよ…

初耳なんですけど。こりやさすがにびつくり。

「日菜ちゃん？駄目じゃない、無理矢理

連れてきちゃ。」

「えー!」

えー!じゃないわ。

ほぼ引き摺り回されてたからな？

こっちは。

「ごめんなさいね？日菜ちゃんに無理矢理連れて来られたんでしょう？」

「あ、いえ…」

董色の引き込まれそうな瞳が俺を

覗き込む。

やべえ、今俺は女優さんと会話をしているのか。

普通にテンパるわ。

「すみません…うちの日菜がご迷惑を。」

「え？」

声のしたほうへ向き直ると、日菜先輩と

瓜二つの顔があった。いや、瓜二つなんて

レベルじゃない。

制服取っ替えてもわからないレベルだ。

この人が、紗夜さんか。

「また貴方は…大体、生徒会の仕事はどうしたの？」

えつと…何か俺が抱いていたイメージと

全然違うんだが。

というか真逆…品行方正といった感じが正しいか。

下級生の俺にも敬語を使う辺り、育ちの良さが伺える。

曰菜先輩…一体どこで間違えた？

「もう大体終わらせてあるし、いいじゃん！」

「そういう問題ではないでしょう。」

「あ、この子優君！あこちゃんと同じクラスなんだよ！」

お姉さん…貴方でも無理なんですね…

この人の制御は。

「終わったら一緒に回ろーね！」

「はあ…」

本当に好きなんだな、姉のことが。

この年代の兄弟姉妹つっーのはもつとこう、ギスギスした感じだったのが常識だろうに。

この人もこの人で、ちよつと特殊なだけで

本質は真っ直ぐだからな。

俺には兄弟姉妹はいないけど、こういうやり取りもいいのかももしれないなとほんの少しばかり思ってしまった。

展示のテーマは花女の歴史。

正直言うとかくつまんねえ。

今すぐにでも夢の世界へいきたいぐらいだ。

しかし、この二人が醸し出す圧力が

半端なくやばいので寝るに寝られない。

何かオーラ見えてね？俺だけ？

結局、解放されたのは一時間ほど

経ってからであった。

何か授業受けた気分。

「えー！一緒に回ろつて言つたじゃーん！」

「風紀委員の仕事があるの。貴方も

生徒会長でしょう？白金さんばかりに

任せてはダメよ。」

ぐうの音も出ないほどの正論。

俺もそう思うわ。

日菜先輩、もうちよっと自分の立場を考えてな。

「もしかしたら、つぐ先輩があたふたしてるかもですよ?」

「そっかー仕方ないかー。優君は?」

「せつかく来たんで、俺はもうちよっと回ってみます。」

「わかったよ!じゃあねー!」

台風みたいだなー本当に。

「自由ですねー。」

「ええ、自由すぎです。もう少し周りを

顧みてくれると嬉しいのですが…」

そこはまあ、同意。

「あの人、いつもお姉さんの話ばかりしてて、よく俺も聞かされるんです。」

「そう、ですか。」

何だかんだで照れ臭そうな顔をしている。

真面目そうな印象を受けたが、やはりそこは姉妹なんだと一人ながら納得した。

紗夜先輩と別れ、別の展示などを見て回ったが、特にこれといったものはなかった。

時間もそれなりに過ぎたことだし、羽丘に戻るか。

あいつらちゃんとやってんのかも気になるしな。

あったはずの青春

中学の頃は文化祭というものにはそれほど思い入れはなかった。

友達と呼べる存在もいなかったし、俺自身どうでもいいと感じていた部分もあったから。だから、思い出なんか何もない。

『優も、ギター弾けば?』

そう、何もなかった。

『せっかくの文化祭だよ? 私も歌うからさ!』

だから、やめろ。

忘れろ。

思い起こすな。

それはお前なんか思い起こしていい記憶じゃない。永遠に記憶の奥底に閉じ込めておくモノだ。

『一緒にやろうよ!』

くそっ、何でだよ?

何で今更になつて――

「優？」

「……え？」

戸山の心配そうな声が俺を現実へと引き戻した。

「凄く怖い顔してたけど、具合でも悪いの？」

「あ、ああ……ちよつと、腹痛くてな……」

「大丈夫？」

「大したことねーつて。それよりほら、

姉ちゃんには会えたのか？」

「うん。うちのクラスに来たよ。」

「へー、良かったな。」

うまく、誤魔化せたか？

にしてもそんな顔してたのか……俺。

「そーいや、戸山の言ったこと、当たってたわ。」

「当たってたつて？」

「幼馴染がさ、花咲川にいたんだよ。」

「へえー、偶然だね。」

「生徒会やってるみたいで忙しそうだったけどな…」

「でも、良かったじゃん。」

「まーな。あ、それからバンド組んで、文化祭で演奏するって言ってたな。」

「バンド？何て名前？」

「やべ…聞き忘れた。」

「…ダメじゃん。」

でも、トリって言ってたし、プログラム

見りゃわかるかな。

「あつたあつた。えーつと…ポツピン…」

「パーティー…？」

何だか随分とかわいらしい名前だな。

「え、ポピパ!？」

「ポ、ポピ？」

どうした？戸山。急に変な呪文唱えて。

お前だけはバグらないと信じていたのに。

「…その人の名前って？」

「ん？市ヶ谷 有咲って人。ピアノが

これまたお上手なのよ。」

「市ヶ谷さん!?!」

なんだよ、リアクションでかいな今日は。

文化祭でテンション上がってんのはわかるけどさあ。

「知ってんの？」

「…お姉ちゃんの友達。」

「うそお!?!」

…そうだったのかよ。

まさかまさかの繋がり。

しかし、あの堅物不器用ツンデレはそう

簡単には他人に心を開かないはずなんだが…実際俺も最初は苦労したし。一体どう

やって攻略したんだ？

「市ヶ谷さんと幼馴染だったんだ。」

「うん。でも、変わったなあ…」

生徒会やったり、バンドやったり…」

「昔の市ヶ谷さんってどんな人だったの？」

「人見知り…で、泣き虫。いつも優君、

優君って後ろひつついて来てたな。」

「へえー、意外。面倒見の良いお姉さんって感じだったから。」

「あの人が？」

「うん。」

そうなのか。

そつちのが意外だけど。

にわかには信じられん。

「いつの間にか俺の口調が移って、言葉使いも乱暴になってさ、名前も呼び捨てになったりしたけど…俺が引越すってなった時はそりやもう泣きまくって大変だったな。」

「ふーん…でも、本当に良かったね。」

また会えて。」

「…だな。」

運命なんてのは信じないけどな。

運命論者でもロマンチストでもねーし。

「なににせよ、良かったよ。元氣そうで。青春してんなーって感じ？」

「おじさんくさいね…優はしてないの？」

「俺？俺はそういう柄じゃねーよ。」

そんな資格もないしな。

俺はそんなキレイな人間じゃないんだよ。

お前らと同じステージに立って青春を謳歌するなんてのは許されない。
あつてはならないんだ。

俺は、一人の少女のあつたはずの青春を
引き裂いた——最低最悪な男だから。

心を震わせる音

思えば初めてのことだったのかもしれない。

他人のギターの演奏に魅せられたのは。

ぶっ飛んだ演奏をしたとあるギタリスト。

…それは俺が知るどんなに有名で、どんなに偉大なギタリストよりも輝いて見えた。

俺は、あの時のあの演奏を：

一生忘れることはないと思う。

合同文化祭も終盤。

羽丘・花咲川の合同バンドの演奏が

始まろうとしていた。

バンドメンバーは見知った顔が多かった。

つぐ先輩にリサ先輩、モカちゃん先輩。

あとは…ふええー!? って言ってた人。

名前は知らないが。

「みんなー? まだまだいけますかー?」

今、司会進行をしているボーカルであろう

ピンク髪の人もどっかで見たことは

あるんだよなあ…どこだったっけ?

考えていると、演奏が始まった。

バイトする人への応援エールソングらしいのだが…思ったよりもちゃんとバンドしている。

ていうか、普通に上手い。

練習時間もそうはなかっただろうに

息もぴつたりと合っている。

何よりも皆、楽しそうに演奏している。

「高校最後の文化祭で、最高の思い出が

作れました! 皆さん!

ありがとうございます!」

もう終わりか、あつという間だったな。

最高の思い出ね…

良かったな、ピンク髪のボーカルさんよ。

あんたの歌もなかなかのもんだったよ。

「さて、次はいよいよこのバンド！」

トリを務めるのは結成一周年の…」

きた。

市ヶ谷先輩の晴れ舞台。

何だかこつちが緊張してきた。

「え…」

どうした？

ボーカルの人、急にフリーズしたけど。

「ええーっ!?!」

どうしたんだよ。

急にテンパリ始めたぞこの人。

「えと、一周年で…一周年はー365日で…

つまり、えーつと…」

それどころかバグり始めた!?

大丈夫か？

「頑張れー！彩ちゃん！」

そうだ、頑張れよ。

彩ちゃんとやら。

高校最後の文化祭なんだろう？

グダグダで終わる気か？

「それじゃあ、一周年繋がりで綿菓子屋

さんの話をしようかなーと…」

「いや、何でだよ!？」

全然関係ねーじゃん。

思わずツッコんじまったわ。

「つて、あれ？」

あそこにいるのつて…朝日？

そうだ、間違いない。

いつの間にか壇上には朝日の姿があつた。

あいつ…あんなどころで何やってんだ？

「羽丘一年！朝日 六花です！」

「え？」

あ、朝日さん…？

ギターを持つて何をする気？

まさか…演奏する気じゃ…？

「ギターを弾きます！」

「はあ？」

そのまさかかよ!?

バンド組めなかったから悔しかったのか？

…どうなっても知らねーぞ？

しかし、そんな心配はすぐに吹き飛んだ。

いや……吹き飛ばされた。

朝日 六花の演奏に。

「…嘘だろ…!？」

思わず声が出た。

俺は、その姿から目が離せなかった。

あいつのギターを奏でる姿は

普段のあいつとはまるで別人で

俺はその演奏に

朝日 六花の演奏に――

「すげえ…」

——心を奪われた。

歓声で我にかえった。

誰もが朝日の演奏を称賛していた。

これは…何だ？

沸き上がるこの得体の知れない感情は…

一体何なんだ？

すげえよ…お前。

聞こえるだろ？

これ、全部お前に向けての歓声なんだぜ？

なあ、朝日？

お前は今…どんな気分なんだ？

そこからは、どんな景色が見えているんだ？

「アンコール！アンコール！」

あ、パニックになって、目回してたわ。

いつものあいっだ。

何も見えてなかったな。

歓声の中、ドラムの音が鳴り響く。

「宇田川？」

お前までどうした？

ここぞとばかりにはっちゃけるつもりか？

それに、生徒会長のりんりんさんまでいる。

「もしかして、Roseliaが演奏するの!？」

「マジ!? ヤバくない!？」

Roseliaが!？」

待て待て、一旦整理させてくれよ。

頭が状況についていってないからさ。

続いてリサ先輩が出てきた。

それから、紗夜先輩に…あの人は…湊さん？

…そういうことかよ。

ゆきなつて湊さん…あんたのことだったのか。

それにしても、次は市ヶ谷先輩のバンドの番じやなかったのか？

これは、サプライズ的な感じ？

サプライズライブ？

何か語呂いいな。

「誰か、ギターを！」

紗夜先輩、ギターを持ってないってことは

演奏する予定はなかったってことか？

てことはサプライズってわけでもないのか。

一体どういうことだ？

「おねーちゃん！使って！」

曰葉先輩？

何でギターなんか持って来てんだよ。

「曰葉先輩、これって…」

「おねーちゃん達、演奏するんだよ！」

優君も一緒に観よ！」

「いや、あの……」

「少しだけ、私達にも付き合ってもらえる？」

湊さんがマイク越しにカッコいい口上を

述べる。

その瞬間、割れんばかりの歓声があがる。

人気すげえな……！

改めてRoseliaさんの知名度の凄さを思い知る。

しかし、ちょうどいい機会だ。

Roseliaさんのお手並み拝見といきますか。

「友希那ー！」

「友希那さぁーん!!」

「カッコいいー!!」

どうでもいいけど、落ち着け君達。

「おねえちやあぁあん!!」

あんたも落ち着けな。

蒼いスポットライトに照らされ、それが

合図となり演奏が開始される。

そして、すぐに思い知る。

Rosealiaの凄さを。

「…何コレ？」

開いた口が塞がらんのだけでも。

いや、ヤバくない？

この人達プロの方々？

俺視点だとプロと遜色ない演奏なんです。

Rosealiaの奏でる演奏に、その一体感に俺は圧倒されていた。

宇田川ごめん。

お前にドラムは無理だと思ってた。

鼻で笑ってた。

めちやくちや叩けてるやん。

めちやくちや楽しそうやん。

白金さん：だっけ？

：俺、結構ピアノ関連にはうるさいんだけどね、満点をあげたいぐらい。淀みない指づかいをしていらっしやる。

リサ先輩。

イケイケって感じ。

ギャルにベースっていう新ジャンル。

当然ながら上手い。

で、湊友希那さん。

透き通るようで力強いその歌声はなるほど、Roseliaの知名度も領けるほどの完成度。

さつきからコメントが良くわからない感じになってるのは申し訳ない。

そして、紗夜先輩。

恐ろしいほどに正確なストローク。

ストロークというのは常に一定の動作を

求められるものなのだが：

いや、それにしても正確すぎるだろ。

「たくさん、練習してきたんだらうな…」

わかった…わかってしまった。

何十回、それこそ何百回と…ギターを

弾かなきゃあんな演奏はできない。

そして、それは紗夜先輩に限った話ではないのだろう。

努力という言葉が霞むほどの研鑽を経て、今あの場所に立っている。

「これが…Roselia（ロゼリア）か…」

その凄さに、周囲の熱気に俺は圧倒されるばかりであった。

演奏が終わっても、熱は冷めることはなかった。

そして、羽丘・花咲川の合同文化祭は終わりを迎えた。

待ちに待ったバンドの演奏は…始まらぬまま。

もうお前とは

「はあ……」

『羽丘一年！朝日 六花です！』

まだ、あの音が脳裏に焼きついていて

頭から離れない。

「朝日 六花……」

つたく、とんでもねーことしてくれやがって……

おかげで感情がごちゃ混ぜになって

自分でも訳がわからなくなっている。

「あー！何なんだよもう……」

あてられたってのか？

あいつの演奏に？

同じギタリストとして。

あるわけがない。

大体、俺はもうギタリストじゃない。

「優？ さつきから何騒いでんの？」

「ああ、わりい母ちゃん。」

でも、いきなり入ってくんいな。

「何か悩み？ もしかして、恋とか？」

「…かもしんねえ。」

「えっ!?! あんたが!?!」

「冗談だよ。真に受けんなって。」

「これが恋であってたまるか。」

「びっくりしたあ。」

そんなびっくりすることか？

あんたは、実の息子を何だと

思ってるんだよ。

悔しがつとけ、そこは。

「とりあえず風呂沸かしといたから、今日はさっぱりして寝なさい。」

「そうする。」

「皆さん、ありがとうございました！」

後夜祭。

白金生徒会長が締め挨拶を行っていた。

「それでは……乾杯……！」

「かんぱーい!!」

色々あったけど、無事に終わって良かった。

一つだけ、心残りはあるが。

市ヶ谷先輩……いねーな。

やっぱ、シヨック受けてんのかな。

ライブ……できなかつたんだもんなあ。

日菜先輩曰く、P o p p i n , P a r t y のギターの人が別の場所でライブをしていたらしく

それが押してこつちに来るのが遅れたらしい。

残念ではあったが、やはり今はそれ以上に先輩が心配だ。

「星川！乾杯の音頭とつてよ。」

「は？今さつきしたろ。ていうか俺？」

「うん。一番頑張ってくれてたから。」

「ありがとう。」

「星川のおかげだよ。」

お前らなあ…

「ずるいよなあ、女子つてやつはよ…」

「これじゃ、こき使われたこと怒るに怒れないじゃねーかよ。」

「ま、悪くはなかったかな。」

「そこは、楽しかったでいいじゃん。」

「ホント、ツンデレだよね。」

「ちげーよ！ほら、アホなこと言ってるんで、乾杯すんぞ。」

…ああ、確かにそれなりに楽しかったよ。

そこは認めるよ。

口には絶対出さねーけどな！

「そんじゃ、羽丘・花咲川合同文化祭の

成功を祝って——かんぱーい。」

「かんぱーい！」

俺には思い出を作る資格なんかない。

でも今だけは浸らせてくれ。

この想いはなかったことにしたくはない。

終わるのが寂しいだなんて思ったのは…

これが初めてだから。

「はー染みるわあ…」

良い湯だ。

このまま寝落ちしそう。

それにしても…元気なかったな、あいつ。

あんだだけの演奏かましたってのに、朝日のやつどこか浮かない顔をしていた。

結局、声をかけることはできなかった。

って恋する乙女か…俺は。

「何であんなにあいつのことばっか気にしてんだ…」

…本当に恋してんのか？

いや、ないない。

ありえない。

そんなことは。

けど、今一番気になるのは P o p p i n , P a r t y よりも…あいつなんだよなあ。
本当に、どうしちまつたんだか。

今日はもう寝よう。

先輩は近々励ましにでも行ってやるとするか。

というか、連絡先聞き忘れてたな。

「はあ…」

明日になれば、また普通の日常か。

『ギターを弾きます！』

いきなりステージに乱入して、弾いた曲がまさかの俺の好きなロックミュージシャンの曲とは…ホントにおもしろいな、あいつは。

「ごめんな…相棒。」

そんなところに閉じ込めて。

思えばお前は俺がランドセル背負う前からいたんだよな。

親父を抜かすためにがむしやらに頑張ったよな。

幼馴染に褒められたくて一生懸命やったよな。

いつだって俺の傍にいてくれたよな。

「楽しかったよな。」

お前は悪くないんだよ。

悪いのは、俺だ。

「ごめんな。」

俺はもうお前とは一緒に演奏できないんだ。

黄昏ブラックコーヒー

合同文化祭も無事に終わり、学校はいつも通りの日常を取り戻した。

「川君…星川君。」

「あ、はい。」

「聞いてなかったんですか？この問題の

答えは？」

「…聞いてなかったです、すみません。」

「期末試験も近づいてますから、気を抜かないように。」

「へーい。」

「返事はしつかりと。」

「はい。」

俺はというと、この有り様である。

どうにもエンジンがかからない。

文化祭で燃料を使いきってしまったのだろうか？

「来年はうちらも演奏しようよ！」

「そうだねー！」

もう、来年の話してるよ。

でも、来年はさすがに合同じゃないと思うけどな。

日菜先輩も卒業するし。

「朝日さん、ホントに凄かったよね！」

「あれ、何て曲なんだろ？」

凄かったなんてモンじゃねえ。

明らかにあれは高校生のレベルを超越していた。

しかも、恐らく即興での演奏だろう。

あの影響で羽丘ひいては花咲川での注目度も高まったはずだ。

…しかしながら、当の本人は何か元気がない。

何かあったのか？

「苦っ…。」

カッコつけてブラックコーヒーをチョイスしたのが間違이었다。ベンチで優雅に

ブラックを飲み佇む大人な優君を演じてみたかったが、失敗に終わる。
くそダセエことこの上ない。

「どうしたのー?」

「あ、リサ先輩。」

「やつほー☆」

声をかけてきたのはリサ先輩。

相変わらずの安心と信頼のギャルっぷりである。

これ、褒め言葉な。

「優、何だか元気ないじゃん。」

「ちよつと…文化祭気分が抜けきらないっていうか…」

「あはは!わかるわかるー!だよねー…」

「アタシもだよ。」

「まったくそうは見えないんですが…」

「…凄かったです。Roseliaの演奏。」

「ん、ありがと。」

「想像以上だった…見事に圧倒されましたよ。」

「照れちやうな―…そこまで褒められるとき。」

主催ライブ、観に行けば良かったかもしれないと今さらながらに後悔する。

「優は？楽器とかやってたりしないの？」

「俺は…今はやってないです。」

「今はつてことは…昔はやってたんだ？」

どーしてこう口を滑らせちやうかなあ…

俺は。

「…ギターを…一応。」

「へえーそうなんだー！優、ギタリストだったんだ。」

「昔の話つすよ、昔の…今は違います。」

「…そっかー。」

…気を遣わせちまったかな。

何だか申し訳ない。

「でも、昨日のあいつの…朝日の演奏を

聞いてから何かおかしくって…」

「凄かったよねー！アタシもびっくりしちやった。」

「自分でも訳がわかんなくって…ギターはやめたはずなのに…この感情は何なんだろ

うって…」

「…きつとき、優はギターがやりたいんだよ。」

「俺が…ギターを？」

否定は…できない。

どこまでいっても、たとえ腐つても俺は

ギターリスト…つてことだろうか？

「アタシもさ、一回ベースやめてるんだ。」

「え…そうだったんですか？」

「うん、ブランクあるから…技術も経験もRoseliaで一番劣ってるのはアタシな

んだよねー。」

「そんなことは…」

「…ありがと、優しいね優は。」

そうか。

挫折から何が原因かはわからないがこの人も…

「…どうして、またベースを？」

「それは、友希那のため…かな？」

「湊さん？」

「うん。アタシと友希那って幼馴染でさ、昔からよく一緒に遊んでただけど…いつからか友希那、全然笑わなくなっちゃって…」

幼馴染のため…か。

「だから、アタシがRoseliaで演奏するのは友希那の笑顔をもう一度見るためでもあるんだよね。」

「なるほど。」

「ごめんね、また語っちゃったかな？」

「いえ、わかりますよ…俺も、幼馴染に

褒められたくってギターやってたクチですから。」

「そうなんだ。」

「今は花咲川でバンド組んでて、昨日も

演奏するはずだったんですけどね…残念ながらトラブったみたいで…」

「え、幼馴染ってポピパにいるの？」

ポピパって…Poppin' Partyの略称か…ようやくわかったわ。

「市ヶ谷 有咲って先輩なんですけど…」

「有咲？ 優と有咲って幼馴染だったんだ！」

「え、ええ。もしかして、知ってます？」

「知ってるよー。アタシ達の主催ライブにも出てくれたんだ。」

「へ?」

主催ライブに出た!?

Poppin', Partyが!?

それ…それ…早く言ってくれよ…。

「うわあ…じゃあ尚更行けば良かった…」

「あはは、残念だったねー。でも、近い内にポピパも主催ライブやるって言ってたよ。」

「え、まじですか!」

「うん、アタシ達も呼ばれたんだよねー

ゲストとしてさ。」

あの人…何でそんな大事なこと言わなかったんだよ。

主催ライブだなんて。

一大ビッグイベントじゃねーか。

「じゃあ今はその主催ライブに向けて練習してるんですか?」

「うん、セトリとか衣装とかあと新曲も作ってるんだよ。」

「新曲か、良いですね。」

「でも、ちよつと心配なんだよね…」

「心配？」

「主催ライブがあつた日にさ、友希那が

ポピパのみんなに言つたんだよね…

『主催ライブをする覚悟が足りていない』つてさ…」

そりやまた、手厳しいなあ…湊さん。

Poppin', Partyの皆さんも、あの演奏の

クオリティを見せつけられただろうから

何とも言えんわな。

「覚悟か。」

耳が痛い話だな。

結局、俺は未練たらたらだつたつてことか。

断ち切る覚悟が足りていなかった。

だから、揺らいでいるんだ。

心のどこかで燻りがあつたんだ。

「強いですね。湊さんは…リサ先輩も。」

「アタシ？そんなことないよー。」

「ありますよ。また立ち上がったじゃないですか…先輩は。」

「優は？もう一度やってみればイイじゃん。」

「俺は、そんな資格ないんです。」

「資格？」

「何より、あいつに申し訳がたたないんで…」

「…ごめん、何か無神経だったね、

アタシ。」

「いやいや！悪いのは俺の方ですよ。何かすみません、湿っぽくしちゃって。」

罪悪感が半端ねえ。

誰もこんな女々しい野郎の言うことなんか聞きたくねえつつうんだよな。

「可愛い後輩の悩みを聞くのも先輩の役目じゃん？」

「可愛い後輩なんですか？俺も。」

「あはは！そうに決まってるじゃーん！」

「そうですか…じゃあ、また相談してもいいですか？」

「もちろん☆」

優しいですね、リサ先輩は。

下手したら惚れてんぞ。

「それじゃあ、またね！」

「練習、頑張ってください。」

俺も帰るかね。

立ち上がり、残ったブラックを飲み干す。

「やっぱり、苦い…」

やっぱり、人間背伸びなんてするもんじゃねーな。

幼馴染の不安

文化祭も終わり、何だかんだで一週間。

落ち着くかと思いきや、期末試験まで

あと二週間ちよいつていうね…

本当に退屈しない所だな、ここは。

中間試験は慈悲深き戸山様のおかげで

赤点は免れたが（ギリギリ）今回はさすがに自力で何とかしないとイケない。

夏休み補習とかさすがにやっつけられないな。

それもあるが、そろそろ市ヶ谷先輩の所にも顔を出さないと。あん時はバタバタし

てて話も全然できなかつたし…主催ライブとやらのことも聞きたい。

夕飯の買い物がちよいと遠出して行ってみるとするか。

「久々だなーここに来るのも。」

てなわけで、やって来ました市ヶ谷家。

一体何年振りだろうかね？

「いらつしやい…おや？」

「どうも…」

祖母の万実さん、全然変わってないな。

何だか安心する。

この人の作る卵焼きがこれまた美味いんだ。

「もしかして、優君かい？」

「はい、ご無沙汰してます。」

「大きくなつたね、有咲に用かい？」

「ええ、まあ…そんなところです。」

「ごめんね、有咲、今来客中で…」

「ありや、そうですか。」

なるほど…じゃあ仕方がないか。

後日、出直すとするかな。

「買い物がてら寄つただけなので、出直しますね。」

「ごめんね。」

「いえいえ、連絡もせずに来たんで、お構い無く。」

友達とでも遊んでんのかな？

でも、来客って言い方はしないか…

まあいいや。

「…つたく、何でいつも低脂肪牛乳だよ…

たまには普通のも飲みたいつての…」

我が家の母親の謎のこだわりである。

別にどっちでも変わらないと思うけど。

「うーん、迷うな…」

肉じゃがにすっか、カレーにするか。

どちらも捨てがたい…

「家にカレー粉あったっけか…いや、待てよ…ここはあえて…」

「優。」

「っ!？」

い、市ヶ谷先輩か…びつくりしたなあ。

つてあれ？どうして？

「婆ちゃんからお前が来てたつて聞いたからさ、待つてりや会えると思って…

「って買い物帰りか？」

え、律儀に待っててくれたの？

何て良い子。

「来客中って聞いたんで、後日出直そうとしてたんですけど……もう用は済んだんですか？」

「……ああ。」

「じゃあ、ちよつと話でもしませんか？」

「でもお前、買い物帰りじゃ……」

「大丈夫ですよ。母親が腹すかせるだけなんで。」

「いや、大丈夫じゃねーだろ。」

「先輩と話す時間のほうが大事だし。」

「つたく、相変わらずだなお前は。」

再会した時は大して話せなかったからな。

主に俺のせいだけだ。

「……悪かったな。」

「どうして謝るんです？」

「いや、バンドの演奏するからってお前に言ったのに、できなかつたわけだし……」

「別に、誰が悪いって話でもないんでしょ？仕方ないことじゃないですか。」

「…まあ」

「それよりも、近い内に主催ライブつてのやるんでしょ？どうして言ってくれなかったんですか？」

「ああ…悪い、言い忘れてた。」

何だろ？

さつきからどうにも歯切れが悪いな。

「…何かあったんですか？」

「え？」

「どうにも、元気がないように見えるから…」

「そうか？そんなことは…ねーけど…」

相変わらずはあなたもだよ。

隠すのが下手だ。

そんなんじゃないだよ。

離れてたとはいえ伊達に幼馴染やってねーよ先輩。

「バンドの人達とケンカしちゃったりとか？」

「…ケンカつてわけじゃねーけど…」

何かはあったということか。

「良かったら話してくださいよ。少しは楽になるかもですよ?」

「……………」

「第一、幼馴染がへこんでんのは見過ごせねーし。」

「幼馴染か…お前、和奏レイって覚えてるか?」

レイさん?

同じスクールには通ってたけど、この二人って接点あったっけ?

「レイさんなら、この前会いましたよ。」

めちやくちや美人になって初見じゃわかんなかったんですけどね。」

「や、そこまでは聞いてねーよ…」

「そういや、バンドにスカウトされたって言ってたな。」

「…その、和奏レイがウチらのバンドのギターのやつと幼馴染でさ、それでその和奏レイのバンドのサポートに入ってたんだよ。」

なるほど…それで文化祭には間に合わなかったのか。

しかし、幼馴染ねえ…何かイヤな予感がするな。

「先輩、さっきの来客って…もしかして?」

「…バンドのプロデューサーが来たんだよ。ポピパのみんなにも集まってもらってさっ

きまで話してた。」

「プロデューサー？」

プロデューサーって…

何か胡散臭^{うさんくせ}いな。

「おたえ…ウチのバンドのギターをくださいって…」

「はあ？スカウトってことすか？」

「…うん。」

プロデューサーか何か知らんが、滅茶苦茶なヤツもいたもんだな。要は引き抜きつてこことじゃねーか。

「で、先輩方は何て返事を？」

「とりあえず、主催ライブが終わるまでは向こうが待つって話になったんだよ。」

おいおいおい。

俺が予想してたよりもずっと重い話

じゃねーかよ。

てか、これ…俺じゃどうにもならんくね？

プロデューサー引き摺り回して諦めさせるしか手段ねーぞ？

「ライブも観に行っただけど、すげーレベル高かった。」

「ライブ、あつたんですか？」

「ああ、ウチらのギターのやつもまるで別人みてーでさ……」

サポートで呼ばれるくらいだから、相応の腕はあるんだろう。ギターつてのはバンドの花形とも言われているから……腕が良いとなれば尚更需要も高まる。

「そつちで演奏するほうが、そいつの為にもなるんじゃないか？」

きつとそのギターの人も揺れているんだろう。

過去の幼馴染か、今か。

気持ちはわからないでもない。

同じ立場だったら、俺も迷うと思うし。

それぐらい幼馴染つて存在は大きいもんだ。

「先輩自身の気持ちは？その人になくなってほしいんですか？」

「そんなわけねーだろ！」

「だったらもう答えは決まってるじゃないですか。引き留めるべきですよ。」

「そんな簡単な話じゃ……」

「居てほしいんですよ？なら、言うべきですよ。本人に直接。」

「……そういう……もんか？」

「ええ、でないと後悔しますよ。言えるうちに言つとかないと……言いたくても言えなく

なっちまう。」

「…優。」

「バンド楽しいんでしょう？もうちよつと

素直になんなさいよ。」

「は、何だそりや…」

良かった、ちよつと笑ってくれた。

やっぱりこの人には笑っててくれないと。

沈んでるのは似合わねーよ。

「そうだよな…」

「偉そうなこと言いましたが、俺自身バンド組んだ経験ないんでこれ以上言えることはないんですが…」

「そういうお前は？」

「え？」

「ギター、やってんのか？」

あー、やっぱり来ちゃうか…その質問。

できれば聞かれたくはなかったが…

「…やめました…ギターは。」

「そうか、あんなに好きだったのにな…」

「…俺にはもう…弾く資格がないんですよ。」

「はあ？弾く資格がないって…何があつたんだよ？」

「…つまらない話ですよ。ごくごくつまらない話。」

聞かせる話でもない。

それに、聞いたらきつと幻滅する。

「主催ライブっていつやるんですか？」

「今月の最後の土曜日だ。」

「今月ですか、じゃあもうすぐだ。」

「…観に来てくれんのか？」

「ええ、先輩にそこまで言わせるPoppin Partyの皆さんのことも知りたく

なつたんで。」

「そっか…優…ありがとな。」

「え、デレた？」

破壊力がやべえ。

「バツ…デレてねーよ！」

「またまた、照れちゃって…」

「照れてもいねー！さっさと帰れ！」

「ちよ、いきなり酷くないすか!？」

でもま、元気出たみたいだから良しとするか。

「そうだ、連絡先教えてくださいよ。」

「ああ、そういや交換してなかったな。」

これで、いつでも連絡が取れるようになったわけだ。

「何かあったらまた、連絡くださいね。ていうかします。」

「ああ。」

「じゃ、また。」

「…ああ、またな。」

しかし、この人にごこまで言わせるとは。

ちよっと嫉妬しちまうな。

他のメンバーの人のことは知らないが、この人達なら大丈夫だろう。どんなことがあっても乗り越えられる。

根拠はないが、何故かそんな確信めいた

予感があった。

主催ライブ、行くか。

そこで何か…見つかると信じて。

過去と向き合う時

「へえ、弾き語りか。」

初めて見た。

中学生ぐらいの女の子だろうか？

路上に座り込み、熱心にギターを弾き、歌っている。

歌も演奏もそれほど上手いとはいえなかったが、惹き付けられるものがあつたのか、俺の足は自然とそちらへと向かつていた。

まったく、どういう心境の変化なのやら。

以前までなら確実にスルーしていたはずなのに。

女の子は熱中していたせいかな、暫くは俺に気づいていない様子だったが、気づくと驚いたようで、演奏が中断された。

「悪い、邪魔したか？」

「ううん、ちよつとびっくりしただけ。」

「気にせずに演奏してくれよ。」

「うん。」

終盤だったのかほどなくして、演奏は終わった。

「いいね、ちよつとしか聞いてないけど、良かった。」

「ありがとう。」

「それ、何て曲？」

「んー…決めてない。」

「自作楽曲かい。」

それを路上で弾いてたのか。

何て度胸してんだか。

「飲み物買ってくるけど、何かいる？」

「ついでに買ってきてあげるけど。」

「いいよ、お金持ってないし。」

「良い演奏のお礼だって。気にしなくていいよ。」

「じゃ、ブラックコーヒー。」

「飲めるのか？見栄は張らんほうがいいぞ？」

「…甘いので。」

「了解。」

「へえ、半年か。」

「うん、だからそろそろいいかなーっと思って。」

「それで、路上ライブを。」

色々ぶつ飛ばしすぎだろうとは思ったが、口には出さないでおく。やり方は人それぞれだ。

「うん、でも全然誰も来なくって：お兄さんが初めての観客。」

「そうか、俺は記念すべき観客一号ってわけね。」

「そうなるね。」

「でも、大したもんだ。半年でそこまで

弾けりやあさ。」

「わかるの？」

「まあね。」

「つてことは、ギターやってたの？」

「昔ね。今はやってない。」

「…どうして、やめちゃったの？」

「…大切な人を傷つけたから…かな。」

「えっ？」

「ははっ、冗談だよ。色々忙しくってさ、暇がないだけ。」

「そうなんだ。高校生？」

「うん、高校一年。君は、見たところ中学生かな？」

「そう、中学二年生。」

「じゃーまだまだ伸び盛りだ。」

「そうかな？」

「ああ。」

「でも、周りの子達は下手くそって言う。」

「言わせとけ。練習しまくってさ、上手くなってそいつらの度肝ぬいてやればいいじゃん。」

「…文化祭あるから、そこで演奏したいって思ってるんだ。」

「へえ、いつ？」

「9月。」

9月ってことは、後3ヶ月くらいか。

「一人で弾くの？」

「うん。」

「バンドは？組みたいとか思わない？」

「いい。それに、楽器やってる人とかいないから。」

「そうか、まあ、ギターソロでもやれるっちゃやれるからな。」

「…やっぱり、女の子がギターやってるのって変かな？」

「…全然、変じゃねーよ。」

「本当？」

「ああ、この前な、俺の通ってる高校でも文化祭があつて、そこで君とそんな変わらない女子高生がソロでギターを弾いたんだ。」

「へえ…」

あの時のあの衝撃。

今でも鮮明に思い出せる。

「…正直言つて、凄かった。圧倒されたよ。それまで自分が抱いてきた価値観とかを全部ぶっ壊された。」

「…そんなに凄かったんだ。」

「…ああ、だから周りの視線とか声とかは気にすんな。」

その熱意があればきつとできる。

俺はそう思う。

こつ恥ずかしく口には出さないが。

「ありがとう。そんな風に言われたのは初めて。」

「どういたしまして…さてと、邪魔したな。俺はそろそろ行くから。」

「待って！」

「ん？」

「名前…教えて。」

「ああ、優…星川 優ってんだ。」

「私、由佳莉って言うの。」

「由佳莉か、良い名前じゃねえの。」

「…優の音も聞きたい。」

早速下の名前、しかも呼び捨てかい。

まったく、最近の女子はもう…

「ああ、いつかな。」

「約束だよ！」

「ああ、頑張れよ由佳莉。お前ならできると。」

何か俺も色々と決心がついたよ。

今さらだけど。

そうだよな。過去は変えられない。

罪は決して消えない。

だからって、それを理由に逃げ続けるなんてのはいけないよな。

自分より小さい女の子が頑張ってたんだ。

いい加減俺も、前に進まなきゃな。

過去に向き合わなければならぬ。

辛くとも、傷つこうとも。

あいつは俺の何倍も傷ついたはずだから。

過去と向き合おう。そして、進もう。

それが俺のできる、あいつへの贖罪だから。

ギタリストとして

「そのあなた！ちよつといいかしら？」

振り返るとあら、驚き。

絵に描いたような美人さんがおりました。

花咲川の制服を着てるけど、見たことはないな。

ド金髪だし、外人さんかな？

そう、思っているとチラシを手渡された。

「えと、ぽぴぱ…パピポ…ぱーてい…？」

何か口に出すだけで舌噛みそう。

「ええ！今度ライブがあるの！是非あなたも来て頂戴！とくつても笑顔になれるわよ

！」

笑顔ねえ…つてライブつてこれ

Poppin' Partyの主催ライブつてやつやんか！

本当にやるんだな…疑ってたわけではないが。

「あの、これつて…つて居ねえし。」

あの人瞬間移動でもしたん？

影も形もないけど。

「そうか、いよいよか。」

ライブハウス Galaxy 行って…確か朝日が
バイトしてるところだったつけ。

そこでやるみたいだな。

つーか地図がアバウトすぎる。

駅から200歩で、本当に歩いてやろうか。

「〜♪♪」

「ウツキウキやないかお前。遠足前の小学生か。」

「ひゃあつ！」

翌日、詳しいことを聞くため、朝日に話しかける。

ていうかびびりすぎだろ、こっちがびびるわ。

「…びつくりしたあ…」

ていうか、こいつと話すのも何だか久しぶりだな。

「鼻歌なんか歌って良いことでもあったのか？」

「週末にライブがあるから、楽しみでつい…」

「ほびほびライブはーていーってやつ？」

うん、やっぱり舌噛みそう。

「うん！ポピパさんの主催ライブ！」

「っ!？」

そう言うのと急に身を乗り出してきた。

ちよ、近い近い近いつて！

急にテンション爆上がりしたんだけど

こいつ…どうしたんだ一体。

「朝日のバイト先の Galaxy でやるんだろ？」

「うん！もしかして、来てくれるの!？」

「いや、まあ、行こうかなーとは思ってはいるんだけど…幼馴染の晴れ舞台だしさ…」

今までにないぐらいグイグイ来るな、こいつ。そんなにライブが楽しみなのか？

「お…」

おっ

「お、お、お…」

どうした？急に壊れたぞ。

朝日さん？

「おーい？どした？」

「お…幼馴染…？」

「ああ…市ヶ谷 有咲って人。ちっちゃい頃からの付き合いでな。」

「い、市ヶ谷先輩と…幼馴染やったん？」

「そうそう。バンド組んでるって聞いた時はびっくりしたなあ。」

「で、でら羨ましいわあ…」

「はあ？」

マジでどしたん？

目がものすごくキラキラ輝いとりますが…

「いやいや、羨ましいって…もしかしてお前、ポピパさんとやらのファンか？」

「…うん。」

「じゃあ、憧れのバンドって…Poppin, Partyのこと？」

「うん…去年の夏に、SPACEっていうライブハウスで、ポピパさん達のライブを観て

…私もバンドが組みたいって思ったの。」

「なるほどねえ…で、肝心のバンドは？」

「そ、それは…」

「集まつとらんと…」

「はあ…私、何でこんなにダメなんやろ…」

「…ダメなんかじゃねーよ。」

「え？」

「お前、すごかったじゃねーかよ。あん時のお前のあの演奏、俺は今でも覚えてるよ。」

「あ、あれは…」

「羽丘一年！朝日 六花です！ってな。マジでびっくりしたけどな…あの時は。」

「い、言わんといて…」

「あれ、即興だろ？」

「じ、実は…」

「はあ？覚えてない？」

「う、うん…あの時は夢中で…」

マジでかよ…あんな演奏かましといて…

「…初めてだったよ、他人の演奏を素直にすげえって思ったのはさ。」

「…ありがとう。」

「ただ、凄すぎた。結果的にみんな、ドン引いちゃったんだよ、残念ながら。」

まったく、皮肉なもんだ。

意図したアピールではないにしても、存在を知らしめるには絶好の機会だった。

それを、不意にってしまった。

「まあ、胸を張れよ。お前はすげえギタリストだ。それは俺が保証するよ。」

「ど、どうして?」

「ん?」

「どうして、そこまで言ってくれるの?」

「んー、どうしてか…なんていうかほっとけないんだと思う…お前のこと…一人のギタリストとして…さ。」

「え、ギタ…リスト?」

「ああ、こう見えても昔はギター少年だったんだぞ…俺。」

「優君、ギターやっとなん?」

「やっとなんよ…過去形だけだな。」

「バンド、組んでたの?」

「いや、バンドは組んでなかったけど、ミュージックスクールなるところには行かされて

たな。市ヶ谷先輩と一緒に。専攻は違ったけど。」

「そ、そんな過去が…」

「意外だったか？でも、昔の話だよ。ギターもやめたしな…」

「…やめちやったん？」

「ああ…もう弾くこともない…って思ってたんだけどなあ…やっぱり、そう簡単にやめられないんだと思う…きつとどこかに未練があるんだよ。どれだけ、否定したとしても。」

「だったら、やったほうがいいと思う！優君、ギター好きなんやろ？」

「はは、お前に気づかされるとは…思っても見なかった。お前のおかげだよ。ありがとうな、朝日。」

「え？急にお礼なんて…」

「恥ずかしがんなよ…俺の素直な気持ちだ。」

今なら、向き合える。

過去に。罪に。そして受け入れよう。

それら全てを。

「頑張れよ。」

「うん、ありがとう。」

さあ、
今こそ痛みを伴う過去に向き合う時だ。

R e m i n i s c e n c e

中学三年生の春。

それなりの時間を過ごした静岡を離れ、

新たな学校へと通うことになった。

あの親父は本当に急だから困る。

仕事の都合だから仕方ないのはわかるが。

とはいえ、別に親しかった人間がいたわけでもないのに、そこはどうでもいいのだが。

「星川優です。よろしくです。」

素っ気ない自己紹介。

感じ悪いな。

何だアイツ。

そう思うんなら勝手に思え。

どうせお前らとなんて一年も経たずに

お別れなんだ。

関わるつもりもない。

何もしないから、ほっといてくれ。

「ほ、星川君。」

休み時間、早速クラスの女子の一人に話しかけられた。

「…何？」

「先生に学校を案内してくれって頼まれたんだけど…」

そういうのを異性にやらせるかね。

どっちもイヤだけど。

「ああ、別にいいよ。」

手を振って否定の意を示す。

「でも…」

「いいって。」

「……」

「何？その言い方。」

また一人何か女子が現れたよ。

こいつは何かめんどくさそう。

「あんた、自己紹介の時から思ってたけど感じ悪いよ。」

「そりや、どうも。」

「褒めてないし。」

鬱陶しいことこの上ない。

突っかかってくるんじゃないよ。

「はあ…だる。」

「は？」

「ちよ、やめようよ…里美ちゃん。」

「祥子、あんたお人好しすぎ。こういうのには一回言つてやらないとダメなんだって。」

「あの、行つていい？」

「あんたね…」

「ご、ごめんね！星川君…」

謝るくらいならこれからは話しかけないでほしいものだ。

もう、友達だのなんだのそういう時期じゃねーだろ。

そういう仲間意識みたいなものに

俺を巻き込むな。

孤独？

上等だよそんなもん。

プライドなんか何も無い。

スクールカーストとかステータスなんか

くだらねーってことにお前らはいい加減気づけ。

おかげで一週間も経たずに俺は誰からも

話しかけられることはなくなった。

たまに、あの様子だっけ？

小柄な眼鏡の女子が心配そうな顔してチラチラと見てくるのがうざったいが。

概ね、望んだ結果になった。

あとは教師に睨まれないように最低限のことをこなすだけだ。

こんなもんだろ、学生生活なんて。

何も起きない。

退屈な日常と生産性のない会話を繰り返すだけ。

そのループ。

俺にはギターさえあればいい。

それ以外はいらぬ。

あーあ、早く帰って弾きてーな。

「あ、そういえば……」

この学校、吹奏楽部つてもものがないらしい。

そのわりに、音楽室にはたくさん楽器があった。

もちろん、ギターも。

：ワンチャン弾いてもバレないんじゃないやね？

音楽室に行くやつなんてそうそういないだろうし。

最悪、音楽担当の教師に言えば楽器ぐらい使わせてくれんだろ。珍しい種類のギターもあつたし、帰りに寄ってみるか。

「失礼しますよーっと。」

鍵はかかってないみたいだ。

おお、あるある。ちやつかりエレキも置いてんじやんかよ。もつたないなー置いてるだけなんて。

ちよつくら弾いてみつか？

と、そこへ…

「おお、人がいたのか！」

やべ。

早速バレた。

見たところ音楽担当の教師だろう。

30代後半つてところだろうか？

しかし…頭頂部が残念なことになってんな…御愁傷様です。

「新入生？」

「あ、いえ…3年です。」

「見ない顔だな…もしかして、転校生か？」

「はい…何かすんません、勝手に入っちゃつて。」

「いやいや、全然構わんよ。あ、俺は音楽担当の山田、よろしく。」

「星川です。」

「そうか、星川君。唐突だが楽器に興味はないか？いや…ギターを弾こうとしてたな…

経験者かい？」

「ええ、一応。」

「そうか！じゃあ軽音楽部に入ってみる気はないか？」

「はい？」

急になんだ…このハ…おっさん。

この前ウチに来てた訪問販売の人と同じテンションなんだが…一言で言うとうと暑苦し

い。

「軽音楽部の顧問もしとるんだが、いかんせん部員がいない。それじゃ、寂しい！」

「というわけでどうだ？」

「何がというわけでだ？」

「部活とかだるいんですけど。」

「断ろ。」

「来たい時にくればいいし、別に強制はしない！もちろん楽器とかその他諸々は好きに使ってくれて構わない！破格の条件だろ？」

「あんだ、教師より営業のほうが向いてるよ。」

「でも、まあ…確かに、ちよつと魅力的ではあるかな。」

「機材も揃ってるし…。使いたい放題か。」

「来ても来なくても構わないんすね？」

「ああ、さつきも言ったが強制はしない！」

「音楽室に誰か来ることは？」

「基本ないな。」

「それなら…良い環境じゃないか。」

「先生も基本は干渉しない。自主性を重んじる。」

なんだ、この先生良い人じゃん。

「じゃあ、入ってもいいですよ。」

「本当か！じゃあ、先生は入部届けの用紙持ってくるから……ちよつと待っていてくれ。」

「お願いします。」

「ただ必死なんだよ。」

別に俺一人入ったぐらいで……そんな変わらんだろうに。

暇だし、さっきのギターでも弾かせてもらいますか。

やっぱいいわ、こいつ。

俺の相棒もカッコいいけど。

フイーリングって大事だね。

どうせなら、見た目良いの使いたいじゃんよ。

ギタリストの性ってヤツかね？

いい！いい！

素晴らしい！この重厚なサウンド！

家では出せない。

でかいアンプがあると違うね、やっぱ。

久々にテンション上がるわ。

騒音とかも気にする必要ねーもん、ここなら。
しかし、人間そうになると視界は狭くなるもので…

「良い音出すね。」

「まーな、何せ設備が段違い…」

ん？

「!？」

今、女子の声しなかった？

恐る恐る目を開ける。

「…えつと、どちら様？」

「それはこつちの台詞だよ？キミは新入生かな？」

これが、出会い。

俺と彼女のファーストコンタクト。

淡い思い出の序章。

逢沢優歌

「あ！もしかして、入部希望の人!？」

「違います。」

つい、反射で答えてしまった。

誰だよ、この女。

「違うの?」

「違います。失礼しました。」

そう言い、退室しようとするが、腕を掴まれる。

「待って!」

ああ、うるさいな。何だよ？

睨み付けてやるが、まったく効果はないみたいだ。

「ギター、教えてよ!」

「はあ?」

「じゃなかった…まず自己紹介だよね。」

いや、意味わからん。

そもそも何なんだよお前は。

もしかして、部員の人じゃないよな？

コホン、と咳払いをするとその女は勝手に自己紹介をし始めた。

「私、逢沢あいざわ 優歌ゆうかっていうの。キミは？」

「名乗るほどの者じゃありません。用事あるんで、これで帰ります。」

「いやー待たせたね、星川君！」

今度こそ帰ろうとするが、最悪のタイミングで先生が戻ってきた。

あんた、タイミング悪すぎだろ！

しかも、騙しやがったな！

「あ、せんせー！こんにちは。」

「おお、逢沢。喜べ、新入部員だぞ。転校生の星川君だ。」

「ホントに!？」

勝手に決めんなよ。

俺は帰る。

「唯一の部員の逢沢だ。星川君、仲良くしてやってくれよ。」

いや、だから勝手に…

「よろしく！星川…何ていうの？」

「はあ…優、星川 優だ。」

「ゆうってどういう字書くの？」

別にいいだろ、そんなの。

かったるいわ。

「優秀とか優勝の優。」

「そっか…優しいの優か…私と一緒だ。」

どうでもいい。

「良い名前だね。」

「そうか？」

女の子みたいとかよく言われたけどな。

どうせなら勇ましいの方の勇が良かったわ。

「改めて、よろしくね！優！」

早速下の名前呼びかよ。

しかし、名前褒められたのは初めてか。

何だろう…悪い気はしない。

結局断りきれずに俺は軽音楽部（部員二名）に半ば強引に入部させられてしまった。

転校早々災難だ。

しかも、部員が女子一人かよ。

おまけに俺の一番苦手なグイグイ来るタイプだ。

この逢沢 優歌ってやつは。

「ね、ギター教えてよ。」

「断る。」

「何でー?」

「教えんのが絶望的に下手だし、ぶっちゃけめんどくさい。」

「ぶっちゃけたね。」

「てわけだ。弾きたきや自分で頑張れ。」

「じゃー何か弾いてよ!それならいいでしょ?」

「はあー…リクエストは?」

「何でもいいよ!」

「りようかい。」

他人に演奏聞かせるのは数年振りだ。

幼馴染とのお別れ以来か。

そういえば、元気にしてるのかな。

今となつては懐かしい…あーちゃん。

「うん！やつぱり良い音…」

「わかるのか？」

「んー…なんとなく…でも、ちよつと悲しそうだったな。」

「ああ…ちよつと昔を思い出してな。」

感情が表に出ちまったか。

「ノスタルジーってやつ？」

案外、難しい言葉知ってるんだな。

「たぶん、それだ。」

「転校してきたんだっけ…友達と別れて

寂しいでしょ？」

「別に…そんなのいなかったし。」

「ふーん…寂しいね。」

「ほつとけ。」

「ギターは？昔から？」

「かれこれ7、8年くらいはやってるかな。」

「そんなに!？」

月日が経つのなんてあつという間だよ。

十代も折り返し地点。

あつという間に二十歳になって、あつという間にオッサンになってくんだろいな。

「ね、やっぱりギター教えてよ!」

「断つただろ。」

「いいじゃん!一緒に弾いたらもつと面白くなるよ!」

「つーか、今までの活動は何してたんだ?」

「んー…歌ったり、ピアノ弾いたり?」

「一人でかよ?」

「んーん、もう一人いたんだけど…転校しちゃった。」

「なるほど。」

まあ、暇だしな。

俺の音を褒めてくれたし、悪いやつではなさそうだし…多少騒がしいけど。

いいかもしれないな。

こいつの口車に乗るわけじゃないけど。

チヨロいとか言うな。

「…本当に下手だぞ?」

「え? 教えてくれるの!？」

「それでいいんなら。」

「やった! ありがと! 優!」

「お、おおっ…わかったから揺らすな。」

「師匠って呼ぶね。」

「呼ぶな。」

俺は、無意識の内に求めていたのかもしれない。

誰とも関わりたくないと思いつつも…

同時に誰かといいたいという相反する感情も

抱いていたのかもしれない。

とにもかくにも、これが始まり。

大切なこの時間

「はあー…」

「いつにも増して不機嫌だね、アンタ。」

…えっと、誰だっけかこいつ。

ていうか何で絡んでくるんだよ。

「白鳥 里美。いい加減覚えなよ。」

すみませんね、他人に興味が薄いもので。

「で、あつちは？」

ちっこい眼鏡の女子。隠れてるつもりかは知らないが、バレバレだからな？

「佐々木 祥子。アンタのこと気にしてんだよ、色々ときさ。」

「ちよ、里美ちゃん！」

「ふーん…で、何で懲りずに俺と関わろうとするわけ？」

「別に、あたしらの勝手じゃん。」

「哀れみとか、同情の類ならいらねーぞ。自業自得なんだからな。」

「アンタ、一匹狼気取ってるだけでそんな悪いヤツじゃないみたいだしさ。」
なんだよ、それ。

俺のことをわかった気になるなっつてんだ。

「それで？ため息の理由は？」

「…お前らさ、逢沢 優歌つてやつ知ってるか？」

「ああ…E組の。」

「逢沢さんと…何かあったの？」

「いや、それがよ…山田つて先生に騙されて軽音部に入部しちゃまったんだけど…その逢沢つてのがテンションあり余つてんのか…元気すぎて手に負えねーんだよ。」

「へー、良かったじゃん。」

どこをどう聞いたらそういう感想が出るのかな？

愚痴つてただけども。

「逢沢さん…元気なかつたから。」

「え、あいつが？」

「うん…あんなことがあつて…」

「ちよつと！」

何か言いかけた佐々木を白鳥が強い口調で止める。

「何かあったのか？」

「ご、ごめん！何でもないよ！」

「ふーん…ま、いいけど。」

さては、あいつ何かやらかしたな？

まったく困ったもんだ。

果たして俺に制御できるかどうか。

「星川…ちゃんと仲良くするんだよ。」

「お、おう。」

何なんだその妙なコメントは。

ちなみにそのコメントに対する返答は無理だ。

ほんつとに…何で引き受けちゃったかね。

誰かに何かを教えるなんてガラでもないし。

誰にも邪魔されずに至福の放課後を過ごす計画が台無しだぜ、まったく。

「ねえ、星川先生！」

「はいはい、何かね？」

逢沢はやかましかったが、吸収力はあった。

教えたことは大抵すぐにこなした。

挫折ポイントと呼ばれるFコードも難なくこなしやがった。

すぐに飽きてやめるかと思っていたが

予想に反してあいつはやめなかった。それどころか、下校時間ギリギリまで練習しているほどだ。

「だいぶ、様になったな。大したもんだ。」

「そう?」

「ああ、正直すぐやめるかと思ってたけど。」

「やめるわけないじゃん。すごく楽しいよ!」

「そりや良かったな。」

「誰かと何かするのって久しぶりだったからさ…」

「ま、俺でよければいつでも…は無理だけど、暇な時は付き合っただけでやるよ。」

「ありがと…優が来てくれて本当に良かった。」

はあ…:そういう台詞を面と向かって言うかね。

「いきなり何だよ…」

「あはは、なんとなくそう思ったから言っただけ。恥ずかしがってるの?」

「がってねえ。」

「本当に？」

「本当に。」

「よっ！青春してるとこ邪魔するぞ。」

「いやいや、むしろナイスタイミングだよ」

先生。ノリは腹立つが。

「どうだ？逢沢は。」

「悔しいですけど、俺なんかよりよっほど才能ありますね。簡単な曲なら弾けるんじゃないですかね。」

「そうか、星川の指導の賜物だな。」

「別に：俺は何もやってないっすよ。」

「はは、謙遜するなって。何なら文化祭に出てみるのもいいかもしれないな。」

「文化祭ですか？」

「ああ、9月にあるんだ。」

文化祭とか良い思い出がねえ。

リア充限定だろ、楽しいなんてのは。

付き合わされるこつちの身にもなれつてな。

「優もギター弾けば？」

「は？イヤだよ。」

「だって、せつかくの文化祭だよ？」

私も歌うからさー！」

「何故にそうなる。」

「ギターも弾くよー！弾いて歌うー！」

「そうか、頑張れな。」

「えー！」

人前に出るのとかマジで無理。

緊張して縮みあがるから。

クソザコメンタルに定評あるから俺。

「ていうか、まだまだ先だろうが。」

「あつという間だよ。こういうん何とかって言うでしょ？」

「光陰矢の如しな。」

「そうだ、失った時間は戻っては来ない。無為に生きるべきではないっていう戒めの言葉でもあるんだぞ。」

「じゃあ、先生の若かりし頃も…髪の毛も…もう戻ってはこないんですね。」
「…言うな。最近、娘にも言われ始めてな…」

「娘さんいたんですか…」

「優、ダメだよ？ せんせー薄いの気にしてるんだから。」

「お前フオローしてるつもりだろうが、追撃かましてるからな？」

オブラートに包みなさい。

…そもそもオブラートって何だ？

翌日の放課後、あいつはいなかった。

風邪でもひいたか？

まあいい…おかげで思う存分、暴れられるぜ。

「いやあ、上手いもんだな。」

「ああ、先生こんにちは。」

「逢沢は？」

「あいつ、今日は来てないみたいで。風邪でもひいたんすかね。」

らしくねーけど。

普段からあのテンションだろうから時には休息も必要だろ。

「寂しいだろ？」

「それでもないですよ。」

「けど、良かったよ…星川。お前が来てくれてさ。」

「どしたんすか？急に。」

「最近の逢沢は楽しそうだよ。ここだけの話、お前のことばかり話すんだ。」

「へえ、そうなんですか。」

なんかむず痒い。

「河合：前にもう一人部員がいたんだが、転校してな…それ以来すっかり元気がなくなってたんだ。」

あの、元気娘が信じられねーな。

無理もないか、一人じゃあな。

俺は好きだけど…きつとあいつにとっては退屈で寂しかったんだろう。

「…これからは、もうちよい優しくしてやりますか。」

「助かるよ。お前を強引に引き入れた甲斐があったってもんだ。」

「いいですよ、それはもう。」

むしろ、感謝してる部分もある。

何もかも新鮮な時間は、そんなに悪くはない。

逢沢のノリとテンションは非常に絡みづらいが…それも最近が悪くはないと思っ
ている。

充実している…のかもしれない。

大切かと言われればそうなのかもしれないと答えられるくらいには…俺はこの時間
を気に入っていた。

涙の理由は

「おーす…つてどした？」

「はあ…」

何だかものすごいダメージ受けてるっぽいんだが…普段のこいつからは考えられないほどの意気消沈っぷりである。

もはや答える気力もないのか逢沢は机に突っ伏しながら一冊の雑誌の記事を指差す。

なになに？アイドルバンド、デビューライブにて口パク&当てフリがバレる…？

あちやー…やつちまつたな、こりや。

要するに、楽器は弾いてないうえに歌は歌ってないってことだろ？

致命的すぎる。

それは一番やつちやいけないことだろ。

アイドルバンドだかなんだかは知らないが…アイドルはアイドルらしくやってりや

いいってのに。

話題づくりかなんか知らんが失敗して本業にまで影響出てるようなら世話ねえって話だな。

「あー、その…御愁傷様…ファンなのか？」

「…うん、ボーカルの子が好きで…ライブには行けなかったんだけど…」

「元氣出せよ…もうバンドやるのは無理だろうけどな。」

あ、やべ…言葉のチョイスミスったか。

「でもよ、良い教訓にはなっただろ？楽器は演奏してナンボなんだよ。フリなんてのは音楽に対しての侮辱も良いトコだ。」

「うう…そうだけど…そうだけとお…」

よよよと効果音が聞こえてきそうだな。

すぐに立ち直れつてのは無理な話か。

「お前は頑張れよ。」

才能も気持ちもあるんだからな。

「優はなんでギターを始めたの？」

「何だよ急に。」

「聞いてなかったなーっと思って。」

「別に、大した理由じゃねーさ。」

親父がギター好きでよ、俺にもやらせようとして買ってくれたんだ。」

「そうなんだ、良いお父さんだね。」

「そんなことないけどな。」

「動機はともかくさ、ここまで続けてきたんでしょ？その想いは本物ってことじゃん。なら、感謝しなくちゃ。」

「そんなもんか。」

「そんなもんだよ。」

まあ、俺からギターを取ったら何も残らないってくらいには大事なものにいつの間になつてはいたけど。

「お前は？」

「んー？」

「バンドとか組みたいと思ったりしないのか？」

「んー…どうだろ。優とならいいかも。」

「じゃあ、一生無理だな。」

「なんでー？一緒にやろうよ！」

「やだ。」

俺はバンドなんて柄じゃない。

そういうのは陽キャの特権だろうが。

勝手にやってくれ。

「組んだところですが受験シーズンだろ。そんなこんなであつという間に俺とお前もお別れだ。」

「そっかー…そうだよね…」

「組むんなら高校入ってからにしろよ。」

そんなくらいにならある程度上達もしてらだろうし。」

「じゃあ、大事にしようよ…この瞬間をさ！」

「なんだよ…やつすい青春ドラマみてーな台詞はきやがって。」

「いいの！安くても。」

「なんじゃそりゃ。」

つたく、バカ話してたと思つたら急に真理をつくようなことを言うからなこいつは。

最初は鬱陶しかつたけど、最近は悪くなくとも思い始めている。これって末期かな？

末期かもしれない。

「アンタってさ、逢沢と付き合ってたの？」

「んぐっ!？」

ちよ、こいつ今何だった？

「おまつ…お前ね…人が飲み物飲んでる時にそんな爆弾発言すんなよ。」
ていうか誰だよお前…ミサトだっけ？

「里美。二ヶ月経っても名前覚えらんないのは初めて。」

心を読むな心を。

「ていうか後ろのちっこい眼鏡。」

お前はお前で何なんだよ。言いたいことあるならはつきり言えよ。」

「ご、ごめんなさい…」

いや、謝ってほしいんじゃないやなくてだな…

「つーか、どこをどう見たらそう見えるんだよ。」

誰か噂流したりしてんのか？

もしそうだったらソイツ締め上げてやんよ。

「祥子が気にしててさ、気になるのはあたしもだけだ。」

「ちよ、ちよつと里美ちゃん！」

「答えは、そんなわけねーだろ…だ。」

「そつか…良かったね祥子。」

「はあ？」

何でそこで良かったねなんだ？

「でも最近の星川、楽しそう。」

「そうか？」

「うん、最初の頃より良い顔になった。」

「ふーん。」

自分じゃわからんけど、そうなのか。

「星川君のおかげで…逢沢さんも元気が出たみたいだし。」

「そりゃ買い被りすぎだ。何にも特別なことはしてねーよ。」

「と、特別じゃなくても…星川君がいるだけで逢沢さんは救われてるんだと思うよ？」

「どうでもいいけど…何でお前俺から目を逸らして話すんだ？ 恥ずかしがり屋さん？」

「アンタにだけね。」

「もう・里美ちゃん！」

何か顔真っ赤にしてるし。

女子ってのはよくわからん。

わかりたくもないが。

救われてるねえ…それは俺も同じだよ。

強がっても平気なフリしてもやっぱり独りは嫌なんだ。

人間ってのはコミュニティの形成を前提として成り立っている生き物だから…きつと誰もそれからは逃れられない。

だから、俺は感謝してる。

あいつに…逢沢優歌に。

絶対に口には出さないけど。

「…遅い。」

何をやっとなだあいつは。

ちよつと褒めたとたんにコレか。

今日チラつと見かけたからいるはずなんだが…サボりつてのはあいつに限ってないだろうし。

顧問の山田先生も何も聞いてないみたいだし…どうしたもんか。

「帰るか。」

何だか気分が乗らないし、今日は帰ろう。

帰る途中で逢沢を見かけた。

やっぱりいるんじゃないかよ。

油売りやがって、まったく。

「おーい、こんなところで何やってん…」

そこまで言いかけて思わず止まる。

「優…?」

泣いていたから。

何で…

何でだよ?

「い、い、ごめんね…お腹痛くてさ…いやー

やばかったー!」

そんなんじゃねえだろ、その涙は。

何で泣いてるんだよ？

「明日はちゃんと行くからさ……じゃあね！」

「お、おい！」

下手なウソつきやがって……ただ事じゃねえだろ。

何で俺に何も言わねえんだよ。

とりあえず、明日あいつに会って話そう。

同じ部員の……それも女の涙を見て見ぬフリするほど俺も落ちぶれてはいないつもりだ。

もういいよ

翌日、あいつの姿は学校にはなかった。

クラスの奴に聞いてみたところ休みらしい。

「ちっ…あいつ…」

なんかモヤモヤするな…くそっ。

何かあったんなら何で俺に相談しないんだよ。バレバレのウソなんかつきやがって

…

「さつきさあ、逢沢のこと聞かれたよ。」

「あー、あの星川君って人でしょ？」

「そうそう、でもかわいそうにねー。」

あいつに目をつけられてさ…転校してきたから何も知らないのは当然なんだけど

「さ。」

「…はっ…」

あいつら何を言ってるんだ？

「でも、バカだよー逢沢もさ…河合のことを庇ったせいで今度は自分が標的になるんだもん…結局河合も

転校しちやっつたしさー…大損じゃん？」

「あはは、言ってるー！」

何を笑ってるんだ？お前らは。

頭お花畑かよ？

「ちよつといいか？」

「え!？」

「あ、ほ、星川君…」

「詳しく聞かせてくれよ…今の話。」

「え、あ、えつと…」

「いいからさつさと話せ。」

「ひっ…！」

俺の自制心が働いてる内にさつさと言え。

こいつらが女じゃなかったらとつくにぶん殴ってるけどな。

「……………」

「だ、だからさ、関わらないほうがいいんだよ！あいつとは…」

そうかよ。

そういうことかよ。

全部わかった。

何もかも。

あいつの涙の理由も…全部。

「くそっ!!」

怒りを押さえきれずに壁を殴りつける。

怒り…それは、誰に向けてのモノだ？

逢沢か？

逢沢を苦しめてる連中か？

…違うな。

自分に対しての怒りだ。

何も知らずに過ごしていた俺への怒り。

「ちよ…やばいって…この人。」

「も、もういい？星川君。」

「ああ、とつとと失せろ。」

あいつは苦しんでいた。

独りで。

理解者もいなくなった中…ずっと。

だからこそ何でなんだよ。

「気にいらねえ…」

何もなさそうに振る舞いやがって。

泣くぐらいだったら相談しろよ。

何も知らなかった俺がバカみたいじゃねえか。

とにかくあいつに会わなきゃ始まらない。

イライラしてもしようがないのはわかりきってはいるが、どうにも感情の整理がつか

ない。

俺は携帯なんかも持ってないから連絡を取ろうにも取れないし…できることは待つしかない。

翌日もあいつの姿はなかった。

風邪…らしい。

「お前ら知ってたのか？逢沢に何があったのか。」

「…聞いたの？」

「ああ。」

同じクラスの白鳥と佐々木を問い詰める。

その様子だと知ってたんだな。

「い、いめん…」

罪悪感からか、佐々木が謝罪する。

見て見ぬ振りをしてるって捉えられても

おかしくはないからな…実際そうなんだろうが。

「何で謝んだよ…別に責める気はねえよ。」

それに、謝る相手が違う。

「で、でも…」

「バカだよな…あいつも…くだらない正義感なんか出すから自分が損しちまう。」

平坂 由姫。

こいつが首謀者らしい。

成績優秀・容姿端麗・実家が金持ちと

お嬢様のテンプレ要素をどこまでも詰め込んだような奴だ。

気にいらぬ奴がいると取り巻きを使って徹底的に攻撃する。

その標的になったのが河合 美月って奴らしい。

あいつは、逢沢は見て見ぬ振りができなかつた。

その結果がこれだ。

結局河合って生徒もいなくなり、あいつは見事に四面楚歌ってわけだ。

こいつらみたいに関心してやつらはいらぬみたいだけど…

「…バカなこと考えてない？」

「俺の勝手だろ。」

手っ取り早いのは平坂って奴をシメることだが…さすがに女に手をあげるわけには
いかない。

やっぱりあいつと会って話すことが最優先だ。

何なら山田の先生も事情を話せば味方になってくれるだろうし。

どうせ、あいつのことだ。

心配かけさせたくないって心理が働いているんだろう。

ふざけろってんだ。

「…久しぶり。」

「おう、やっと来たか。」

「…優、ごめんね…風邪引いちゃってさ。」

そのまた翌日の放課後。

逢沢は姿を現した。

「…もういいよ。」

「…え？」

「全部話せ。何かあんだつたら俺に相談しろよ。下手なウソなんかつくんじやねえ。」

「…何言ってるの…何にもないって。」

「ないわけねえだろ…!!」

「…!!」

「いい加減にしろよ…そんなに俺が信用できないのかよ？」

ダメだ。

冷静になれ。

そう思ってもブレーキが効かない。

溢れだす言葉は止まらない。

「悲劇のヒロイン気取りかよ…お前にとつて俺はその程度だったのか？ふざけんなよ…
そんないらねえ気遣いされて…俺が喜ぶとも思ったのか？」

「ち、違う…違うよ。」

そうだ、違う。

俺はこんなことを言いたいんじゃない。

何を言ってるんだよ。

他に言うことがあるだろ。

「…優は関係ないでしょ？ダメだよ、私なんかのために…」

「はっ、そうかよ…」

関係ない…か。

堪えるな、こりゃ。

「よーくわかったよ。」

「…え？」

「だったらもう勝手にしろよ。」

「…優？」

弱々しい声。

そして、縋るような眼。

「もういいよ。心配した俺がバカだった。」

苛立ちは言葉を加速させていく。

良くない方向へと。

「俺とお前は他人だ。ズカズカと踏み込んで悪かったな。」

言いたいこととは裏腹に突き放すような言葉ばかりを紡いでしまう。

もう…それは止められない。

「勝手にしろよ。どこへなりとも行っちゃまえ。」

「……」

その言葉が引き金だった。

「ごめん、ごめんね…優。」

そう言っただけは走り去って行った。

俺は今まで心の底から怒ったことはない。

そういうふう生きてきたから。

だから、抑制が効かなかった。

感情のコントロールができなかった。

「…言い訳してんじゃねえよ…最低だな…俺は。」

今すぐに追いかけるよ。

追いかけて…

追いかけて…どうする？

今さっき怒りの感情のままに突き放す言動を投げ掛けた俺に…あいつを励ます資格があるのか？

一度出した言葉は引つ込められない。

俺はあいつを傷つけてしまった。

泣いていた…かもしれない。

いや、今も泣いているかもしれない。

どこへ行ったのか、帰ったのか、逢沢の姿はなかった。

違うんだよ…俺はあんなことが言いたかったんじゃないんだ。短い付き合いだけど…それなりに大切だっと思って思えるような存在なんだよ。だから、関係ないって言われた時は…いや、もうやめよう。

これは正当化できるものじゃない。

俺があいつを傷つけた。

ただ、それだけだ。

そして俺は女を傷つけ、泣かせてしまった最低野郎だっということだ。

もう二度と

あいつは学校に姿を現さなくなった。

理由はわかってる。

謝らなければならない。

もう、無理かもしれないけど…取り戻すんだ。

あの時間を。

ただそれだけを思っ学校に通い続けた。

「ねえ、星川君って君？」

「…誰だお前？」

「私、平坂 由姫っていうんだけどさ。」

ああ、こいつが…いかにもお嬢様って雰囲気だな。

世界で一番自分がかわいいって思っそうだ。

「で、俺に何の用だ？」

「ね、ね、逢沢に何したのー？全然学校来なくなっちゃったけど…あたしらが散々やつても耐えてたのにさー…すごいねー。」

それを堂々と言うのかよ。

いい性格してやがるなこの女。

「何の用だつて聞いてんだ。俺を笑いにでも来たのかよ？」

「あはは！そんなんじゃないつてば。」

「だつたら消えろ。こつちはお前になんか用はねえんだよ。」

「はあ？何その態度。あたしに逆らったらどうなるか…」

「別に…どうにでもしろよ。」

「は、何それ。悔しくないの？」

「どうでもいいんだよ…何もかも。」

「つまんな…とんだ腑抜けちゃんだね。」

「そうかもな。」

どうでもいい。

お前らのことも。

俺のことも。

飯にこいつをぶん殴ったところで何も変わらないだろうし。ただ虚しいだけだ。

ただ意味もなく学校へ行き、無意味な日々を過ごす。その繰り返し。

部活にもずいぶん顔を出していない。

先生にも事情を聞かれたが、俺のせい……とだけ伝えた。

「そうか……星川、あまり自分を責めるなよ。」

俺には、そんな言葉をかけてもらう資格もない。

責めるなど言われても無理な話だ。

俺も加害者なんだから。

あの平坂つてやつと何ら変わらない。

いつそのこと責めてくれ。

お前のせいだと糾弾してくれよ。

そうすれば少しは楽になるかもしれないから。

いや、楽になる資格すらないか。

「星川、アンタ逢沢と何かあったの?」

「関係ねえだろ……お前らには。」

「で、でも……最近の星川君……見てられないよ。」

「白鳥、佐々木。お前らももう俺には関わるな。」

「はあ？」

「もうほつといてくれ。」

「そ、そんな…。」

「アンタはそれでいいわけ？」

「ああ。」

一人になりたいたんだ。

頼むから関わらないでくれ。

結局あいつが来ないまま夏休みを迎えた。

何もする気が起きず、ただただ部屋に引き籠っていた。

ギターすら…弾くことが億劫だった。

俺があんなことを言わなければ…まだあの時間は続いていたのかな？

たとえ、その時は辛くとも。

乗り越えることができたのかな？

今となつてはたらればばかりが浮かんでしまう。

いくつものあつたはずの未来。

それを壊したのは他でもない俺だ。

「けど、行かなきゃな。」

今さらだけど。

謝ろう。

あいつに。

最低男の最高に見苦しい謝罪だとしても。

夏休み中の学校。

野球部やらサッカー部、陸上部が部活動に精を出している。

よくやるな、あいつらも。

それらをスルーしつつ音楽室へと向かう。

山田先生はいるだろうか。

「失礼します。」

「ああ、星川。」

いなかっただらどうしようかと思ったが杞憂だったようだ。

「…ちようどよかった。」

何の話だ？

「すみません、部活にも顔を出さずに。」

「ああ…それはいいんだ。」

「あいつは…来ましたか？一度でも…」

「…いや、来ていない。」

「そうですか…あいつの家の連絡先とか知りませんか？一言話がしたくて…」

「星川、それなんだが…」

「？」

「逢沢は転校した。」

「…は？」

転校？

じゃあ…あいつはもう…

「星川…すまない…!!」

なんで…なんで先生が謝るんだよ。

「顔をあげてくださいいよ。先生。」

「何も気づけなかった…教師失格だよ…俺は。」

「もう…全部知ってるんすね。」

「ああ、聞いたよ。彼女の家にも行った。顔は見れなかったが声は聞いた。」

「…何て言っていました？」

「…お前に…会わせる顔がないと言っていた…。」

…バカ野郎。

あいつはどこまでバカなんだよ。

俺への恨み言でも言えよ。

そうすりや少しは気が晴れるだろうが。

苦しんだって叫べば少しは救われるだろ？

なんで…なんでなんだよ…！

どこまでお人好しなんだよお前は。

少しは自分のことも考えろよ…！

「お前にも連絡するべきだった。本当にすまない…屋川。」

「先生に言われたこと、そっくりそのまま返します。自分を責めないでください。責め

「られるべきは俺なんです…言うなれば一番の加害者ですよ…俺は。」

「…お前がそんな人間じゃないってことは俺が知っているさ…だからそう気負うな。お前という逢沢は本当に楽しそうだった。」

そうか。

もう二度と、あの時間は戻っては来ないのか。

謝ることも…言葉をかわすことすらかなわないのか。

「先生も今月いっばいだ。」

「え？」

なんで…まさか…。

「先生が責任を感じることは…」

「もう決めたことだ。」

決意は揺るがない。

そう目が言っていた。

「すまない…私が誘っておいて。」

「いえ、感謝してますよ。あいつに会わせてくれて。」

「星川……」

帰宅した俺は久々にギターを弾いた。

「ごめんな……しばらくほったらかしにして。」

この時だけは忘れられるはずだから。

イヤなこと何もかも全部。

そうだ……いつだってそうだったはずだ。

どんなにイヤなことがあってもギターを弾けば忘れられたんだ。

だから今度も……

「なら……なんなんだよ……これは。」

この虚しさは。

この息苦しさは。

今の俺には……負の感情を吹き飛ばす力すらないのか？

だとしたら、なんて無力だよ。

また今度も乗り越えられると思っていた。

けど、思ったよりもキズは深かったようだ。

当たり前か。

人を傷つけたんだ。

自分も傷ついて然るべきだろう。

未来を奪ったんだ。

なら俺も失うべきだ。

好きなものを。

やめよう…忘れよう。

奏でることを。

もうやめだ

すべてを拒絶して…また一人になった。

これでいいんだ。

そもそも最初から誰とも関わるつもりはなかったんだ。

これで…よかったはずだ。

「星川、どうしたんだ？成績もどんどんあがっていつてるし…これなら上位の高校も視野に入れて狙えるぞ！」

「…受験すから。勉強しないと。」

「優、アンタ本当にどうしたの？」

「母ちゃん…学生の自分は勉強だろ？なんで心配そうな顔してんだよ？」

「だって、ずっと勉強してるじゃない。それに」

「アンタ、ギターは？」

「ああ、もういいんだ。」

「いいつて?..」

「やめた。受験生だしさ…まあとにかく心配すんなって…こうなりや上の高校でも狙いにいくからよ。」

「……………」

なんだよ母ちゃん。

まだ心配なのか?

普段は口酸っぱく勉強しろ言うくせによ。

いざやると心配そうな顔しやがって。

わかっただよ。

自分でもおかしいって。

代償行為っていうんだろ?

こういうの。

何もしたくてしてるわけじゃないんだよ。

どこへ向かっていいかわからないだけなんだ。

空っぽだ。

今の俺は。

「コンコンとドアをノックする音がする。」

「開いてるよ。」

「よっ!」

「…何だ、親父か。」

「ちよ、もうちよつとりアクションしてくれよ。久しぶりなんだから。」

「会えて嬉しいよ。」

「棒読み!」

「そんで? どうしたんだよ。」

「いやあ、久しぶりに息子の顔でも見にな。」

「…母ちゃんから何か言われたのか?」

「まあな。」

「…つたく…余計なことを。」

「母さん、心配してたぞ。人が変わったかのようにだつて。」

「別に、普通だよ。」

「ギターはどうしたんだ? いつも置いてあったはずなんだが…久々に弾いてみせてくれよ。」

「よ。」

「弾かねえ。」

「懐かしいな…思い出すよ。」

「やめたんだ。もう二度と弾くことはないよ。」

「…何かあったのか？」

「別に。受験だから勉強するのはあたり前だろ？」

「無理しなくていいんだぞ？」

「何もなくて…しつこいな。」

「無理にとはいわないさ。何もなかったらそれでいい…ただ、どうしても辛かったら俺や母さんに言ってくれ。」

「…わかったよ。わかったから出てってくれ。」

「優…お前は優しい子だ。きっと今も他人のために悩んでいるんだろ？」

「優しい…ね。女を傷つけるやつが優しいか。」

「初めて知ったぜ。」

「的外れな言動についつい嘸みついてしまう。」

「…そうか。」

「もう、本当に出てってくれよ。」

「何が言いたいんだよ。」

「他人に寄り添える優しい人間になってほしい…そう願ってお前に優って名前をつけた

んだ。」

「だつたらそれは失敗だよ、親父。」

「俺はそんな人間なんかじゃない。」

「お前は…他人のために涙を流せる優しい子だ。そんなふうで育つてくれて俺は嬉しいよ。」

「涙なんか…流してねえよ。」

「お前は優しい子だよ。誰が何と言おうと俺が保証する。」

「…用件はそれだけじゃないんだろ。」

「はは、参つたな。お見通しか。」

「親父が顔見せる時は大抵何かあるからな。」

「東京の営業所の課長がな…戻つてこないかつて。」

「…東京。」

「いつもいつも急ですまないな。」

「いいよ、別に。早くここから消えたいし。」

「…優、俺は信じているからな。優しいだけじゃない…お前は強い子だ。転んでも立ち上がる強さを持っている。」

「そりゃ買い被りすぎだよ親父。」

「信じているぞ…お前がいつの日かまたギターを弾く日が来るのを俺は待っている。」

「親父…」

「いいってことよ！」

「鼻毛出てる。」

「ありがとな…じゃないんだ!？」

「はっ…おかげでちよつとは元氣出たよ。」

「…頑張れよ、お前はまだ若い。」

「親父のほうは今年でよんじゅう…」

「待って!それ以上はやめて!」

まったく、しまらないなこのおっさんは。

「こんなところかな…東京の高校っていったら。」

「ありがとうございます。」

「まあ、星川の学力ならば問題ないだろう。」

「色々あるんですね。」

「まあ、焦らずゆっくりと考えればいいさ。」

「…じゃあ、ここで。」

「え？もう決めたのか？」

「ええ、この羽丘つてとこで。」

「羽丘か…しかし、そこは…」

「何か問題でもあるんですか？」

「いや、問題はないんだが…とにかくもう一度

ゆっくりと考えてみるといい。」

どこでもいいよ、高校なんて。

家から近けりゃいいんだ。

どこ選んだって同じだろ。

そんなもん結局のところ本人次第なんだから。

俺は高校生活になんて何も期待していない。

するだけ無駄だ。

ただ無駄な日々を無意味に過ごす。

それだけでいいんだ。

そうすれば何も傷つかないから。

退屈でいい。

変化なんていらぬ。

安い青春ドラマをやるならば勝手にやってくれ。

「優、早くしなさいよ！入学式から遅刻する気？」

「わかってるって！くそっ…なんでネクタイってこんな面倒なんだよ。」

入学式当日。

新たに始まる日々の中には胸を踊らせる者もいるだろう。

「優の写真、たくさん撮るからね！」

「別にいいよ…撮らなくたって。」

どうせ入学式なんて、校長のくそ長い

何のありがたみもない話を聞いて終わりなんだ。

晴れ舞台でも何でもない。

「…じゃ、行ってくる。」

「いつてらっしやい！」

さて、くだらない冗長なだけの高校生活の始まりだ。

「…ふあ？」

「あ、やっと起きたー！」

「…あれ？宇田川？」

「もう下校時刻だよ。家に帰ってから寝ればいいのに。」

「ああ…」

また、寝てたのか俺。

「いや、戸山。これは準備運動みたいなもんでな…」

「まだ寝る気？」

「まあな。」

「…優君、泣いとるん?」

朝日が心配そうに訊ねてくる。

「え? ああ…別に。」

気づかぬうちに目から雫が出ていた。

「悪い夢でも見た?」

宇田川も心配そうに聞いてくる。

「そんな気もするけど…忘れちゃった。」

悪い夢…か。

「…帰ろうぜ。明日はライブだろ?」

「うん! あこ、頑張る!」

「朝日も頑張れな。」

「うん!」

過去は変えられない。

だからといって今あるものまで蔑ろにするわけにはいかないんだ。

こんな風に俺なんかを気にかけてくれる連中にも出会えた。何もないわけじゃな

かったんだ。

失ったものもある。

けれど得たものも確かにある。

「救われてるんだな…俺。」

「え？何か言った？」

「…なんも言ってるよ。」

逢沢、お前は今どうしてる？

人間って案外独りにはなれないもんだぜ？

願わくば、俺のことなんかは忘れて新しい仲間と楽しくやっていてくれ。

俺も進むことにするよ。

過去を忘れることはしない。

けど、それに縛られるのはもうやめだ。

ライブハウスデビュー

「よし、こんなもんかな。」

万が一……いや、かなりの確率で知り合いに

会うだろうから軽く変装していかねばならない。

帽子と眼鏡（親父の）にマスクなんかしてたら

さすがにバレないだろ。

あとは不審人物に間違われないよう祈るしかない。

「もう行くの？」

「ああ、早めに行っておかないとな。」

「まさか、優がライブに行くなんてねえ……」

「あーちゃんが出るんだ……それに個人的に興味もあるしな。」

「そうかい。」

「何か言いたそうだな、母ちゃん。」

「最近の優は楽しそうだな……って思っただけ。」

「そう見えるか？」

「うん：一年ぐらい前のアンタは見てられなかったからね…」

「いつの話してんだよ。」

「でも、良かった。優がそんな顔をするようになってき。」

「まあ、最近はそれなりに楽しい…かな。」

日常はなんやかんやで俺を音楽へと引き寄せろ。

今日という日は踏ん切りをつけるのには良い日なのかもしれない。

「それじゃ、行ってくるよ。」

「気をつけてね。」

「やっべー…緊張する。」

ライブハウスGALAXY。

その建物の前で俺は立ちつくしていた。

中に入ってチケットを買うんだよな？

なにぶん初めてだからわからないことだらけである。

もう少し事前に調べるべきだったな。

「当日券、一枚でお願いします。」

「はい！一枚ですね、1200円です。」

中に入り、チケットを買う。

とりあえず第一関門はクリア。

開場まで時間があるので少しばかりライブハウス内を散策することにした。

「これって……」

色々と飾られている写真の中にP o p p i n , P a r t yという文字を見つけた。

「へえ……前に一回ここでライブしてたんだな。」

写真には二ヶ月ほど前に行ったであろうライブの様子が写し出されていた。

「なんか、みんな楽しそうだな。」

「ですよね！」

「うおっ!?!」

不意打ちはやめろよな。

一体誰だよ。

「つて朝日……」

しまった。

「えっ?」

くそ、やはりいたか。

だが俺が誰かまでは気づいていないようだ。

「あ、いや……今日は朝日が綺麗でしたねって……ハハハ……」

「え、えつと……」

なんか気の利いたリアクションせえや。

俺がスベったみたいだろうが。

「楽しみすぎて早く来すぎちゃいましたよ。」

「私も今から凄く楽しみです!」

お前はスタツフだろうに。

仕事そつちのけにするなよ?

さてと、ボロを出す前にテキトーに話合わせて

退散するでしょう。

「スタツフさんは何か楽器とかやったりするんですか?」

「は、はい……ギターを一応……」

何が一応だ。

ストランドバーグなんてモンを引つ提げて、とんでもねー演奏するモンスターだろうがお前は。

「そうなんですか…バンドとかは組んだりしないんですか？」

「組みたいとは…思ってるんですけど、なかなか集まらなくて…」

合わせられる奴がないんだよ。

とんでもなさすぎて。

外部に目を向ければ可能性もあるだろうが…都合よくギターが空いている高いレベルのバンドが

はたしてあるかどうか。

「頑張ってくださいね。応援しますよ。」

「はい！楽しんでいってくださいね。」

いつまでも燻ってんなよ？

あの日のお前のギターは無駄なんかじゃ

なかったんだ。

確かに俺の心を動かしたんだ。

だからもう一度聴かせてくれよ。
お前の演奏を。

「ポピパピポパーティーによろこそー！」

「Poppin, Partyですー！」

すげえ…ポピパピポパーティーを嘯まずに

言つてのけた…さすがは主催バンドの人な

だけはあるな。

ていうかあれ…変形ギターじゃね？

すげえの使つてんな…ビジュアルもバツチリつか。

しかし、ボディが赤色とはわかってるじゃないか。

「あれが、ポピパさんとやらね。」

ギターボーカルにリードギター、ベースにドラム…そんでキーボードか。

思つたよりも普通のバンドだな。

「聴いてください…Returns。」

ちよ、待つて…もう始まんの？

まだ心の準備ができていないんですが。

開幕はリードギターのギターソロから始まり

ボーカルが歌い始める。

なんつーか、静かな立ち上がりだな。

会場全体もシーンとしている。

もつとこう、盛り上がるもんかと思っていたが。

続いて聴こえてくるのはキーボードの旋律。

うん…久しぶりに聴いたがいつ聴いても綺麗だな先輩の音は。ピアノの発表会以来

だったっけか。

ドラムの音加わり演奏は激しさを増す…が

どちらかというとき哀しい曲調なのは拭えない。

観客の中には涙を流している人さえいる。

一発目から泣かせにくるとは…

しかし、そんな観客とは裏腹にバンドの人達は楽しそうに演奏していた。

Returns…たぶん、原点にたち帰るとかそんな感じの意味なのだろう。それは

俺が忘れていたものでもあった。

ステージが暗転し、曲の終わりを告げる。
良い曲だった。

観客は一様に感動し、涙を流している人もいたがこれはこれで良かったのだろう。
けど、まだまだこんなじゃ足りない。

もつと聴かせてくれ、ポピパさんよ。

あと100曲くらいはやってくれ。

怒涛のゲストバンド達

「ハローハッピーワールド！」

あれ？

「みんなー！ハローー！」

「あの人って…」

俺にこのライブのチラシを渡してくれた

金髪美少女じゃないか？

なるほど、バンドの人だったんだな。

「とびっきりの笑顔で——」

笑顔か…

それがこのバンドのコンセプトなんだろうか？

ちなみに俺が笑顔を見せると決まって赤ちゃん泣き出すんだが…なんでだろう。

あと、何か着ぐるみ(?)のピンクのクマさんみたいなのおるんだけど…あれってデ

フォオなのか？

「えがお・シング・あ・ソング！」

そうして始まった2曲目。

先ほどのポピパさんとは対称的な軽快で
アップテンポな曲調だ。

あのピンクのクマさんDJだったのかよ。

一人だけ存在感がブツちぎってんな。

ボーカルの人が宙吊りになって浮いたり、バク転したりとかなりアクションの激しい
バンドだった。

「色々あるんだな、バンドにも。」

改めてそう思った。

さて、お次は…

「Pastel*Palettesです！」

出たな、通称。パスパレ。

というかよくよく考えてみるとアイドルまで呼んでしまうなんて凄いな…ポピパさん
んって一体何者なんだ？人脈すごすぎるだろ。

「きゅ〜まい*flower！」

ボーカルの人って…文化祭の時にテンパってグダグダな進行してた人だよな…確か

彩ちゃんとか呼ばれてたっけ。

それから白鷺 千聖さんに、日菜先輩…ドラムの人は大和 麻弥さんだったっけか。何度か学園で見かけたことはある。あとの一人は見たことのない人だが…アイドルというより何だかモデルさんみたいだ。

「それにしても、キレッキレやないか動き…」

ごめんなさい彩ちゃんさん。

正直ちよつとバカにしてみました。

勝手に残念系美少女のカテゴリに入れようとしてました。

動きを見たらわかる。

たくさん練習したであろうということ振り付けが物語っていた。

他の四人もそれに遅れることなくついていっている。

アイドルだからバンドは二の次…あくまでもプロモーションの手段にすぎないなんてことはないんだな。

みんな、全力なんだ。

日菜先輩が以前、アイドル活動が面白いって言ったのがちよつとはわかった気がする。

「Aftergrowです！」

相変わらずかっけえ名前だわ。

幼馴染同士で組んだバンドらしいが。

尊いよな…幼馴染って存在は。

大事にしなきゃいけないよな。

わかるわかる。

演奏するのは新曲だそうだ。

思ってたけど、どのバンドも皆フルスロットルすぎやしないか？体力持つのかよ…持
つんだろうな。

演奏のほうは全員息ピッタリだ。

幼馴染なのだから当然だと言葉にするのはカンタンだがそれで実現できるのなら世
の中苦労はしない。

ギターもベースもドラムもキーボードもすべてが高い次元でまとまっている。

本当にすげえよ…。

「良いね！GALAXY！」

美竹先輩…楽しそうだな。

いつも仏頂面なイメージじゃなかったけど、あんな楽しそうな顔もするんだな。

ちよつと意外。

「次はRoselia。」

そうだった。

まだこの人達が控えていたんだった。

「Roseliaです…Poppin' Partyを祝してこの曲を…」

湊さん…この人は相変わらず表情が変わらない。

美人さんなのに、勿体ない。

「FIRE BIRD！」

などといらぬことを考えているうちに演奏が始まる。

FIRE BIRD…火の鳥。

不死鳥…フェニックスってことか？

何はともあれ相変わらずのハイクオリティだ。

地の底から音が響いてくるかのような錯覚すら覚える。疾走感がパネエ。

もうホントにプロと遜色ないと思うよあなたたち。

ポピパさん…自分たちが喰われかねないってリスクもある中でよくこの人達を呼んだものだ。

結果、どのバンドも甲乙つけがたいほどに素晴らしかった。こんなんだったら俺、毎回ライブ来るけどな。

大ガールズバンド時代。

誰が言い出したかは知らないが、それもあながち間違いではないんだと改めて認識させられた。

次もその次も何度だって

「えー、次の曲で最後です！」

「マジかよ。」

もう最後か…本当にあつという間のライブだった。周りからもちらほらと終了を惜しむ声が

あがる。

ハローハッピーワールドにパスパレ、AftergrowにRoselia…それぞれに個性があり、それを存分に

生かききっていた。

けど最後はやはりポピパさんに締めていただかないとな。

「やれて良かったなって思います！」

そりゃ良かった。

彼女達がどのような経緯でこの主催ライブを企画したのかはわからないが…そう思えたのならそれはもう成功したも同じだと思う。

「みんなとポピパで良かった！」

そんな中、ギターボーカルの人だろうか。

もの凄くこつ恥ずかしいセリフを言いよった…。

市ヶ谷先輩顔真つ赤だけど…どうやらプチサプライズだったようだ。

あんなセリフを面と向かって言われりやあな…

思っけてもそうそう口には出せないぞ。

けど、良かったね…先輩。

それは愛されている証拠だよ。

そのセリフが聞けただけでも今日ライブに来た

甲斐があつたというものだ。

次の曲はそのギターボーカルの人が作曲した曲らしい。

ポピパさんのすべてが入ってる曲…だそうだ。

「Dreamers Go！」

軽快な音楽をバックに曲が始まる。

声だけではなく身振り、手振り、足踏みと

身体全体を使つての演奏だった。

気づいたら、俺自身もリズムに乗っていた。

…なんだか恥ずかしいな。

でも、音楽って凄いやな。

魔力みたいなものがあるっていうか…気づいたら乗せられちゃってるんだもん。

「イキイキしてんなあ…みんな。」

終わってほしくない。

ずっと観ていたい。

願わくば、終わらないでくれ。

きつと喪失感がエグいことになる。

そんな願いも虚しく曲は終わりを迎える。

ああ…終わってしまった。

「ありがとう…ごさいましたー！」

寂しいけど、しょうがないか。

「アンコール！」「アンコール！」

数人の客がアンコールを口にする。

すかさずそれは周囲へと伝播した。

アンコール…まだそれがあったか！

つてことはもう一曲聴けるってことか！

「それじゃあ、もう一曲——」

ポピパさんもそれに応える。

さすが、わかつてらっしゃる。

「——キズナミュージック！」

ポピパさん、本当にありがとう。

市ヶ谷先輩の：あーちゃんの居場所になってくれて。あなた達には感謝してもしきれませんよ。

「敵わないな……こりゃ。」

改めて、そう思った。

だって、先輩のあんな楽しそうな顔……

初めて見るもん。

俺もすっかり彼女達の虜になってしまった。

朝日：お前がポピパさんを好きな理由、ちよつとだけどわかつた気がするよ。

何かこう、勇気を貰えるよな。

最後の曲。キズナミュージックだったか。

曲名の通りの全員の絆が感じられる：そんな曲だった。

また機会があればライブをやってほしい。

次もその次も何度だって——行きますよ。

あなた達のライブに。

「Poppin, Partyでした！ありがとうございます！」

案の定とてつもない喪失感に襲われる。

でも、来て良かった。

そう思えるライブだった。

「優君？」

あれ、何でバレた？

…そうだった、暑苦しくてマスクと帽子はずしたんだった。

「つて、レイさん？」

まさかこんなところで会うとは。

「ライブ、観に来てたんだ？」

「ええ、レイさんも？」

「…うん。」

そういや、ポピパさんの中に幼馴染がいるって

話だったっけ。

「何だ、レイの知り合いか？」

「うん。」

「え？」

ええつと…誰だこの人？

金髪だしスカジャンだし目つきも怖いし…完全に見た目がアレな人なんですけど。
「佐藤　ますき…コイツと同じバンドのドラマーやってんだ。」

なるほど、同じバンドの人か。

ドラマーなのかよこの人。

「星川　優です。」

「優っていうのか。よろしくな。」

「は、はあ…」

できればよろしくしたくはない。

「よ、良かったですね…ライブ。」

「うん…花ちゃん、とても楽しそうだった。」

「ハナちゃん？」

「リードギターの花園たえってやつ。ウチらの

バンドのサポートやってたんだ。」

「ああ…やってたってことは…」

「…うん。」

「…良かったんですか？そうそういいいですよ…」

あんな腕の良い人は。」

「うん、いいんだ…一緒に弾けただけでも十分。」

大人だなあ…この人は。

「お前、わかるのか？」

「一応、ギターを弾いてたクチなんです。」

「へえ…そうなのか。」

「ええ、過去形ですけどね。」

「何だよ、やめちまったのか？」

「まあ、色々とありました。」

「そつか…一緒にやれたらって思ったんだけどな。」

「でも…今はすげえ弾きたくてしようがないんです。」

「そりゃ、ライブの熱にあてられたんだろ。」

熱か…そうだな。きつとそうだ。

それにしてもいつ以来だろう…こんな気持ちは。

とてつもなく晴れやかな気分だ。

「今度機会があつたら、一緒にやろうぜ。大抵ここでドラム叩いてるからさ。いつでも来いよ。」

「…考えときます。」

誰かとやるなんて考えたこともなかった。

だけどそれも悪くはないのかな。

「いつか、私達のライブも来いよ。すっげー音

聴かせてやるからさー！」

「楽しみにしておきますよ。」

レイさん達と別れ帰ろうかという矢先、朝日の姿を見かけた。せつかくだし、声でもかけてくか。

「お疲れ…つてうおい！」

めっちゃボロ泣きしてんだけどこいつ。

お前、スタツフだよな？

「優ぐん…」

「ああ、なんだ、感動しちゃったのか？確かに良いライブだったよな。」

「うん…ポビバさん…良いライブやっだ〜…」

「あーだから泣くなって…な？」

ボビバざんってなんだよ。

「ほら、ハンカチ使えよ。」

「あ、ありがとう…」

「つたく、スタツフだろ？仕事残ってるんだろ？気持ちはわかるけどさ…」

「うん…でも、でも…ボビバざくん！」

え、何？無限ループ？

ていうか、色んな人に見られてるんだけど…何か俺が泣かせてるって誤解されてそう
で怖いわ。

違うからね？フォローしてる側だからね？

「もう、いい加減泣き止めな？何か俺が泣かせてるみたいじゃん。」

「二人とも…何してるの？」

「あ、いや！違うんですこれは…って、何だ…戸山か…びっくりした。」

「六花…大丈夫？」

「うん…」

「ほら、機材の片付けやらなんちゃらあるんだろ？行ったほうがいいんじゃない？」

「うん、これ…ハンカチ」

「いや…お前の涙と鼻水まみれじゃねーか！そんな趣味はねーよ…いいよ、やるよそれ。」

「あ、ありがとう。それじゃ！二人ともまたね！」

「ああ、またな。」

いつかはお前もだぞ。

今度はスタッフとしてじゃなくてさ…バンドの

メンバーとしてステージに立てよ。

その時は行くからさ。

あまり待たせるなよ？

「…優ってなんだかんだで六花の心配してるよね？」

「え、そうか？」

「うん。」

「なんかさ、ほっとけないんだよ…あいつ。」

せつかくあんなすげえ演奏できんの…バンド組めないなんて勿体ないじゃん。」

「メンバー…集まるといいね。」

「だな。」

「優は？ギターやってたんでしょ？バンド組みたいとは思わないの？」

おいおい、誰だよバラしたやつ。

まあ、いずれはバレただろうけど。

早いか遅いかなだけの話か。

「俺は…いいかな。周りと合わせるとか無理だと思うし。」

ソロでやるほうが性にあつてるとは思う。

「でもさ、良いライブだったよな。」

「うん…そうだね。」

「またやらねーかなあ…ライブ。」

「そのうちまたやると思うよ。お姉ちゃん…また突然ライブやりたいとか言い出しそうだし。」

「そうか…そのうちか。」

バイト、探さないとな。

俺の小遣いじゃ明らかに足りないし。

そのためには勉強も頑張らないと。

さすがに母ちゃんも許してはくれないだろうし。

…ていうかイヤなこと思い出した。

もうすぐ期末試験あるんだった。

まずはそれを乗りきらないとな。

「戸山。今度勉強教えてくれ。」

「どうしたの？急に。」

「いや、何か俺も頑張ろうかなーって思ってたさ。」

立ち止まるのはもうやめたからな。

…ん？

ちよつと待って。

「…お姉ちゃん？」

今お姉ちゃんって言わなかった？

戸山に姉ちゃんいるのは知ってるけどさ…まさか…

「お姉ちゃんって…もしかして、ポピパさんの人？」

「そうだよ。あれ？言ってなかったっけ？」

「…初耳つすよ、戸山さん。」

…そうだったのかよ。

そういうことは早く言えい。

「あーっと…あの香澄さんって人？ギターボーカルの。」

「うん。」

言われてみりや、ちよつと似てるかもしれない。

性格はなんか正反対っぽいけど。

「そっか…感謝しねーとな。」

「え？」

「いや、なんでもね。」

いつかはお礼を言わないとな。

市ヶ谷先輩のこともだけど。

俺自身の背中も押してくれた彼女達に。

これで漸く、最後の一步が踏み出せる。

「おかえり。」

「ただいま…ああ、母ちゃん。」

「何？」

「ちよつとうるさくなるかもだけどさ…今日だけは見逃してくんね？」

「…わかったよ。あんまり遅くまでやるんじゃないよ。」

「わかつてる。」

思えばずいぶんと長い間回り道をしていた気がする。

「ごめんな…。」

身勝手な理由でお前を遠ざけて。

これで許してくれとは言わないけれど…

「久しぶりに思う存分暴れさせてやるよ。」

小さな変革者

主催ライブから数週間。

念願の夏休み。俺は変わらぬ日々を過ごしていた。

いや、変わったことが一つだけある…。

日々を構成するルーティンの中にギターを弾くことが加わったことだ。

しかし、ブランク明けなこともあつてなかなか勘は戻らない。

こればかりは少しずつやっていくしかないか。

「けど、どうせやるならアンプに繋いで解放感のあるところでやりたいよなー。」

ググってみるか。

近くになんかスタジオでもあればそこで…っていつでも金欠だしなー。

タダで弾き放題なんて場所なんかあるわけないし…やっぱりバイト探すつきやねーよな。

と、外に出てきてみたはいいものの…

バイトなんてしたことないし。

接客業はまあ…無理だな。

どうしたもんか…

このジャンルがつぶれた時点でほぼ詰みくさいんだが、
ていうか、そもそも選んでる場合じゃないか。

バイト求人誌とか募集中の張り紙してるところとか見て、
受けるしかないだろう。

「星川 優さん…ですな？」

「ん？」

一瞬、知り合いかと思ったが…誰だこいつ？

ネコ耳を模した黒いヘッドフォンをした…

小学生の女の子…いや、制服着てるから中学生か？

「でも、小学生にしか見えねーな…」

「失礼ね！小学生じゃないわよ！」

「あ、ごめん…地の文が口に出てたわ。」

で、何か用？と質問すると急に改まった感じになり、
コホンと一つ咳払いをした。

「…失礼しました。わたくし私、こういうものです。」

そう言い、何かを手渡してきた。

名刺か何かだろうか。

見ると名刺のようだった。

綴りが英語と数字だけだったので読みづらいことこの上ない。

「PRO...DUCER...?」

プロデューサーか?

...このちびっ子が?

名前はCHU...? 読み方がわからん。

「その顔は...信じていませんね?」

「え、いや、そういうわけじゃねーけど...これ、何て読むの?」

「チュチュ...私のプロデューサーネームです。」

「そのプロデューサーさんが俺なんかは何のご用で?」

「レイヤ...和奏 レイはご存知ですね?」

「ああ、知ってるけど。」

「彼女からあなたのことをお伺いしたものですから...個人的に興味が湧いてこうしてあなたに会いに来たというわけです。」

「てことは、お嬢ちゃんはレイさんが所属してるバンドのプロデューサーってことか。」

「YES!」

何で急に英語？

でも、ウソをついてるようには見えないな。

本当にプロデューサーなのか。

このちびっ子が。

「RAISE A SUILEN 通称RASと呼ばれています。」

「RAS…まさか、俺をスカウトしに来たとかじゃないよな？」

「ええ、話が早くて助かるわ。」

そうなんかい…急展開すぎるだろ。

スカウト？マジで言ってるのか？

「いやいや、ちよつと待て。俺にそんな腕はねーよ。」

「もちろんタダでは言いません。あなたの

ギター力が私の求めるモノに届かなければこの話はなかったことになります。」

ギターぢから？何を言ってるんだ？

勝手に話を進めるし…プロデューサーか何か知らんが付き合ってられんな。

「ま、待って！」

「悪いけどさ、スカウトなら他をあたってくれよ。だいたいお嬢ちゃんのバンドってガールズバンドだろ？男の俺が出る幕なんかないやんか。」

「そんなの関係ない！」

その叫びに思わず足をとめる。

なんなんだ？その必死さはどこから来る？

お前もなのか？

俺が見てきたガールズバンドの人達と同じ…本気の眼だ。

「ひとまず聴いて！」

「これは…？」

「聴けばわかる！」

有無を言わせぬという感じだった。

渡されたのは音楽プレーヤーか？

…とりあえず聴けと？

「はあ…わかったよ。」

イヤホンを差して眼を閉じる。

聴けばわかる…その言葉の意味はすぐにわかった。

「…おいおい。」

なんだよ、こりゃ。

言葉では説明できない。

すごいとかヤバイとか…そんなお粗末な感想はとてもしゃないが抱けない。それは失礼な気がしたから。

唯一つ言えるのは…聴く者…観る者を魅了する

圧倒的なサウンドパワー…それがこの曲にはある。

あの合同文化祭以来の衝撃を受けた。

最後まで聴くまでもない。

「…どうでした？」

「…この曲、お前が作曲したのか？」

「Of Course!」

わからないもんだな…世の中つてのは。

普段は気弱な地味なメガネっ子が…

ステージに立つと豹変してすげえギタープレイを魅せたりするし…。

かたや、どう見ても小学生にしか見えないこんなちびっ子が、こんなとんでもない曲を作曲したりもする。

「…曲名はR I O T。暴動、騒動、騒乱などの意味があります。」

「暴動…ね。」

「私は、私のバンドが奏でる音で大ガールズバンド時代と呼ばれるこの時代を終わらせ

るー」

「いや、終わらせちゃダメだろ。」

でも本気だ。

本気で言ってるんだ…こいつは。

少しばかり興味が湧いた。

聴くだけでこれだからな。

実物は一体どんなものなのか。

「ガールズバンド時代にお前の奏でる音楽で

暴動でも起こそうっていうのか？」

「そうよーそのためにはピースが一つ足りないの。」

「ギター…か。」

考えもしなかった。

俺がバンドで演奏するなんてことは。

「あなた自身の気持ちをまだ聞いていませんでしたね？あなたは一体どうしたいの？」

俺自身の気持ち？どうしたいか？

そりゃ、決まってんだろ。

俺だってギタリストだぜ？

こんな曲聴かされて何も感じないわけないだろうが。

「…でも、ブランクあるぞ?」

「ブランク? そんなものどうにでもなるじゃない。」

「言うじゃねえの…ちびっ子。」

「チュチュ…もし、あなたにその気があるのならこれからは私のことをそう呼びなさい。」

どうやら、のんびりはさせてくれないみたいだな。

止まっていた時は動き出したかと思えばものすごい速度で加速していく。

「ほのぼのの日常パートも悪くはねーけど…こっちはこっちで面白そうだな。」

「何の話よ?」

「いや、何でもねえ…俺も乗らせてくれよ…その

暴動つてヤツにさ。」

「…決まりね!」

「ああ、よろしくな…チュチュ。」

俺の奏でる音を

「(ハハ)…だよなう？」

眼前に広がるは超高層ビル。

見慣れぬ建物に俺は圧倒されていた。

あのガキんちよ、こんなところに住んでるのか。

「お、お邪魔しまーす…」

おいおい、高級ホテルって言われても

信じるレベルだぞこれは…想像以上にぶっ飛んだヤツだな…あのチュチュっての。

「お待ちしておりました！」

おっと、誰か迎えに来てくれたのか。

振り返れば、髪の毛を見事なパステルカラーに

染め上げたツインテールの女の子がいた。

可愛いってのを体現したかのような子だ。

上から下までコーデイナートがパねえ。

「星川 優様ですね？」

「そ、そうです。」

「申し遅れました！私わたくし、チュチュ様のキーボードメイド、パレオと申します♪」

「パレオちゃんね、よろしく。」

「よろしくお願ひします♪」

うん…名前に関してはつつこまないよ？

彼女に案内され、エレベーターへと乗り込む。

「えーと、パレオちゃんだったよね？」

「はい♪」

「すつげえとここに住んでんのな、あのチュチュって子。親が何かやってたりするのかな？」

「はい♪チュチュ様のご両親は音楽関係のお仕事をされていて今は海外の方にいらっしやるんです！チュチュ様が高校生になられてからはお一人でお住まいなんですよ♪」

「はえー…なるほどねえ。ていうか高校生って…俺とタメだったんか。」

あれで、高校生なんか。

もしかしたら2、3年生とか？

「正確には、飛び級されているので13歳です。パレオと同年なんですよ！」

ああ、だよね。

飛び級って本当にあるんだな。

「…え？…ちゆ、ちゆうがくせい!？」

チュチュ様と同じ年って…この子も!？」

ていうか、スルーしてたけどチュチュ様って何なん？そーゆー主従関係？

あとさ、パレオって水着の名前だよな？

俺は好きだけどさ…ってそうじゃねえわ。

「はい…中学二年生です♪」

「中学二年生!？」

この子が宇田川よりも年下なの!？」

マジかよ！信じらんねえ！

「着きました♪」

色々と処理しきれぬまま最上階へと着いた。

「おお…プールサイドまであるよ。」

何でもアリだな、ホントに。

もう、何が出てきても驚きそうにないわ。

「来たわね！」

「どうも。」

中へ入るとチュチュが偉そうに椅子にふんぞり返っていた。どうでもいいけど、サイズ合ってなくない？

「パレオ！」

「はい！チュチュ様！」

そう返事したパレオちゃんが取り出したのはビーフジャーキーだった。それをグラスへとぶち込む。

ジャーキーって…身体に悪いぞー。

そんなんばつか食ってたら。

「welcome！ユウ・ホシカワ！私のレコーディングスタジオへ！」

いや、確かにすごいわ。

ここで練習できたら、そりゃ最高だろうな。

「改めまして、プロデューサーのチュチュです。あちらがマスキング。」

「おう、よろしくな。」

この人は確か、ますきさんだっけ。
てか、キングで。

「あ、あの一……」

ますきさん？

顔、近いんですけど……距離感間違ってますん？

ドキドキよりヒヤヒヤするんですけど。

「ますき、優君困ってるじゃない。」

どうしようかと思っていたら、レイさんが助け船を出してくれた。

「ご存知でしょうか……ベースボーカルのレイヤよ。」

「優君久しぶり……でもないか。」

「そつすね。」

「そつちがパレオ。」

手を振る。パレオちゃん。

うん、かわいいな。

彼女もメンバーの一人だったのか。

キーボードメイドって言ってたから、キーボード担当なんだな。

なるほどね。

この中に割って入れるかどうかはコイツの言う

ギター力つてヤツを見せつけなきゃならないわけか。

はっ…おもしれーじゃん。

「お眼鏡にかなわなきや、このままとんぼ返りつてこともあり得るわけね。」

「そうなるわね。」

「そりゃ困るな。星川 優先生の次回作にご期待ください！つてか？冗談じゃねえ。」

「？」

「でも、いいじゃん…燃えるねそういうの。」

「ギターならたくさんあるから、好きなのを使っていいわよ。」

「いや…こいつでいい。」

こいつが一番しっくり来る。

長年の俺の相棒。

「なら、いいけど。じゃ、レコーディングブースに入つて。」

「ああ。」

耳の穴かっぽじつてよーく

聴いとけよガキんちよ。

俺の奏でる音をよ。

「READY?」

「おう、いつでもいいぞ。」

さあ、暴れようか。

表舞台へ

「……………」

さあ、どうだ!?

「全身全霊…今俺ができる最高の演奏をしたつもりだ。これでダメだったら…もうしようがないな。」

「どうだった?俺の演奏は。」

「……………」

あ、あれ?

ちよつと?無言が一番怖いんですけど。

チュチュ様?

何か言ってます?

「…クは?」

「ん?」

「…ブランクがあるって言ってたわよね?どのくらい?」

「んー、一年くらい…かな。」

「一年!? それほどの演奏力ちからを持ちながら…どうして一年も!?

「え、いや受験とか…その…色々とあつてですね…」

「なんか、ご立腹? 何でだ?

「てか、それほどの演奏力つて…」

「えーつと…?」

「…合格よ。」

…合格。

「ユウ・ホシカワ。貴方のRAS入りを許可するわ!」

マジ? 合格!?

「はあ…合格か…良かった。」

「ブランドクを感じさせないSweetな演奏だったわ!」

Sweet? とりあえず、褒めてくれてるってことで解釈していいのかな?

「お前…なかなかやるな。」

「マスキングこととますきさんからも褒めの言葉がかかる。」

「すごいです! マッスーさんが褒めるだなんて

花さん以来ですよ？」

どうもね、パレオちゃん。

…でもまだまだなんだ。

改良の余地はまだある。

これで満足なんかしちやいられない。

…そうだろう？ チュチュ様よ。

「やっぱりすごい。昔のまま…ううん、昔以上に力強い演奏だったよ。」

「いやあ、まだまだですよ…レイさん。」

「ユウ…今日から貴方はRASのユウよ！」

「まんまやんか。」

「Shut up！」

「RAISE A SILENの意味は御み簾すを上げろ…Japaneseでいうところの簾すだれね…」

簾すだれって…あれか？

なんか、部屋の入り口とかにあるぶら下がってる暖簾すだれみたいなやつ。

「それを掲げることが表舞台に立ち続けるって

意志の表明になる！」

「表…舞台。」

「YES！」

…表舞台か。

馴染みのない言葉だが…なんかいいね。

チュチュ…お前にホイホイついてきて正解だったぜ。

面白いモノが見れそう。

こいつは本気で大ガールズバンド時代を終わらせる気なんだ。動機はともかくとして、その熱量はおよそ中二のガキんちよが抱くモノにしちやデカすぎる気もするが…チュチュにはチュチュなりの信念があるのだろう。

「これで俺が女子だったらねえ…」

何も文句はないんだけど。

「まだ、そんなことを気にしているの？ 貴方の前にも何人ものギタリストガールズ達をスカウトしたけれど…誰も私の求める音を出せる子はいなかった…タエ・ハナゾノと貴方ぐらいよ。性別なんて些細な問題なの。私の求める音が出せるかどうか…それが重要ななのよ。」

「そうか…」

ちびっ子とかガキンちよとかバカにしてたけど…こいつも色々と考えてんだな。

「数ヶ月後にはライブを計画しているから、それまでには完璧パーフェクトに仕上げなさい！」

「え、ライブ!?!」

「当たり前じゃない!ユウ…貴方も立つのよ!

表舞台へ!そして、最強さいきょうキョウの音楽を魅せつけてやるのよ!」

「…最強。」

わりと安っぽい言葉もこいつが言うと言説得力がある。

「YES!最強!ガールズバンド時代は終わりを

告げ…ニューワールド新たな世界が始まるのよ!」

新たな世界ね。

是非とも見てみたいもんだな。

それにしても、トントン拍子に話が進みすぎて

実感がまるで湧かねえ。けれど、やるからには…

こいつのいう最強の音楽を奏でてやるよ。

そうだよな…男だとか、女だとか関係ないよな。

時には俺のような異端児も必要だろう。

小さいことを気にしすぎていたようだ。

「チュチュ。」

「何かしら？」

「ますきさん…パレオちゃん…レイさん。」

「？」

「よろしくお願いします。」

血が騒ぐってこういうことか。

今、ようやくわかったよ。

ラーメン銀河にて

「らっしやい！おう、お嬢。久しぶりだね！」

「大将、久しぶり。」

「こ、こんばんは。」

練習帰りに俺はますきさんに誘われ、ラーメン屋のラーメン銀河へと来ていた。やり取りから察するに常連さんなのかな？

お嬢つてのは？

「お嬢の連れかい？」

「まあ、そんなようなもんです。」

「大将、こいつギタリストなんだ。今同じバンドでやってんだよ。」

つい最近まで廃業してましたけどね。

「へえ、そうなのかい。」

「優。お前バイト探してるって言ってたよな？」

「はい。」

「大将、こいつここで雇ってやってよ。」

「えっ!？」

「いいよ。」

「ええっ!？」

待て待て待て。

そんなあつさりと!？」

秒で決まったんだけど…いいのか？

色々過程すつ飛ばしてっけど。

履歴書とか面接とか。

「お嬢が連れてきた子だ。丁度人手も欲しかったところだし。」

…いいのか。

ただラーメン食いにきただけのはずが…バイトする流れになっちゃったよ。

「あの、履歴書とかないんですけど…」

「今度で大丈夫だよ。名前は？」

「星川 優です。」

「優君、お嬢とバンドやるの大変じゃないかい？」

「え？ いや、そんなことは…」

なくはないな。

この人隙あらばガンガン音を振じ込んでくるんだもん。ギターリスト泣かせてやっだよ。

今まで何人泣かされてきたことやら。

「お前が良い音出すからつい引つ張られてノツてきちまうんだよ。」

そうなるそこちかも負けじと…ってなっちやうわけで。

「最終的には揃ってチュチュに怒られちまうんですよね。」

「でも、やつぱりギターがいると違うな。花の

やつが抜けてからはずっと打ち込みだったからさ。」

そう言ってくれるのはありがたいですけども。

「昔は狂犬…なんて言われてたのにねえ…」

大將が感慨深げに呟く。

「狂犬って…ピツタリじゃ…あ、いや失礼なことを言う輩がいるもんっすね。」

「そんなウデで何で今までバンド組まなかったんだよ?」

「バンドってのに興味がなかったもんで。」

というか純粹に友達がいなかっただけなんだけど。

「私はさ、ずっと待ってたんだ。一緒にやれるやつ。全力を出してもついてきてくれる

やつらをさ。」

それが今のRASってわけだ。

「恥ずかしながら、つい最近までガールズバンドってのがこんな本格的なものだとは思ってなかったんですよ。」

最初はバカにさえしていた。

女子が演奏なんかできんのか？って。

でも違ってたんだ。

「ましてや、自分よりもすげえギタリストがいるだなんてのも思っていなかったし。」

まあ、それは自惚れってやつだったけど。

「お前よりもすげえギタリスト？」

「ええ…衝撃を受けたつつーか…ソイツは俺の中にある常識をブツ壊すには十分なくらいとんでもない演奏をしやがったんですよ…。」

「…そんなやつがいんのか。」

まだメンバー集めてんのかな。

あいつの演奏こそ陽の目をみるべきなんだ。

このまま終わるだなんて勿体なさすぎる。

「ラーメンお待ち！」

おっ美味そうだ。

インスタントじゃないラーメンなんて久しぶりだな。

「食うか。」

「そうっすね。いただきます。」

しかし、人生何が起こるかはわからないな。

何も期待していなかった高校生活。

この数ヶ月の間に色々なことがあったものだ。

数ヶ月前の俺に言っても信じちやくれないだろうな。

「この大将もさ、ギターリストだったんだよ。」

「え、そうなんですか?」

「デスギヤラクシーってバンド。ウチの親父も

ドラマーでさ、大将と一緒にバンド組んでたんだ。」

ますきさんの親父さんもドラマーだったのか。

ていうか名前…攻めすぎだろ。

「頑張りなよ! 優君。」

「はい、もちろん。」

今はまだ怒られて修正ばっかくらってますが…そのうち必ずあの口の減らぬお子様を喰らせてやりますよ。

「ごちそうさまでした。」

食った食った。

「あいよ！これからもよろしく！スタッフとしてもね！」

「何か採用って流れになってるんですけど…」

「嫌だったかい？」

「とんでもないです！バイト探してたのは事実ですし…でもこんなあつさり決まっちゃっていいのかなって…」

「そりゃ、後日形式的な面接はするけどね…一生懸命頑張れる子ってのは話してみても良かったからさ。」

「普段は冴えねーけど、演奏になると別人みてーになるんだよな。」

「…よろしくお願いします。」

幼馴染と再会して、朝日 六花っていうとんでもないギタリストに出会って、ガールズバンドというものを知って…過去にも一応踏ん切りをつけて、やめてたギターをやり始めて、初めてバンドにも参加して、バイトもやることになって……うん。

数ヶ月前の俺。

とんでもねーことになるから覚悟しとけな。

幼馴染のこれまで

「お邪魔します。」

「おー来たか。」

「へえ…」

久しぶりに蔵の地下にあるこの部屋に入ったけど、やっぱり広いな。

このアンプとかも懐かしい。

遊びこんでギター弾いてたら先輩のじいちゃんにクツソほど怒られた記憶あるわ。

「去年から許可貰ってな、この部屋使わせて

もらってんだよ。」

「なるほど。」

よく見るとドラムやキーボードなどの機材も

見受けられた。

「ここでもいつも練習してるんですね。」

「ああ。今日は練習もないから、たまにはお前にも構ってやらないとなって思ってたさ。」

「…お心遣い痛み入ります。」

「…何で泣きそうなんだよ。」

『久しぶりにウチ来るか?』

市ヶ谷先輩から急にこんなメッセージが来た時はびっくりした。こんなん秒でOKするに決まってるだろ。

この、素っ気ない文章も実は寂しさの裏返しか。

なるほど、本当はきてほしいのか。

素直に言ってくれりゃあいいのに。

「ライブ、良かったですよ先輩。」

「やっぱり来てたのか。」

「もちろんですよ。それにしても先輩…あんなに楽しそうな顔するんですね。」

「そ、そうか?」

「良い人達に出会えたみたいで…本当に良かったですよ。」

「ま、まあ…な。」

満更でもなさそうだもんなあ…もう。

「で、先輩はどういう風の吹き回しでバンドに入ったんですか?」

「それは…香澄のやつに…」

「香澄さんって…戸山 明日香の姉ちゃんでしょ?」

あの変形ギター使いの人。

「ああ…そうか。お前も明日香ちゃんと同じ羽丘だったっけな。」

「ええ、同じクラスです。」

「じゃあ、ロックとも同じクラスか。」

「ロック？」

「朝日 六花って子だよ。」

「ああ。」

ロックとか呼ばれてんのか。

ロックと六花をかけてるのか？

「あいつ、ポピパさんの大ファンらしくてね…

ライブでも感動してボロ泣きしてましたよ。」

「ロックのおかげだったからな…ウチらが

主催ライブやれたのも。」

へえ…頑張ってたんだな、あいつ。

皆さんに感謝されるぐらいには。

伝えたら泣いて喜びそうだな。

「あいつ、バンドやりたらしいんですけどね…

なかなかメンバーが集まらないみたいなんですよ。」

「みたいだな…あんなすげー演奏できんのに。

もったいねーよな…」

ほんとそれな。

どっかにいないもんかね…マジで。

まさか、俺が先にバンドに入ることになるとは

思ってもみなかったよ。

「お前は？またギター弾こうとは思わないのかよ？」

「俺ですか？まあ、最近はちよこちよこ

弾いてますが。」

「…やめたんじやなかったのかよ？」

「だったんですけどね…先輩達のライブに

触発されたというかなんというか…」

「何があつたんだよ？」

「え？」

「お前、前に言ってただろ？弾く資格がないとか何とか…好きだったギターをやめる

よっぽどの何かがあったんじゃないのかよ？」

はぐらかしてきたけど…やっぱり聞かれるよな。

「それは…」

「話してみろよ。別に無理にとは言わねーけどさ…少しは楽になるかもしれないだろ？」

「せ、先輩…あんたって人は…」

「だから何で泣きそうなんだよ!？」

あんたが幼馴染で本当に良かったよ。

心からそう思った。

「…なるほどな…だいたいはわかった。」

はあ…と先輩は一つため息をつく。

「最低だな。」

「うぐっ…」

断腸の思いで話したのに…俺の精神に容赦なく
ダイレクトアタックかましてきおったこの子。

まあ、当然の報いなんだけどき。

「そうですよね…女の子を傷つけるなんて…」

「それもあるけど…ギターは何も関係ないだろ。」

勝手に巻き込んでんじゃねーよ。」

「う…」

「それに、お前がギターをやめるのをその子が望んでるとでも思うか？」

「お、思いません…」

気づくと俺は正座していた。

椅子のうえで正座したのなんて初めて。

あ、どうでもいいですよね…すいません。

「やり続けるよ…その子のためにもさ。」

「…そのつもりです。」

今何してんだろ…あいつ。

ギターは…まだやってんのかな。

俺は大丈夫だぞって伝えてやりてえな。

それから…せめて一言だけでもいいから謝りたい。

「まあ、お前はお前で大変だっただろうし…」

乗り越えたみたいだからこれ以上は何も言わねーよ。」

てつきりもつと詰られるのかと思ったが。

俺のフォロワーもしてくれるあたりやつぱり

優しいんだよな先輩は。

「先輩、今俺…」

と、まだ言うべきじゃないか。

RASについてのことは。

知ったらどういうリアクションするのかは楽しみではあるけど…その楽しみは後に取っておくことにしよう。

「何だよ?」

「いや、何かあったら俺も頼ってくださいよって。」

「ん、考えとく。」

それから、色々な話を聞いた。

戸山 香澄さんに出会ったこと。

ギター『ランダムスター』を譲ったこと。

他のメンバーの人達との出会いのこと。

文化祭で初めて『Poppin' Party』として5人で演奏したこと。

SPACEというライブハウスで演奏するまでの

波瀾万丈。

…そして、あまり学校には登校していなかったこと。

「色々とあったんですね…先輩も。」

「ああ…色々とな。」

俺が懸念していた最悪の事態もありえたわけだ。

けど、そうはならなかった。

「はっ…」

「何笑ってんだよ?」

「いえ、別に。すげー人がいるもんだなー…と

思っただけですよ。」

Poppin' Partyは戸山 香澄さんと先輩が出会ったことで始まったわけ

か。

あの人が…先輩を変えてくれたんだな。

「本当に感謝しかないな。」

「さつきから何言ってるんだよ?」

これからも先輩のことをよろしくお願いします。

…変わり者ですが根は良い人なので。

「…何か失礼なこと考えてんな。」

「いや…先輩のツンデレ具合だけは変わらねーなど。」

「お前はどんだけ私をツンデレ認定したいんだよ?」

「いや、事実だし? 十人いたら十人がそう答えると思いますよ?」

「全員じゃねーか!」

「先輩…」

「今度は何だよ?」

「話したらすつきりしました。ありがとうございます。」

「ギター…続けるんだな。」

「もちろん。」

「じゃあさ、今度聴かせろよ。」

久々にお前のギター……聴いてみたいし。」

「……覚えてます？引つ越す前に俺が言ったこと。」

「ああ……また一緒に弾こうってやつだろ？」

イヤだけどな。」

「イヤなの!？」

「冗談だよ。」

「……それはまたいずれってことで。」

今はまだ感覚取り戻してる最中なので。」

だが、近いうちに取り戻せるっていう

確信はある。

スタートラインに再び立つ日は近いはずだ。

もう迷わない。逸れたりしない。

あとはまっすぐに進むだけだ。

あとは頼んだ

「チュチュ、邪魔するでー。」

「ってあれ？誰もいないのか？」

「そんなことある？」

「パレオもいないとは珍しいな。」

「おーい…っっているやん。」

「当の本人は俺が来たことにも気づかないのか」

「何かのライブの動画を熱心に見ていた。」

「Roseliaじゃねーかよ。」

「what!?! いたんなら声掛けなさいよ！」

「今まさにやったわそれを。」

「しかしなんだ…お前もわかってるな。」

「これもしかしてRoseliaがやったっていう」

「主催ライブの映像？」

「YES。」

「マジか！ちよ、俺も見たいんだけど。」

いや、しかし画面越しでもわかるわ。

圧倒的ハイクオリティな音楽は。

「いいよな、Roselia。しかしお前もファンだったとは。」

「NO！そんなわけないでしょ！」

は？何でキレられたん？

ファンでもないのに動画なんか見ないだろうが。

「じゃあ何で見てんだよ？」

「決まってるじゃない…ブツ潰すバンドを目に

焼き付けておきためよ！」

うん…一ミリもわかんねえわ。

てか、ブツ潰す言うた？

「今にみてなさい…ミナト ユキナ…!!」

湊さんが何したっていうんだよ。

ま、いいや。色々とめんどくさそうだから何も

聞かないでおこう。

万が一の場合は頭グリグリの刑に処すが。

「ところで、どうしたのよ？今日は個人練習レッススのはずでしょ？」

「いや、ちよつと話があつてさ……」

「まさか、抜けるだなんて言わないでしょうね？」

「うっ……」

いきなり良いトコついてくんなコイツは。

切り出しづれえわ。

「……当たらずと雖も遠からずつてところだな。」

「……ライブまで一ヶ月を切ってるのよ？許されるはずないでしょ？」

「もちろん、ライブは全力でやるよ。俺が言いたいのはその後の話だよ。」

「その後？」

「俺もさ……色々調べたり、考えたりもしたんだよ。」

「……それで？」

「大ガールズバンド時代とは……よく言ったもんだよな。」

いや、ホント……誰が言ったかは知らないが。

「何の話よ？」

「今や行われているライブイベントの殆どが

ガールズバンドつてのを前面に押し出したもの

ばかりだ。」

「当然でしょ?」

「なら、わかっているはずだろ?このままいきや

ダメだつてことぐらいはさ。」

チュチュの顔が僅かながら歪んだ気がした。

「お前はナンセンスな理由とか言うかもしんねーけど…やっぱり男の俺じや近いうちに
限界が来るわけよ。ライブを主催する分には問題ないんだろうけどさ…さすがに毎回
毎回主催ライブなんてやれんだろ。」

「…してよ。」

「ん?」

「どうしてよ?!」

「はあ?!」

今説明したやんか。

ていうか何か泣きそうなんだけどコイツ。

「あなたには奏でるPOWERがあるじゃない…!」

それなのに…どうして…そんな理由で…」

「あー…チユチユ様？」

いくら小生意気なちびっ子とはいえ、泣かせるのは罪悪感が半端ないわけで…泣かないでな？

「…わかってたわよ。いずれ限界が来るって…」

レイヤからあなたの話を聞いた時も期待なんてしていなかった…But、ユウのギター力は本物だった…逃す手はないと思つた…」

そこまで俺のこと買ってくれていたのか。

その割にはスパルタだったがな。

「花園さんだっけ？あの人みたいにサポートギターつつーことでき…次のライブじややらせてもらうけど…その後は別のギタリストをスカウトすればいい。」

「…あなた達のようなギタリストがそう簡単に

見つかるとは思えないけれど…」

「いや、いる。」

とんでもないのがな。

「一人知ってる。安心しろ…そいつはたぶん

お前が求めていたであろう音を出すやつだ。」

「あなたがそこまで言うほどのギタリストがいるっていうの?」

「ああ、バンドをやりたいがって、幸い今は

フリーだ。」

「どうして早く言わないのよ?」

ええ…理不尽。

「まあ本人がどう言うかはわからないし、無理矢理ってわけにもいかんだろうから保証はできないけどな。」

「NO problem!」

あ、無理矢理にでも入れる気だなコイツ。

「知り合いなのね?」

「ああ、同じクラスのやつ。だから話つけるのも簡単。もちろん女子だ。バンド経験もあるらしいし。」

「……………」

急に黙ったと思ったら、何か考えてんな。

「いいわ…ユウ、まだ彼女には何も言わないで

ちようだい。」

「え? いいのか?」

「YES! あなたは次のライブの準備に専念しなさい!」

急にテンション上がりやがった。

現金なやつだな…。

「サポートだからといって中途半端な演奏はOutrageous!」

「わかつてるよ。」

「それで? そのギタリストの名前は?」

「朝日 六花。間違いなく俺以上のギタリストだ。」

「やけに推すわね。」

「あいつの演奏を聴いたのは一回だけだけど…」

何かこう…音にブン殴られたような気持ちになった。」

「…ふーん…ロツカ・アサヒね…面白そうなギタリストじゃない。」

新しい玩具を見つけたような顔してらっしゃるわー。

チュチュ様、ご満悦のようですよ。

てわけで朝日…あとは頼んだ。

どうなるかはわからんが。

御簾を上げようぜ

「バンドリ?」

「うん! 決勝は武道館でやるんだって! あこも

出たかったな!」

「Roseliaは出ないのか。」

近々ガールズバンドチャレンジというイベントがあるので、予選を勝ち抜いたバンド二組は

武道館行きの切符を手に入れられるのだそうだ。

それにしても武道館とは:

キャパ一万人は優に越えるドデカイ会場だぞ?

そんな中でやるってか。

「お姉ちゃんもその話ばっかりしてるよ。」

「へー、ポピパさんは出る気なんだな。」

これはまた楽しみが増える。

Roseliaが出ないっていうのは少々勿体ない気もするが。

「楽しみや〜!」

目を輝かせているのは…最近ポピバさんの

ライブがなくて成分が不足している朝日 六花さん。

どこか別世界へ行っているようなので放置しておく。お前にはお前でサプライズな出来事が待ってるんだ…せいぜい頑張れな。

「げっ…」

授業も終わり、帰ろうとした矢先にチュチュから着信があった。バイトもないし、練習もないからゆっくりしようと思ったのになあ…。

「もしもーし?なんで『ユウ!今すぐ来なさい!今すぐよ!』」

…用件だけ言って切りやがった。

まだ返事してないのに。

とにかく今すぐ来いつてか…仕方ない。

「おーつす。パレオ。」

「お疲れさまです。」

「来たわね！」

「来たわよ…で、どした？」

「Come on！」

ついて来いつてか？まったくもう…どこまでも

マイペースなお子様だこと。

「見つけたわ…ユウ…あなたの言うとおりだったわ！」

「何だよ？見つけたって。」

俺、何か言ったっけ？

「ロツカ・アサヒよ！面白い動画を見つけたの！」

「面白い動画？」

しかし、テンションたっけーな…こいつ。

モニターに映し出されたその映像は…

「これって…文化祭の…」

忘れもしない、あの時の。

文化祭の…朝日 六花の狂暴なギターソロの映像だった。誰か撮ってたのか。

「Excellent！言うだけのことはあるじゃない！」

「だろ!?あいつはすげえんだよ！」

「ちよ、ちよつとー！」

「いったあ!？」

な、何も手握ったぐらいで蹴ることないでしょうに…つい熱くなっちゃまったのは認めるけどさ。

「ああ！チュチュ様！お止めくださいー！」

「にしても…そうか。お前もわかったか。

あいつのギター力ちからってヤツがさ。」

「OKよ！ロツカ・アサヒをRASにスカウトするわ！」

無事にプロデューサーのお墨付きも得られたことだし、あとは本人次第といったところか。

まあ、断る道理もないと思うけど。

「あ、ところでさ…バンドリってイベントがあるの知ってるか？」

「Of course！武道館だなんて私達にふさわしい

ステージじゃない！そこでRoseliaをブツ潰してやるわ！」

「えーと、チュチュ様？盛り上がっているとこ悪いんだけど…」

「何よ？」

「Roselia、出ないらしいっすよ？」

「なっ…：Reaally…?」

毒気抜かれてやんの。

「うん、マジで。他ならぬRoselliaのメンバーから聞いたからな。」

「どういうことよ?! ミナト ユキナ…どこまで

私をコケにするつもり?!」

あーキレてらっしやる。

てか、そのRoselliaに対する対抗心は何なんだよ。

「何でそないRoselliaに拘るん? 何かあったのか?」

「ユキナは私のプロデュースを断ったのよ!」

「何だ…：そんなことか。」

「…：そんなこと?」

おっと? 言葉のチョイスミスった説。

地雷踏んじやったかな?

「Sorry。飴ちゃんやるから許してな。」

「いらないわよ!!」

はあ…：つたく、小さいのは背丈だけにしろってな。

仕方ないからわかりやすく説明してやっか。

「例えばよ？例えばの話…俺がどこぞのプロデューサーだと仮定しようか。それで、お前のところにやって来て『私についてくればこのバンドは絶対に大成する！』とか言われたらチュチュはこの話受けるか？」

「それは…」

「受けないだろ？Shut Up！プロデューサーなんかNo Thank youよ！とか言いそうでもないな。」

「ぐ、ぬぬぬ…」

ぐぬぬって口に出す子初めて見た。

「湊さんは自分達の奏でる音で高みを目指したいのよ。そういうお人なの。根っこはお前に似てんだよ…きつとな。」

まあ、気概は買うけどな。

もうちよい情熱の向ける方向を考えてほしいけど。

「でもさ、良かったじゃん。ガールズバンドチャレンジって…案の定俺は出れなかったわけだ。」

「…そうね。」

「ユウさんとはもつと一緒に演奏したかったのですが…」

パレオが残念そうに言う。

「そう言つて貰えるだけでもありがたいってもんよ…パレオ。」

本来ならばあり得なかつたことだしな。

どんな形であれ俺が表舞台に立つてことは。

「ありがとな…チュチュ。」

「何よ？急に…」

「いや…なんやかんやお前にはつつかかたけどさ…感謝はしてるぜって話。こんな機会一生なかつただろうし。」

「礼を言うのは早いんじゃないやなくて？まだライブも終わっていないのよ？」

「そうでした…ライブ、頑張るからよ…」

共に御簾を上げようぜ。」

「はい♪」

「…私の台詞を取らないで。」

疑いようがない。

このメンバーならば無敵だ。

必ず良いライブになる…。

それに、あいつが加われば…

「面白くなりそうだ。」

どんな化学反応を起こすのか…今から楽しみだな。

ライブ前夜

きっかけはあの演奏だった。

朝日 六花のギターは凍りついた俺の心に火をつけた。称賛と同時に、自分もあんな風に弾いてみたいと不覚にも思わされてしまった。

Poppin' Partyの主催ライブ。

あの人達は本当に楽しそうだった。

勿論、彼女達だけでなく他のゲストバンドの人達も同様だった。幼馴染とのいつも通りの時間を

過ごすため…アイドル活動のため…笑顔のため

…高みを目指すため…それぞれ目指すものがあり

それを実現するために切磋琢磨する。もし、ギターをやめていなくなったら…俺にも一歩を踏み出す勇気があったのなら…バンドに対する憧憬と同時にいくつものもしも…が頭の中を駆け巡った。

そして…

「ユウ。明日は最高の音を奏でなさい。あなたならそれができる…私が保証するわ。」

「わかってんよ。」

ボロクソ言われた日々も今や懐かしい。

早いもんだな。

チュチュ：こいつのおかげでまた一つ俺は殻を破ることができる。こいつのことに
関してはまだまだわからないことが多いが：音楽に関する熱意や姿勢は本物だ。それ
だけはわかる。

「優、本当に抜けちゃうのかよ：お前とはもつとやりたかったのにな。」とはますきさん。

「ま、音合わせならいつでも付き合いますよ。」

「：誘っても全部断りやがって。」

「いや、GALAXYでしょ？あいつに会う確率が

ほぼ確だったんで行きたくなかったんですよ。」

「頑張ろうね、優君。」

「ええ。レイさんも思いつきりやっちゃってくださいね。」

おそらくこれが最初で最後の機会。

いよいよ、明日か。

「何か言うことは？」

チュチュが聞いてくる。

「別に…何もねーよ。」

やるだけのことはやった。

あとはそれを出すだけだ。

明日のR A Sのワンマンライブは

d u b M u s i c E x p e r i m e n t

通称d u bと呼ばれるライブハウスで行われる。

キヤパは千人を越える大型のライブハウスである。

そんな客が来るところなんてのは聞いてなかったけどな。

「もしかして怖じ気づいた？」

「はあ？怖じ気づいてねーし！」

こいつ、今ちよつとバカにしただろ。

生意気な。

「見とけよ？明日のライブ…感動して

涙ちよちよぎれても知らねーからな？」

「期待してるわよ。」

いや、ぶっちゃけ怖じ気づいてるけどね。

ライブなんてやるのは初めてだもん。

人前で弾いたことはあったけど、それとこれとはレベルが違いすぎる。

「しかし、明日で四回目なんだな…ワンマンライブ。」

バンド結成してから日も浅いだろうに…

すごいことだよな。

「そうよ…だから今まで以上の演奏を

オーディエンスに魅せつける必要があるわ!」

かけるねえ…プレッシャー。

「あなたはタエ・ハナゾノにも負けないギターちから力を持つてる…できないとは言わせないわよ?」

「俺はあの人ほど器用じゃねーよ。」

以前やったというライブの映像を見たけど半端じゃなかった。特にレイさんとの息はピッタリだった。あの人といい、Roseliaの紗夜先輩といいレベル高すぎひんか?」

「けど、お前がいるから大丈夫だろ。プロデューサーさんよ。」

「……………」

あれ? いつもなら自信満々に答えるはずなんだが…どうした? さすがのこいつも不安なのか?

「…そして、そこでロツカ・アサヒをスカウトする！」

「え、あいつ来るの？」

「はい！パレオがチケットをお渡ししました。」

六花様も来るはずですよ！

「六花か…あいつ、そんなにすげーのか？」

「ええ、すげーんですよ…ますきさん。」

スカウトにしちや随分と大掛かりだが、ようやくあいつの念願が叶うわけだ。

「レイヤ、マスキング、パレオ。私のために最強で最高の音を奏でなさい！RASが頂点だということを認めさせるのよ！」

やたらと頂点てっぺんに拘るよな…こいつ。

承認欲求つてのは誰にでもあるものだけど。

こいつのは執着つっーレベルじゃない。

執念のような何かを感じる。

実際カリスマ性みたいなものもあるし、作曲から何までこいつの才能は計り知れない。
い。

「ユウ！あなたも！RASの一員として恥ずかしくない演奏をするのよ！」

「おう。」

けれど、どこか危うさもある。

それが何かはわからないが、何となくそんな風に思った。何事もなければいいが。

初舞台は大舞台

遂に来た…来てしまった…この日が。

10月7日。

RAISE A SUILENの4thワンマンライブ。

その名も『RAISE your RAGE』

ゲネプロ（本番同様の形式で行う最終リハーサル）を終えるまでは良かったのだが…
ここにきて

緊張すぎて足の震えが止まらないという事態に陥ってしまった。

どうしよう…どうにかなんだろ！とか思ってた

数時間前の俺を殴ってやりたい。

「なんだよ優…お前、緊張してんのか？」

ますきさんが茶化すように言う。

「そ、そりゃあ…俺は皆さんのようにライブ慣れしてませんし…」

「そんなんじや困るわね。あなたはRASの

ギタリストなんだから、堂々としていなさい。」

「…やっぱり帰っていい?」

「No!今さら何言ってるのよ!」

「ですよねー!」

いや、だって…ライブの告知ポスターに

それぞれの担当パートの名前が書かれてんだけども…

G t . S e c r e t

ハードル上げてきますねえ…さすがチユチユ様…

集客にも抜かりはないってか。

それに…どうやら今日のライブ…Roseliaさんと

ポピパさんも来るらしいのだ。

どういう意図かは知らないがチユチユが招待したらしい。

心臓の鼓動がやばい。

こんな調子で果たしてまともに演奏できるのかどうか。

「ユウさんなら大丈夫ですよ♪」

…中学^バ二年生^オに励まされる高校生一年生の図。

でも、ありがとうな。

ホント良い子だよこの子。

けど、演奏時のパフォーマンスはめっちゃド派手なんだよな……縦横無尽に動き回って
ていうか……

そりゃあもうピョンピョン跳ね回る。

ますきさんは言わずもがな。

狂犬の名は伊達ではなく、隙あらば即興のアドリブを入れてくる困ったちゃん。本人
曰く楽しくなってきちまうんだよな……とのこと。

レイさんは……昔からは考えられないくらい変わった。力強い歌声……それでいてベ
スの方もおざなりではない……どこか自分を出しきれていないあの頃とは違う。

「大丈夫だよな。」

この人達となら。

「吹っ切れたみたいだな。」

「ええ、ご心配おかけしました。」

「もうすぐ開場よ！準備はいいわね？」

「ああ！いつでもいいけるぜ。」

とは言ったもののよ…客の入りがやべえ。

ほぼ満員じゃねえか。

キャパ1000人って言ってたから1000人近くはいる計算になるわけか。

だが大丈夫だ…やれる。

このメンバーなら。

できる…俺はできる。

大丈夫だ…信じろ。

今こそ俺のギターちから オーディエンス力を観客に魅せつける時だ。

満員？

それがどうした。

できるか？とかそういう問答は今さらナシだ。

退路はとつくに断たれてるんだからな。

「Hello everyone！」

チュチュの挨拶に対し観客席から歓声があがる。

さすがに熟れてるな…こいつ。

何度もこういう場面を経験しているだけはあるな。

「今日はRAISE A SUILENの4thワンマンライブに来てくれてThanks!ライブの前にSweetな

New guitaristの紹介をするわ!」

先ほどよりもさらに大きな歓声があがる。

すげえ歓声…と、圧倒されてばかりでもいよいよいられないな。

さあ、早いところ紹介してくれよプロデューサー。

およそ1000人。

俺の音を聴く観客といよいよご対面の時だ。

You are unstoppable!

「G t. ユウ!」

だ、大丈夫だよな?

いきなり大響聲を買ったりは…

「!？」

…しなかった。

むしろ凄い大歓声に思わずビビってしまう。

マジか…初見の…しかもガールじゃないギタリストだぞ?

それでも受け入れてくれるっていうのか…

なんて優しい世界なんだ。

「B a. & V o. レイヤ!」

「D r. マスキング!」

「K e y. パレオ!」

ったく、それにしてもどういう心臓してんだよ

この人達は…皆、堂々としてやがる。

こんな中でベストなパフォーマンスを發揮してきたっていうのかよ…半端ねえな。
空気が震えている…熱気が凄い。

何もしていないのに最早手に汗握っていやがる。

「いくわよ！ First song！」

「ふーっ…」

さて、初っぱなからコケるわけにはいかない。

出しきるんだ…今までを…ありったけを込めて。

全部昇華してやるよ。

Rosealiaさんやポピパさん達が見た景色を俺も…

見るんだ。

何もかも新鮮だった。

何コレ、すっげー楽しい。

振り向くことはできない…が伝わってくる…

音でわかる…きつと皆も同じ気持ちなんだ。

以心伝心っつーのか？

ますきさんのドラムが俺をイヤでも奮い立たせてくれる。ちよーうどいい…利用させてもらおう。

そうだよ。

ちよつとぐらいレールをはずれたって平気なんだ。

そんなくらいで崩れるほどこのバンドは脆くはない。

それどころかそんなこと気にしてた日には

ヘタすりゃ置いてきぼりをくらってしまふ。

『You are unstoppable!』

いつか、チュチュに言われた言葉を思い出す。

そうだ、俺は止まらない。

止まるわけにはいかない。

前を走り続ける。

トツプを独走しろ。

並び立つことすら許すな。

叫びたい衝動すら音に乗せて。

そして、最初の曲『UNSTOPPABLE』を終える。

永遠——とまではいかないが、とてつもなく永く感じられた時間だった。

「やっぱ、たのしーなあ…ギターって…」

思わずそう溢した。

誰の耳にも届くことはないが…改めてそう思った。

こんなん味わつたらやめられなくなるわ。

チュチュのやつめ…責任取れよ。

そうして、2曲、3曲と演奏は進んでいく。

できるなら終わってほしくない。

この最高に楽しい時間。

次は——

『R・I・O・T』か。

RAISE A SUIRENの原点とも呼べる曲。

意味は暴動…だったっけか？

ガールズバンド時代を終わらせると聞いた時には何を言っただコイツは…と思っ
たもんだが…

大言壮語なんかじゃなかった。

相応の力を持っていた。

そんな事を望んじやないが、こいつなら本当にそれをやってのけるんじゃないか…
という期待感がある。

チユチユ、ありがとうな。

お前には返しきれない借りができちまった。

ああ…終わりが近づいてきているのがわかる。

終わってほしくない願っても、時間は無情にも進んでいく。
もつと弾きたい。弾いていたい。

この最高のメンバーと。

「^{ラー}ASS!^{ラー}ASS!」

演奏が終わっても観客のコールは止む気配がない。

「ユウー！」

驚いたことに俺への歓声もあった。

終わった…終わったんだな…。

できればもつとやりたかったが…これ以上を望むのは贅沢ってヤツか。

十分すぎるほどのプレゼントは貰ったんだ。

思い残すことは…ない。

「アンコールの前にSweetなお知らせよ！」

あ、アンコールあるんだ。

良かった。もう一曲弾けるんだな。

それにしてもチュチュめ…まだあんな元気あのかよ。

「RAISE A SUIREN は Bang Dream! Girls Band Challenge! に出場します！」

いい盛り上げっぷりだ。

大丈夫だ。

皆なら頂点を目指せる。

頑張れよ。

応援してるからな、チュチュ。

「そこで、Roseliaと——」

うんうん。

「ポピパを——」

うん？

「ブツ潰す!!」

「…はっ？」

ごめん、前言撤回するわ。

頂点獲れよ

Roselliaとポピパを…ブツ潰すつつつたか？

「ちよいちよいちよいちよい。」

待て待て待て。

完全に想定外だぞこんなの。

セツトリストにないもん。

今まで盛り上がってた観客もこのチュチュの発言には戸惑っている。

そりやそうだろう。

ていうか何を言うてくれとんねん

このガキンちよは。

RoselliaとPoppin' Partyのファンを敵に回す気か？

俺は明日からどんな顔して学校行けばいいのさ？

「But、そのためには新しいギタリストが必要になるわ…」

お前に必要なのは一般常識だバカたれ。

最後の最後で大ボカをやらかしやがって。

「ロッカ・アサヒ！あなたを私のバンド、RAISE A SUIRENにスカウトするわ！」

照らされたスポットライトには本日朝日の主演六花の姿が。
やっぱり来てたんだな。

「ご、ごめんなさい!!」

「なっ……」

ほらぁー……あんなこと言うから……

断られちやったじゃないかよ。

「はぁーっ……」

しやーない。

呆けてるプロデューサーからマイクをぶん取る。

「ちよっ……!」

最後の仕事といきますか。

「あー、ご挨拶が遅れました。本日、RAISE A SUIRENのサポートギターを務めさせていただきました。ユウです。先ほどはこのガ。プロデューサーが不適切な発言をしてしまったことをお詫び申し上げます。」

「ちよつと！勝手に話を進めないで！」

「うっさいわ！お前が変なこと言つたせいで

テンパった空気になつてんだろが。」

人がせつかくそれをフォローしようとしてるのに…

言い終わる前にマイクをぶん取られる。

「あつ、このやろ…」

「どうして断るのよ！ロツカ・アサヒ！」

すかさず奪い返す。

「さっきの発言を取り消せ。そして謝罪しろ。」

「できるわけないでしょ！」

「いつ…あとで激辛ジャーキー食わせたる。」

「ほら、Roseliaさんとポピパさんに謝れ。すみませんでしたって頭下げろ。」

「マイクを返しなさい！」

「やだね。」

お前の短いリーチじゃ届かんだろ。勝ち確。

このやり取りがウケたのか観客席からはちらほらと笑い声が聞こえてきた。

望んだ形ではないが、結果オーライか。

「あー…ロツカ・アサヒさん。」

プロデューサーはこんなんですが、腕は確かです。RAISE A SUIRENは素晴らしいバンドです。

最強のメンバーと最高の環境が揃ってます。

今一度、考え直してみてもどうでしょうか？」

「……………」

迷っているみたいだな。

まったく、こんなもん即決だろうに。

「あつー！」

油断した…マイクを…

「返事は今すぐじゃなくてもいい！ロツカ・アサヒ！その気になったらいつでも来なさい！私は

あなたのギター力ちからを必要としているわ！」

：最初っからそう言えよな…ったく。

色々と一悶着あつたが、アンコールを一曲終え、

RAISE A SUIRENの4th ワンマンライブはお開きとなつた。

「Sweet!Excellent!unstoppable!」

出た。チュチュ様三種の神器。

随分とご機嫌ですなあ。

「ユウ！最初の緊張がウソのようなSweetな演奏だつたわ！」

「そ、そうか？」

なんだよ、そんなこと言われたらさつきのこと

怒る気もなくしちまうじゃないかよ。

まあいいか、今日ぐらいいは。

「うん、本当に…良かったよ優君。」

「レイヤさんこそ…力強い歌声にリズムキープも完璧つて化けもんですか。」

「また一緒にセッションしましょうね♪」

「パレオ、いつもより3割増しくらい派手にアクションしてなかったか？ライブ中思わ
ずツツコミそうになつたぞ。」

「つい張り切ってしまつて…」

うん、かわいいな。

「本番で今まで以上の演奏をするなんてな…

やっぱすげえなお前。」

「ますきさんとはもう勘弁ですよ…こつちが持たないもん。」

「そう言うなよ、またやろうぜ。」

「そう…ですね。」

やれて良かった。

それもこれも、この場を用意してくれた

チュチュのおかげだな…認めたくはねーけど。

「あれ?…」

いつの間にかそのチュチュがいない。

どっか行つたんか?

…何かわからんがイヤな予感。

「すみません、ちよつとお手洗いに。」

「ユキナ！本当に出ないつもりなの？」

「……………」

うわあ…予感的中。

チュチュに向かいあうのはRoseliaの面々。

中心に立つ湊さんにチュチュが啖呵をきっていた。

「私たちに負けるのが怖いのね？」

それならそうと——」

「ごらごら、絡んでんじゃねーよ。」

「ちよっ……！」

「はいはい、いきましようねー、チュチュちゃん。」

「放しなさい！」

「へいへい…リリース、リリース。」

またこいつは…懲りずにブツ潰すだのなんだの

言ってるのか？

「ゆう！凄かったよー！」

「お、おう…ありがとな宇田川。」

せつかく来て貰ったっていうのにすまんね。

「そのー…すいません、ウチの子が失礼を…」

「誰がウチの子よ!」

「いいからいくぞ…湊さん達はお前のことを

相手にしてるヒマなんか…」

「出るわ。」

「ないん…え?」

湊さん…今、出るわって?

「出るって…バンドリにですか?」

「ええ。」

いや、でも…

「FUTURE WORLD FES. ってのがあるんじや…?」

「その通りです…湊さん、どういうつもりですか?」

それは紗夜先輩も想定外だったようで…

難色を示している。

独断なのか…本当にどういうつもりなんだ?

こんなやつすい挑発に乗るとも思えないし…何か考えがあつてのことなのだろうか

?

「…いくわよ。」

「じゃーね！ゆう！また明日！」

「おう。」

俺なんか考えても仕方ないか。

湊さんには湊さんなりの考えがあるのだと

納得するしかない。

「星川さん。」

「え、あ、はい。」

やっべえ…紗夜先輩めっちゃキレてね？

気のせい？気のせいだよな？

「…どうして隠れているのですか？」

「そうよ！放しなさいよ！」

「どうぞ、コイツから煮るなり焼くなりお好きにしちやっってください。」

プロデューサーを生け贄にしても俺は助かる。

今日の友は明日のためへの俺の贄。

「…何の話ですか？」

あれ？シメるとかそっち系の話じゃないの？

「…素晴らしい演奏でした。ただそれだけを言いたくて…それでは。」
「あ…どうもです。」

素晴らしい演奏…そう言ってくれたのか。

もつたいなきお言葉だな…俺には。

「今に見ていなさい…Rose lia。」

「まずは、ギターだろ。」

「そうね、ユウ！あなたにも協力してもらおうわよ！」

「へーい。微力ながらお力添えさせていただきますよ。」

できるならば武道館で。

5人揃った演奏を見てみたいものだ。

「チュチュ。」

「何よ？」

「頂点獲れよ。」

「…言われるまでもないわね。」

「だな。」

∴そのためにも、コイツのこの意固地な性格は
何とかしないとな。

後日、チュチュと俺の小競り合いを収めた動画が何故かバズってたらしい。本当に何故だ。

学校の放送で自分の名前を呼ばれると一瞬ドキッとする よね

「ふわあ…眠…」

しかし、こうして一夜明けてもまだ信じられないな。

昨日の出来事は夢だったんじゃないかとさえ

思うくらいだ。

しかし、体中の筋肉痛がそれが夢ではなかったことを証明してくれる。

「優のライブ、母さんも行きたかったわ。」

「別に、来るもんでもなかったって。」

「母さん嬉しくて…ギターをやってない優なんて優じゃないからね。」

「なんじゃ、そら。」

けど、そうか。

…当たり前前かが当たり前じゃなかったんだもんな。

「んじゃ、行ってくる。」

昨日も大変だったけど、今日は今日で大変な一日になりそうだ。

「ん？」

げっ…：我らがプロデューサーチュチュ様では

ありませんか。

…何故こんなところに？

絡まれるとめんどろそうだな…よし、さりげなくすれ違う作戦でいくか。

「よう、チュチュ。昨日ぶり。良い天気だな。」

「Good Morning！」

「つて待ちなさい！」

「ぐえっ！」

作戦失敗。

ていうかいきなり引つ張らないでもらえます？

「なーんだよーもう…」

「どういふことよ!？」

「どういふことよ!?!? ってどういふことよ?」

「ロツカ・アサヒ! 逃げられたのよ!」

完全に嫌われてんじゃん。

「てか、昨日いつでも来なさいとか言ってたやんか。何で来ちやっつてんだよ。」

フットワーク軽すぎんだろ。

「もしかして、昨日の謝罪でもしに来たとか?」

「謝罪?…まさか!」

「だよね。」

「プロデューサーとしての挨拶がまだだったと

思っ…ジャパニーズは礼儀を重んじるんでしよう?」

昨日ブツ潰すとか言ってた子がそれ言う?

「そっか、頑張れよ。んじゃ。」

「Bye!」

「つて、だから待ちなさいってば！」

「ほげっ!?!」

おまつ…だから引つ張んなって！

首絞まったわ。

「ゲホツ…もう始業のチャイムが鳴るんですが？」

「そうなの？なら仕方ないわね…」

「そういうこと。じゃあな。」

…ていうか、あいつ学校は？

「危ない危ない…ギリギリセーフ。」

ちよつと時間食ったけど何とか間に合つ…

「あ！来た来た！」

「星川！凄かったね！昨日！」

「いつの間にRASに入ったの!?!」

「チュチュとのラップバトル面白かったよ！」

「やっぱり、ギター弾けたんじゃん！」

わああー…やっぱりー…

案の定というべきか、朝っぱらから教室は大盛り上がりであった。てか、ラップバトルとか言ったの誰や。

「皆さん静かに。席について。」

先生ナイスタイミングです。

「すごかったよねー！朝日さんスカウトされてたし！」

その朝日さんは何故か俺を睨んでいるが。

「よう、昨日は大変だったなあ。」

「ポ、ポピパさんは捏ねさせへんよ！」

「はあ？」

捏ねる？何の話だよ。

「昨日、ブツ潰すって…」

ああ、そのことか。

「安心しろよ、そんな気はサラサラねーから…
少なくとも俺はな。」

「本当に?」

「むしろ俺はポピパさんを応援してる側の人間だぞ? 仮にチュチュの奴がそんなことをしようもんなら俺が止めてやるよ。」

まったく余計なことを言ってくれたもんだよ。

俺まで双方のファンに敵視されちゃ敵わんど。

「でも、昨日のライブでわかっただろ? 俺はともかく、他のメンバーの人達は R o s e l
i a と比べても

遜色ないレベルだ…悪くはないと思うけどな。」

俺は化けると思う。

「無理強いはせんけどさ…一度話合ってみろよ。」

「…うん。」

あの感じだとまた来そうだけだな。

『1年A組 朝日 六花さん。 星川 優くん。』

至急、生徒会室までお越しください。』

はい、休憩終了のお知らせ。

そしてフラグ回収。

生徒会室つてのがこれまたきな臭い。

「なんやろ？」

「朝日、俺お腹痛いから無理って言っというて。」

「ええ!？」

「俺とお前が呼ばれたつてことは、ぜってー

チュチュの奴だろ。行きたくない。」

結局、ごねてもキリがなさそうだったので

しぶしぶ生徒会室へ。

「失礼しまーす。」

「Hello！」

「…失礼しました。」

「待ちなさいってばー！」

チュチュめ…やっぱいいやがったか。

あと、朝日さん…俺の後ろに隠れるのやめてもらってもいい？あなたも女子だから、触られると意識はしちゃうわけよ。

「なんで俺まで呼んだし。」

「スムーズに話を進めるためよ！」

いや、進まないと思う。

「優君のギターあたしも観たかったなあ…おねーちゃんも良い刺激になったって言うってたよ！」

日菜先輩にそう言われるが、何だかむず痒い。

「ロツカ・アサヒ！RASに入りなさい！私のバンドに入ってガールズバンド時代を終わらせるのよ！」

「いや、誘い文句。」

当の本人めっちゃ怖がつてるし。

…あといい加減俺から手を離そうな？

「まあなんにせよさ…一度チュチュのスタジオで演奏をみてもらったほうが…」

そこまで言いかけたところでチャイムが鳴る。

「午後の授業がありますので…」

つぐ先輩が申し訳なきように切り出す。

「…仕方ないわね。それじゃ二人とも、授業頑張つてね！」

チユチユ様、あなたもきちちんと学校へ行きましようね。

「終わったあ…長い…長い…長い一日だった…」

質問する輩をすべて捌ききり、悲鳴をあげる体に鞭打つて授業も寝ずに聞いた。

頑張った自分にご褒美あげたいわ。

帰ろう。一刻も早く。

何だかイヤな予感がするし。

後日聞いた話だが、やはりチユチユがパレオを

伴って放課後に来ていたそうで散々だったらしい。巻き添えになった戸山は泣いていいと思う。

不合格の理由

「ん…」

着信の音で目を覚ます。

チュチュからだ。

「んあ…どした？」

「ロツカ・アサヒがスタジオに来たわ。」

「マジか？それで、どうだった？」

あいつ、行つたのか…

あんなだけ怖がつてたのに…一体どういう風の

吹き回しだ？

「正直拍子抜けね…不合格…はつきりとそう言つてやつたわ。」

「そうか、そりや良かった…ああ!?!不合格!?!」

「Yes。」

「ちよ、ちよつと待て…そんなわけねーだろ？」

お前も見ただろ？あの演奏。」

「その良さがまるで出ていなかった…」

他人の顔色を伺うような演奏だったわ…

あんな演奏は No Thank Youよ。」

なるほど…なんとなくではあるがわかった。

恐らくはチュチュの指摘通りなのだろう。

あいつはそういう演奏をしてしまったわけか。

「もう一回チャンスをやめることはできないのか？お前だってこのままじゃ不本意だろ？」

「…それは彼女次第ね。」

あいつ次第…か。

「じゃあよ、本来の力が出せればワンチャンあるわけだな？」

「そうなるわね。」

「…よし、わかった。」

「何か考えでもあるの？」

「まあ、見とけて。」

「…遅くに悪かったわね。」

「気にすんなよ。わざわざサンキューな。」

「何か悪いことしちゃったなーって思ってたよ…」

「なるほどね。ますきさんが引きずってたわけだ。」

そういうことが、色々と合点がいったわ。

「別に、引きずつちやあいねーけど…」

ラーメン銀河でのバイト中、今は客もいないのでますきさんに先日の事の詳細を聞いていた。

「それは…チュチュが最も嫌う演奏ですね。」

「ああ…GALAXYで聴いた時はそんなんじゃないやなかったんだけどな…」

「…それって、暴れるような演奏だったでしょ？」

「ああ！そりやあまあ凄かったぜ！うまく言えないけどさ！」

「でしょ？」

やっぱりな…わかる人にやわかるんだよ。

それが正當に発揮されないだなんて…

「歯痒いなあ…くっそ…」

かと言って、俺にできるのは発破をかけてやることぐらいだが。

明日にでもあいつと話をしてみよう。

もう：報われてもいい頃合いだろ？

「あれ、先輩からメッセージだ。」

不在着信もある。

…そうだった。

あろうことか忘れていた。

ブツ潰す発言でまだ誤解を招いている可能性が…

『色々と聞きたいことがあるから折り返し電話くれ。』

やべ：怒ってねーよな？

…市ヶ谷先輩に嫌われたら俺生きていけねーぞ？

「あ、もしもーし。」

「おう、遅くに悪いな。」

「いえいえ…先輩、その…単刀直入に聞くんですけど怒ってないんすか？」

「怒る？何の話だよ？」

「いや、ライブに来てくれてたでしょ？そんな時にウチのプロデューサーがブツ潰すだの失礼なこと言っちゃったから…皆さん怒ってないのかなーと…」

「ああ…別にウチらは気にしてねーよ。」

「そ、そうですか…なら良かった。近々謝らせますんで…必ず。」

「それより、びつくりしたぞ…お前がまさかRASのギターやつてるなんてな。」

「どうでした？良かったっしょ？ちよつとは見直したでしょ？」

「ああ…皆も凄かったって言ってたぞ…特に

おたえの奴はな。」

「おたえって…花さん？」

「ああ。」

マジカー…嬉しい。

やっぱり、同じ分野の人からお褒めの言葉をいただけるのは嬉しいもんですな。

「それで、ロックのことなんだけどさ…」

「あいつがどうかしました？」

「RASを不合格になったみたいなんだよ…お前何か聞いてないか？」

「ああ…今それで絶賛頭を悩ませ中ですよ。」

「ない知恵絞っても何も出ないだろ。」

「辛辣！」

「ウチらも何かできないかって考えてたんだよ。」

「なるほど…あ、そういえば先輩…」

ポピ。Pさんはバンドリに出場するんですか？」

「ああ。」

「そうすか…たぶん、あいつにとつては

それだけで十分だと思いますよ。」

「そうか？」

「ええ、俺も明日あいつと話してみようと思ってるんで…また何かあれば連絡します。」

「ああ、遅くに悪かったな。」

「いえいえ…二十四時間いつでもかけてください。」

「コンビニかよ…」

「はあーっ…良かった。」

気にしてないみたいだ。

それに、バンドリにも出場するっていうし…。

とにかく明日だ。

あいつと話そう。

…どうしてこんなにもあいつのことが気になるのか…今になってなんとなく分かった気がする。

境遇や環境は違うかもしれないが…

俺はあいつに…同じギタリストとして

シンパシーを感じていたのかもしれない。

闇の中から

『あの…』

『ん、何？』

『先生が職員室に来てくれたって…』

『ええー…何かの間違いじゃないの？』

『星川君って言うたので…間違いない…と思います。』

『人違いだよ。俺、星川君じゃないし。』

『えっ…星川 優君じゃ…』

『…ちっつ、バレたか…そうです。星川 優君です。気軽に優君とでも呼んでくれ。』

『え、あ、はいっ！』

『っーか、何でそんなかしこまってるわけ？別に取って食おうってわけじゃないんだし

さ…タメ口でいいじゃん…えーと、わり…名前なんつったっけ…』

『あ、朝日 六花です。』

『ああ、そうそう出席番号1番の…岐阜から来たんだっただけ。』

『は、はい。』

『そつか、そつか。どーもな。』

『あ！あの！』

『ん？』

『職員室…そつちじゃないん…だけど。』

『ちつ、バレたか…』

最初は冴えない奴…ぐらいの印象だった。

それがまさかあんな…

『羽丘一年…朝日 六花です！』

あんな演奏をするなんて思いもしなかった。

あれが…俺の運命を変えたのかもしれない。

あれがなければ、俺は…ギターをやることもなかっただろう。

過去に囚われ続けたまま…チュチュの誘いだって

断っていたはずだ。

ポピパさんがお前を救ったというのなら…

お前は俺を救ったんだよ。

「はあ…」

「朝っぱらからため息とはよろしくないな。」

「あ、おはよう。」

「聞いたぜ…不合格って言われたんだってな。」

「…うん。他人の顔色を伺うような演奏はいらないうって言われちゃった…。」

「いきなり連れてかれて、ハイ不合格！ってのも

酷い話だよな。」

「……………」

「朝日…放課後、時間あるか？」

「え？今日は大丈夫だけど…あ、でも銭湯の番台が…」

「番台？バイトかけ持ちしてんのか？」

「ううん…叔母さんのところで住み込みでやらせてもらってるの。」

「ああ、上京してきたんだもん…そう考えたらすげーな…学校来て、バイトして、番台

やって、メンバー集めにギターの練習だろ？考えただけで頭痛くなってきたわ。」

こいつこう見えて特待生だしな。

ほんにようやつとるわ。

「でも、好きでやってるから。」

「そつか…憂さ晴らしぐらいなら付き合ってやろうかなーっと思っただけだな…」

「それなら、旭湯に来る？」

「え？」

「何もないけど…」

「お、お邪魔しまーす…」

おいおいおい、マジか。

旭湯に行く↑

朝日の叔母さんが気を利かせてくれて

番台を代わってくれる↑

じゃあ部屋に来る？↑今ここね

ど、どうしよう…女子の部屋に入るなんてのは初めてのことだぞ？

市ヶ谷先輩？あれはノーカウントだ。

戸山や宇田川はともかく俺は男だぞ？

少しは警戒心とかないのか？

まあ、こいつなら臆病チキンだし別にいつか…的なの？

それはそれで悲しいなオイ。

「何言ってるんだ…ギターがあれば充分だろ。」

「ギター…好きなんやね。」

「…あたりまえだろ。」

つい最近までガチ放置してたやつと言う

台詞じゃないけどな。

「いつから始めたの？」

「小学校あがるくらいかな…親父にき、欲しい

モンないかって言われてゲーム買って欲しいって

言ったんだよ…そしたら何をトチ狂ったのか

ギターを買ってきやがってき…それが始まりかな。」

「そうやったんや…」

「最初はしぶしぶだったけど、やっていくうちに楽しくなっかってき…なんつーか、不思議な

ことにギターだけは一生懸命頑張れたんだよな。」

「私も…勉強も運動も…全然ダメやったけど…」

ギターだけは頑張れたんだ。」

「そっか…俺らって、案外似た者同士なのかもな。」

「うん。優君…ライブの時すごく楽しそうやったよ。」

「楽しそう?俺がか?」

それは意識していなかったな。

自分の表情なんてわかんねーし。

でも…そうか…楽しそうだったか。

「お前も味わってみろよ…あれは忘れたくても

忘れられなくなるぞ?」

あの歓声…あの熱狂。

できるならもう一度戻りたいとさえ思う。

…でも、その場所にいるべきなのは俺じゃない。

「…もう一度チャンスもらってこいよ。」

「でも、不合格って言われちゃったし…」

「なら、何回でもやればいい。それこそあいつが根負けするぐらいにな。」

確かに、Poppin', Partyの花さんやRoseliaの

紗夜先輩には技術では劣るかもしれない。

けど、瞬間の爆発力みたいなもの？それならば

朝日は負けていないと思う。

「お前と一緒にバンドを組んでた子達だつてさ…それを望んでいるんじゃないか？」

「そうや…そうやった。皆と約束したんや…頑張るつて…」

「だろ？送り出してくれた親御さんやその子達に見せてやれよ。お前がギターを弾く姿をさ。」

「…うん。」

「そんでよ…武道館に立て。」

「えっ!?!ぶ、武道館!?!」

「不可能じゃねえさ…あのメンバーならな。」

それに…お前は不可能を可能にしたギタリストなんだ。俺に…きつかけを与えてく

れた。

「ありがとう…もう一度頑張ってみる！」

「ああ、頑張れよ。」

これで少しは借りが返せたかな？

…いや、返しても返しきれないんじゃないか。

何せお前は…俺を闇の中から救いだしてくれたんだからな。

LAST PIECE

バンドリ ガールズバンドチャレンジ。

その名が示す通りガールズバンドを対象とした有志イベントだそうだ。

各地のライブハウスで予選ライブを行い

観客から投票を募り、その投票率の多かった上位

二バンドが決勝の武道館の地へと進める…

といったシステムである。

我らがR A Sには頑張ってほしいところではあるが、間違いないRoseliaが立ち塞がるであろう。

チュチュ様はブツ潰すだのといキってるが

ギター不在のこの状況では逆に

けちよんけちよんにされるのは

火を見るよりも明らかである。

早急にギタリストを確保しなければ Roselia どころか、上位にくい込むのも現状厳しいだろう。

打ち込みのギターでも RAS のレベルであれば

いけないこともないだろうが、やはり求められるモノは『生きた音』だろう。

彼女達もそうだが、個人的には Poppin' Party にも頑張っしてほしい。

…何にせよ激戦は必至だろう。

もちろん、俺自身ライブは可能な限り行くつもりだ。

「…と思ったんですけどねー。」

「…バイトで行けないんだ？」

「そうなんすよ、戸山さん。」

あーあ…まさかライブとバイトが

バッティングしちゃうとはな。

「しようがないんじゃない？」

「だよなー…てなわけで、俺の分まで楽しんできてくれよ。」

「お疲れーっす。」

はー…終わった、終わった。

今日も今日とて労働したぜ。

「おっと？」

チユチユから電話がきてた。

すぐに折り返す。

「チユチユ様ー？どしたん？アレか？寂しくなっちゃった？」

「…ロツカ・アサヒが来たわ。」

「しよーがねーなあ…俺が付き合っちゃるから…」

ってロツカ・アサヒ？あいつ来たのか!?

それで？…どうだった!?!どうだったんだよ!?!」

「ちよっ…落ち着きなさいってば!」

「…すまんすまん。で、来たってことは演奏したんだろ？どうだったよ?」

「以前よりはマシになっていたわ。及第点…といったところね。」

及第点…ね。

「じゃあ…合格?」

「一応ね…言うなれば、RASのギター(仮)といったところかしら。」

「(仮) か…いいんじゃないかねの？そっから始めてもさ。」

…というか俺…ポピパさんの予選ライブも朝日のRAS加入イベントも見逃したのか…なんて勿体無いことを。

「でも、まあ良かったじゃんよ…これでピースが揃ったな。」

「YES！ポピパもRoseliaもブツ潰してやるから

見ていなさい！」

よし、今度激辛ジャーキー持ってってやつからな？覚悟しとけな。

「そうか、ロックのやつRASに入れたのか。」

「みたいですよ。ギター(仮)らしいですけど。」

「(仮)？なんだそりゃ？」

「さあ…それにしてもすみませんね先輩…ライブに行けなくつ「良かったあー！ロック、RASに入れたんだね！」て…」

いきなり大音量の音声が割り込んできた。

心臓に悪いなあ…もう。

「ちよつ香澄！いきなり抱きつくんじゃないよー！」

あれ、香澄さんって…皆さんいつしよだったのかな?…ていうか抱きつくって?

「あー…えつと…?先輩?皆さんいつしよなんですか?」

「あ、ああ!まあな。」

「何かすみません…お邪魔して。」

「じゃ、じゃあまたな!だーっ!だから離れろって!」

…切れた。

「…楽しそうやなあ。」

何はともあれ、ようやく…か。

スタートラインには立てたわけだな。

朝日 六花のギターちから力が日の目を見る日もそう遠くはないわけだ。

「おはようさん、昨日は良かったな…朝日。」

「うん!ポピパさんのライブ…途中までやったけど…」

「そつちじゃなくて。」

「え?」

「RASのギター(仮)になったんだろ?」

「う、うん…：チュチュさんにはまだまだって言われちゃったけど…：」
「いいじゃんか…：（仮）から始めてみるよ。」

「そんで、いずれチュチュのやつに認めさせりゃいいんだよ。」

「そ、そうやね…：頑張らんと！」

「これで役者は揃ったわけだ。」

さて、これからどうなるか見物だな。

Turns into a Lock

「やっぱり、Roseliaは強いな。」

投票率はトップ…それも、2位のRASとはかなり差がある。いわば、独走状態だ。

さすがに知名度、実力共に申し分無いだけはあるな。

だが、それをこのまま許すチュチュ様ではないはずだ。

朝日が加入し、本格始動したRASもこのまま

終わると思えない。

ポピパさんは…今のところは順位圏外みたいだな。ただ、予選ライブは始まったばかり。

追いつけてくる可能性はまだあるわけだ。

しかし、上位二バンドつてのが惜しいところだな。RAISE A SUIREN、

Roselia、Poppin' Party…

是非とも彼女達が武道館に並び立つ姿を見てみたかった。

RASはMVを作成するそうだ。

確かに、客を取り込むのに一番手っ取り早い方法ではある。いつでも最短ルートを一
直線だな

あいつは。

そしてそれを即座に実行できるあたり、チュチュの腕の良さが窺える。

前にパレオからチラツと聞いたけど、音楽業界にコネを多数持つているらしい…マジ
でスペックだけ切り取って見ればくっそ優秀なんだけどね…。

「いらつしやいませー。」

「おう。」

「おや、ますきさんと…RASのギタリスト（仮）さんじゃないですか。」

「…ここでバイトしとったん？」

「まあな。ほら、座った座った。」

どことな〜く元気がないが…さっそく壁に

ぶち当たったか？

「どうだ？MVの進捗具合は？」

「それが…」

「…うまくいってないよ。」

「…うん。」

「ま、最初からうまくいったら苦労はしねーさ…俺も最初は怒られまくってたしな…」

「…優君も?」

「ああ、お前と違ってバンド組んだ経験もなかったし…探り探りやってくしかなかったんだよ。」

「なんか、この間のことなのにすげー懐かしく

感じるな。」

「…ですわね。」

壁にぶち当たるのは悪いことじゃない。

…コイツにはそれをぶっ壊す力があるはずだ。

「…ラーメンお待ち。」

「え、こ、こんなに!?!」

「おう。特別大サービスだ。」

「…こ、この量は…」

「何言ってるんだ…色々マシマシにしたラーメンはこの比じゃねーぞ? 何せ野菜で麺が見えなくなってるんだもん。」

「野菜で!？」

一回だけとあるラーメン屋に行ったけどあれは

エグかったな。

「いいから食え。腹が減っては戦はできんだろ?細かいことは食ってから考えろ。」

「…いい、いただきます!」

「ごちそうさまでした。」

「お粗末様。」

結局、食いやがったよ。

「朝日。」

「?」

「いつまでも(仮)やってんなよ?お前は俺と

チュチュが認めたギタリストなんだ。

もつと自信持て…な?」

「うん…ありがとう。」

「何だかんだ言つて、六花のこと心配してんだな。」
「それはないっす。」

電話の鳴る音で目を覚ます。

誰かは何となく予想はつくが。

「やっぱりか。」

モーニングコールにしちや早すぎませんかねえ…チュチュ様。仕方ないから出るけど。

「はいよー…どしたん？」

「MVが完成したわよ！今すぐに見なさい！」

「…えむぶい？ああ…MV！マジか、わかった。」

…つて、もう切れてるし。

相変わらずやな。

「どれどれ…」

さつそく視聴しますか。

「あつた。これだな。」

さーて、出来はどうかね？

「か…」

かつ…けえええええええ!!

S w e e t s ! E x c e l l e n t ! U n s t o p p a b l e だよ!
神? 神ですか!?! 神かよコレ。

鳥肌が止まらねえ!

これは神M V 認定間違いなしですわ。

さすがはチュチュ様…良い仕事するねえ。

そもそも、こんだけクセの強いメンバー達の

個性を噛み合わせてんだもんよ…冷静に考えて

凄いやな。

…各々の実力が高過ぎるってことは裏を返せば演奏を破綻させるリスクも孕んでいるわけで…

そういったリスクヘッジも踏まえて一つの演奏として見事に昇華させるのはもはやプロフェッショナルの域と言っている。

レイヤさん、ますきさん兩名はもはや言わずもがな…安定の力強さ。こんな人達がサポートやってたとかウソだろ。絶対喰われるわ。

パレオはかわいさに騙されがちだが結構暴れる。キーボードを背面弾きしてたのを見た時はマジでこの子やべえ…と思ったのは記憶に新しい。

指鉄砲に一瞬ドキツとしたのは内緒な。

そして、朝日。

あいつ…いつちよ前にツーステなんぞ刻みおって…しかし、眼鏡とシュシュ(?)を外しているからなのか…

雰囲気がいいつもと段違いだな。

「…いっしょやん。」

最初の演奏にしては及第点つてとこだな（何様）

いや、しかしかつけえ。

「優！朝から何騒いでるの!?!」

「あ、すみません。」

どうやら声に出てたようだ…はつず。

「そうか、（仮）は取れたのか。」

まあ、順当な結果だわな。

「心配させやがって…最初からやれよな。」

「ごめん…心配してくれてたんだ…。」

「あ、いや…言葉のあやだよ…お前がしつかりせんとRASの良い演奏にも繋がらんだろ?。」

「はあ…優って本当に素直じゃないよね。」

「いやいや、戸山さん…そんなわけないじゃないですか。」

「何で敬語なの?。」

「それにしても、Lo^ロck^クとは…御大層な名を頂戴したもんだな。あ、ポピパさんにも呼

ばれてんだっけか。」

「チュチュさんには鍵のことだって…」

なるほど、RASの鍵になれと…そういう

メッセージが込められてるわけね。

約半年か…長かったな。

「頑張れよ…ロツク。」

「う、うん！頑張る！」

交わる二つのR

「ポピブイ…だと…？」

それは戸山、宇田川、ロックの仲良し三人組が

楽しみに話しているのをチラッと聞いたのが

始まりだった。

え、ちよ…何それ？

ポピブイって…ポピパさんもMVを作ったってこと？俺、何も聞いてないんだけど？

三人娘に聞いてみれば案の定でした。

ポピパさんのMV、ポピブイなるものが作成されていたそうさ。

早速視聴した。

「俺、ハブられたんか…？」

市ヶ谷先輩：俺に声ぐらいかけてくれても…

あれ、なんだろう…画面がよく見えねえや…

おかしいな…動画の出来は物凄く良いはずなのに。

とりあえず、全部ブツ込んでみました的な動画だったのだが、うまくまとめられていた。

ウサギとかチョココロネとかちよこちよこ

よくわからないものも映りこんではいたが。

だからこそ…

「俺も…俺も入れてほしかった…」

「げ、元気出して？」

「ロック…お前何最後ちやつかりセンターに

居座ってんだよ…一番おいしいポジションじゃねーか…ずつつる…。」

「え、ええつと…」

「…それはそうと、御宅のプロデューサー

ついに Roselia に宣戦布告しやがったな。」

文字通り、チュチュが Roselia に対し宣戦布告とも取れるような内容の動画をアップしていたのだ。

内容は早い話がRASとRoseliaの直接対決。それがdubにて行われる。

…いつの間にもそこまでこぎつけたのやら。

しかし、思ったよりも実現するのが早かったな。

チュチュも動画内で言っていたが、RASと

Roseliaの頂上バトル。正直楽しみではある。

「頑張るのはいいけど…ムチャだけはすんなよ？ロック。」

「うん。」

「宇田川、RASは一筋縄じゃないぞ？」

「うん！あこ、頑張る！」

と、コイツは敵が強ければ強いほど燃えるタイプだったか。

「優はライブに行くの？」

「そりゃ、もちろん。」

ロックの初舞台だし、見届けないわけにはいかない。

「ああ？」

日菜先輩から電話だ。

随分と珍しい…イヤな予感しかしないけど…出るか。

「もしもし?」

「あ、もしもし!優君?」

「はいはい、どうしました?」

「んーとねー、おねーちゃんがチュチュちゃんと話したいことがあるらしーんだけど、アボなしはマズイでしょって話になつたんだよね!」

「…なるほど。そういうことなら、俺から

チュチュに話つけときますよ…ていうか

ご一緒してもいいですか?」

「うん!ーいーよ!」

「それじゃあ、待ち合わせ場所決めて

またあとで合流しますか。」

「うん!ーじゃあねー!」

…あーあ、終わったなアイツ。

まあ、あんだだけ煽りまくつたんだ…当然の結果か。

チュチュよ…自業自得だ。

残念ながら俺にはどうすることもできん。

「すみません…手間をかけさせてしまつて。」

「いえいえ、気にしないでください。俺もあいつには用事があつたんでちょうど良かったですよ。」

俺は紗夜日菜先輩と合流し、チュチュのいるスタジオへと向かつていた。ちなみにチュチュには

連絡済である。

「いや、しかしすみませんね…ウチのプロデューサーがごちやごちやと好き勝手に…」
「いえ…あのような挑発は受け付けなければ良い話なので…それを…湊さんが…」
そう。

そこがわからないのだ。

紗夜先輩の言うとおり相手にしなければそれで

済む話なのに…ましてや、RoseliaはOver the Futureライブなるものが控えてるといふ話だ。

それならば、そもそもこういったバンドリというイベントに参加すること自体、スケジュール的にもマイナスにしかないのでは？とも思う。

が、そんなことがわからない湊さんではないだろう。

何かを意図して今回の話も受けたんだとは思うけど。

「……………」

湊さん？

紗夜先輩には何も言っていないのかな？

その意図みたいなのが伝わっていないみたいなんですけど…紗夜先輩見るからにご立腹なもの。

あの人も言わなさそうだからなー…言葉足らずというか。

…とりあえず、話題を変えようか。

「あ、あー…でもあれですな…姉妹揃ってギター

やってるなんて仲がよろしいというか…」

「……………」

…あれ？何か微妙な顔された？

何かダメだった？

「…星川さんはいつ頃からギターを？」

「え、あ、俺ですか？」

急に話題を振られたので驚いた。

「小学校あがるぐらいの頃からですかね…中三あたりからちよつとブランクがあつたんですけど…：…なんやかんや今でもやってます。」

「そう…ですか。道理であのような素晴らしい

演奏ができるはずです。」

ベタ褒めやんか。なんか恥ずかしい。

「いやいや、俺にはギターしか取り柄がありませんから…」

「とうちやーくー！」

いつの間にか着いたみたいだな。

何も起こらず穏便に…：…いくわけはないか。

「いらつしやいませー！」

パレオが出迎えてくれる。

「ん…あ、レオナちゃん！」

「レオナちゃん？知り合いますか？」

「うん！フアンの子でいつつもライブに来てくれるんだ！」

へえー…パレオってパスパレのファンだったのか。

「覚えていてくださって光栄です！ですが今は

パレオと申します。」

…改名したのかな？

「Welcome！サヨ・ヒカワ！ヒナ・ヒカワ！」

出たよ、ちびっこプロデューサー。

数分後にはそのイキリ顔が涙でびしょびしょになることだろうよ。まあ、任せとけ。

何かあっても俺が納めてやっからよ。

数分後。

「あー…ポテトがうまいわ。」

「お口にあつたみたいで何よりです♪」

「んー最高。しかし、パレオがパスパレファンだったとはなー…」

「はい♪…とところでユウさん…日菜ちゃんとお知り合いましたね。」

「まあな。先輩後輩ってただけけど。」

「う、羨ましいですー!」

え? 数分前の啖呵切ってたお前はどこ行ったのかつて?

だつてねえ…怖いんだもん。

肉食動物が睨み合ってる中わざわざ入ろうとする人っている?

…いないっしょ? そういうこと。

それにしてもこのポテトうめえ。

曰葉先輩も大満足だ。

「曰葉、帰るわよ。」

「え、もうー?」

どうやら話し合いは終わったようだ。

…良い結果にはならなかったみたいだな。

「あ、ちよいとお待ちを二人とも。俺も行きます。」

「ユウ! あなたも当然来るわよね? RASとRoseliaの頂上バトル!」

「あたり前だろ。だから半端なライブはするんじゃないぞ?」

「Of Course!」

それならいい。

「星川さん、ありがとうございます。」

「いえいえ、俺何もしてませんし（事実）。」

「…絶対に負けません。」

敵愾心MAXだなあ…：チュチュよ、怒らせてはいけない人を怒らせたな。

「RASは手強いですよ。」

「相手が誰であろうと…：私は私の演奏をするまでです。」

あくまでも冷静に、目の前の紗夜先輩は静かに

闘志を燃やしていた。

どちらか勝つのか…：まったく想像がつかねえや。

頂上バトル。その時は確実に近づいていた。

頂上バトル開戦

ついに迎えたRASとRoseliaの決戦の日。

会場入りした俺は来ているであろう

戸山やポピパさん達を探していた。

一人でライブつてのも寂しいし。

早いところ皆さんと合流して：

「あ、優くん！」

…ダメみたいです。

「やっぱり来てたんすね…日菜先輩。」

この人がいないわけがないか。

同じパスポレの大和 麻弥さんも一緒だったようだ。

「どうもですー！」

「こんばんは。」

なんやかんや学校では見かけるけど

こうして話すのは初めてだな。

「楽しみだねー！」

「紗夜先輩気合い入ってましたからねー。でもRASは強敵ですよ？ なんとたつて精鋭揃いですから。」

とはいえ、入ったばかりのロックがいる分

Roseliaにちと分があるか。

「星川さんもあのメンバーの中で演奏したんですよね？ それは凄いことですよ！」

「そ、そうですか？」

「ジブン、そのライブは行けなかったので…

もの凄く後悔してるんすよ。」

麻弥さん、RASのファンっぽいな。

…てか、敬語キヤラだったのね。

「キングの生演奏、楽しみます！」

キングって…ますきさんか。

なるほど、同じドラマー同士なものな。

「あの人には何回も泣かされかけましたけどね…半端なく音数入れるし、ついていくの

「がやつとでしたよ。」

「ますきさんはおかずが多いですからね……」

でも、それについていけてること自体が凄いことなんですよ？」

麻弥さんあんま褒めないで……褒められたことなんて滅多にないからめっちゃむずかしい。

「いや、そんなことは……でも、やつぱり同じドラマー同士通じるものとかがあつたりするんですか？」

「はい……たくさん勉強させてもらつてるっていうか……ジブンの憧れつす！」

なるほど……憧れね。

良かったつすね、ますきさん。

狂犬と呼ばれたあなたを尊敬リスベクトしてくれる人もいたみたいですよ。

『……こんばんは。Roseliaです。』

最初はRoseliaか。果たして今日はどんな演奏を

魅せてくれるのか。

始まったのは聴いたことのない曲だった。

しかし、開始数秒でわかる。

「やっぱり、すげえな。」

Rose liaしか勝たん…とか言っちゃまいそうだわ。
見事に仕上げて来てる。

練習漬けの毎日らしいが、疲労の影響で

パフォーマンスが落ちているといった様子も

まったくない。

マジで何者だよあの人達…。

チユチユのやつ…よくもまああんな自信満々に

吹っ掛けられたもんだな。

これを越える演奏ができるのか…お手並み拝見

させてもらおうじゃないか。

『 G t^{ギター}! L O C K^{ロック}! 』

さあ、デビュー戦だ…気合い入れろよロック。

このライブの勝敗はお前にかかっていると言っても過言ではないからな。

思えば半年ちよつと…よく諦めずに頑張ったな。

…負けるんじゃないぞ。今日のお目当ては
やっぱりRASなんだからな。

「キングー!!」

それはそうときつきから麻弥さんのテンションがヤバい。

演奏するのはMVの曲か。

しかし、加工されたMVとは違い、リアルな

サウンドはより感情に訴えかけてくるものがある。

こっちもキレてるな。

ロックは初ライブだしさすがに緊張しているのか少しぎこちない部分もあるが、他の
皆がうまく

カバーしている。やればできんじゃないの。

言うだけのことはある。

これならRoseliaにも…

『皆！残ってくれてThanks！投票結果を発表するわ！』

ライブも終わり、いよいよ決着の時が訪れようとしていた。

チュチュのやつ…勝つのが当たり前前って顔してんな…正直言って甲乙つけがたい内

容だったが。

設置されたモニターに今まさに投票結果が
映されようとしていた。

さて、勝者はどっちかね？

勝者は

『YES！YES！YES！YES！』

響いたのはチュチュの声。

勝者は…

「…RAS。」

僅差の接戦だった。

どちらが勝ってもおかしくない内容だった…

と思う。

「RAS！RAS！RAS！RAS！RAS！」

会場はRASコール一色となった。

「ん…なんだかな…」

票を入れた身としては嬉しいはず…なのだが…

どこか喜べない自分がいた。

こんなものが…果たして勝利と呼べるものなのか？

「いやー凄かったつすね。」

「ああ…つてお前、いつの間にいたんだよ。」

「たった今ですよ、市ヶ谷先輩。」

日菜先輩達と別れ、なんとかポピパさん達を

見つけ出して合流することができた。

「皆さんどうも。」

戸山やポピパさん達の他、Aftergrowの皆さんも

一緒だったようだ。

「RASが勝ちましたね。」

「あんまり嬉しそうじゃねーな…RASに

票入れたんだろ？」

「ん…なんていうか複雑です…素直に喜べないっていうか…」

「ねえ、あのチュチュって人…何であんなにRoseliaに拘ってるの？」

美竹先輩^{思わぬ方向}から質問が飛んで来た。

気のせいかちよつと怒ってらっしやる？

「…一言で言うのと、湊さんにプロデュースを断られたから…ですかね。」

「プロデュースを断られたからって…」

「それだけでかよ?」

市ヶ谷先輩が呆れたように言う。

「残念ながらそれだけなんです…」

「なるほどね…ありがと。」

「蘭はね〜なんだかんだRose liaのことが

気になってるんだ〜。」

「モカ!」

「そういうことですか。」

意外だな…美竹先輩がねえ。

「違うから。」

なるほど、この人もツンデレなのね…了解了解。

「それにしてもロックのやつ…初のライブに

してはなかなか良かったっすね。」

ブツ倒れて裏で休んでるみたいだが。

「うん！凄かった！」

香澄さんが同意してくれる。

「それもこれも、皆さんがロックの背中を押してくれたおかげです…あいつ、ポピパさんに

憧れてバンドやりたいてって言ってるね…

ずっとメンバー探してたんですよ。」

「ロック、優に感謝してたよ。いつも心配して

くれてるから頑張らなきゃ…って言ってた。」

「え…」

花さんから思いもよらぬ発言が飛び出す。

「そうですか…あいつ、そんなことを…」

バカだなあ…俺なんか何もしないだろうに。

「ポピパさんのライブも楽しみにしてますよ。」

「本当!?来てくれる?」

「勿論、可能な限り行きますよ。」

「ありがとうー！いっぱいライブするね！」

元気がいいなあ、香澄さんは。

越えるべき壁の高さを実感したはずなのに

気落ちした様子が微塵もない。

あくまでも自分達の音を信じてスタンスか。

どんな困難にも揺らがない強さ。

それがPoppin' Partyの強みなわけね。

「とにかくくにも、武道館へ行くにはどちらかを引きずり降ろさなきゃいけませんよ？」

「わ、わかってるよー！」

Rosealiaだつてこのまま終わると思えない。

今日の敗戦を糧に必ず復活するはずだ。

…それに引き換え、RASの方は若干不安だな。

チュチュのやつが今日の勝利に浮かれて

天狗にならなきゃいいけど…まあ、あの様子じゃ無理な話かな。

勝敗の結果とは対照的っつーか…

こりゃ、釘さしといたほうがいいかもしれないな。

「ポピパさん達も、チュチュに何かされそうになつたら言つてくださいね。俺が懲らしめてやりますから。」

「え、えーと、乱暴なことはしちやダメだよ?」

りみりん先輩(だっけ?) : ブツ潰すつて言われてるのにも関わらずなんて心が広いんだ。

俺ならやられる前にやるね。

先手必勝つて言うじゃん?

大ガールズバンド時代を揺るがすであろう

頂上バトルはRASに軍配が上がった。

ロツクもデビュー戦にしては上々の出来。

不安材料はないように思えるが:

どこかで落とし穴というものは必ずある。

その時、RASはRASでいられるのか:

俺は堪らなくそれが怖かった。

かけがえのない人達と

ライブから数日。

RASの勢いはとどまるところを知らず、ついには

Rose liaを抜き去り票数トップの座に踊り出た。

Rose liaとRASの武道館行きは揺るがないものとなりつつあった。

そうになると、気になるのはポピパさんだな。

：ちよつとそつちの方に顔出してみるか。

というわけで、やって参りました市ヶ谷先輩の家。

万実さんに案内してもらい、中へ入れてもらう。

ちよつと皆さん集まっているそうだ。

「「「「おー」」」」

何だか一致団結してるみたいだな。

決起集会的なのをやっていたのだろうか。

「気合い入ってますねー。」

「うわあっ！って、なんだ…優かよ。」

「こんばんは。アポなしですみませんね。」

ケータイの充電が切れちゃって。」

「スパイ…とかじゃねーよな？」

「そんなわけ…ポピパさんのことが気になったんで、ちよつと来てみたんですよ。」

「いいけど、邪魔はするなよ？」

「はーい。」

「まあまあ、有咲。せつかく来てくれたんだし…」

これ、ウチのパンなんだけど、良かったら食べて？」

「いいんですか？じゃあ、お言葉に甘えて…」

ドラムの沙綾先輩がこれまた美味そうなパンを

出してくれた。

「沙綾ちゃん家のパン、美味しいよ♪」

マジか…？りみりん先輩のお墨付きかよ。

絶対美味いだろこんなん。

「いただきます。」

「どうかな？」

「…すんげー美味いっす。」

パン食っただけなのに感動した。

今まで食ったパンの中で一番美味いわ。

冗談抜きで。

「家がパン屋さんなんですか？」

「うん！商店街にある山吹ベーカリーってところ。」

商店街か…：今度行ってみよう。

これは一度食ったら忘れられなくなるな。

「…つと、そういえば、自己紹介がまだでしたね。」

「別にいいだろ？みんな知ってるよ。」

「いやいやいや！先輩がお世話になってるんですし、是非ともご挨拶させてくださいよ。」

「なってねえ！」

一つ咳払いをして立ち上がる。

いや、緊張するなー。

「…えー、先輩の幼馴染やってます…」

星川 優といいます。1月27日生まれの水瓶座。

血液型はA型。明太子大好きです。嫌いなものは納豆ですかねー…趣味は昼寝とギターかな。

あとは…そうだ！好きな女性のタイプは…」

「あー！もういいだろ！そんなことまで聞いてねーよ！」

ちよつ…ここからだつたのに…

「納豆、私もダメなんだー…」

「わかります？香澄さん。あのネバネバがちよつとねー…」

「引っ越して来たんだっけ？」と沙綾先輩。

「ええ、3月の終わり頃に越してきました。」

「本当にびつくりしたけどな…お前がまたこつちに來てるなんて…それにしても、よく羽丘に入れたな。」

「こっを見えて、A判定だったんですよ？」

あの時はやけくそで猛勉強してたつたのもあるけどな。

「そんなわけで、先輩ともどもよろしくお願いします。」
「よろしくねー！」

「ああ、それと…香澄さんの妹さんにはだいぶ
お世話になっております。」

「明日香ちゃんに迷惑かけんなよ？」

「はい。」

「あっちゃんと仲良くしてねー！」

「勿論です。」

「じゃーねー！有咲！」

「ああ。」

「すみませんね、お邪魔して。」

「ホントだよ。」

「また、来ます。」

「来んな。」

時間も遅くなってきたので、帰宅することに。

「有咲ちゃんと仲良しなんだね。」

帰宅途中にりみりん先輩からそんな言葉を

投げかけられる。

「そうなんですよ。もうね、昔は毎日のように遊んでましたよ。」

「そうなんだー…昔の有咲ってどんな子だったのかな?」

香澄さんのほうからも質問が来る。

いいですね…どんどん聞いちゃってください。

「すごく大人しい子でねー…人見知りっていうか…俺以外の人と遊んだことなかったんじゃないかな?あ、小さな頃の写真…良ければ今度持ってきますよ。」

「ええっ!?!見たい見たい!」

「…先輩のピアノの発表会とか、色々行ったりもしましたね…けど、親父の仕事の都合で引越さなきゃならなくなっちゃいました…」

「それで、離ればなれになっちゃったんだ…」

沙綾先輩がまるで自分のことのように呟く。

「でも、また会えた…優と有咲。」

「そう…ですね。」

そう、花さんの言うとおりで。

運命つてのも捨てたものじゃない。

「ずっと心配でした…俺がいなくなっても大丈夫かなって。」

けれど…

「けれど、ポピパさんの主催ライブでその心配は吹き飛びました。先輩のあんな楽しそうな顔…

初めて見ましたよ。ああ、かけがえのない人達と出逢えたんだなって…幼馴染としてお礼を言わせてください。」

「ううん、有咲ちゃんには私達も助けてもらってるから…」

「頑張ってくれてるもんね…有咲。」

「結構ガチでしたもんね先輩…武道館への道！」

とか紙に書いてたりして。」

「有咲、ずっと前から言ってたから…みんなで

武道館に行きたいって。」

花さんからこれまた意外な事実が。

「そうなんですか…ずっと前から。」

本当に…本当に変わったな。

変えられたつてのもあるけど、他でもない

市ヶ谷先輩が一步を踏み出した結果でもある。

「…改めて、お礼を言わせてください。皆さんのおかげです…先輩のことも…ロツクのことも…」

そして、俺自身…最後の一步を踏み出す

きっかけをくれたことも。

「武道館…立ってくださいね。そんな時は必ず

行きますから。」

「うん…頑張る!」

そう言いきる香澄さんを見て、この人達なら

なんやかんや武道館行っちゃうんじゃないかな?と思う俺であった。

何も知らない

「Roselia 完全復活！OVER THE FUTURE LIVE

大盛況！…だとさ。」

「…それがどうしたの？」

そう不機嫌そうな顔でこちらを睨み付けるはRAISE A SUIRENプロデューサーのチュチュ様。

大ガールズバンド時代に終止符を打たんとする

背丈と目標が釣り合っていない困ったちゃん。

「…悪かったわね、困ったちゃんで。」

…また、声に出ていたみたいだ。

「…そういえばさ、何気なくチュチュって呼んでるけど…本名は別にあるわけだろ？なんて名前なんだ？」

「…何でもいいでしょ…それで？Roseliaのことを言うために来たワケ？」

「いや、まあぶつちやけ暇だったんで来ただけ。ロック達は何か知らんけど、温泉旅行に

行ってるみたいだし？お前は断ったみたいだからいるかなーっと思つて。」

「あなたもいけば良かったじゃない。」

「やだよ。人多いみたいだし、温泉イベントつてことは万が一にも俺が社会的に抹殺される可能性もあるわけで…デメリットのが圧倒的にでけえ。」

Poppin, PartyにAftergrowとRoselia…あとは、ハロハピさんの大所帯だそう。RASからはレイヤさん、ますきさん、ロツクの三人が行っているみたいだが。

この中に混ざる勇氣は正直俺にはない。

しかし、パレオもいないとは珍しいこともあるもんだ。

「そんなわけで、暇だし忠告がてら来たつてわけよ。お前のことだから手を抜くことは一切ないとは思うけど…：氣をつけるよつて話。」

「No Problem! Roseliaが進化しているつて話でしょ？それを言うならRASだつて進化してるわよ。差は縮まるどころか広がっているの！」

「わかった…：けど、根詰めすぎんなよ？」

「ブツ倒れでもしたら、それこそ本末転倒だぜ？」

「わかつてる！」

わかつてんのかは怪しいところだが…指摘したらしたで怒られそうなのでここは

黙っておいた。

「こんなところで躓いてなんかいられない…」

「ちよつとき、焦りすぎなんじゃねーの?」

細かいことはよくわからんが、コイツのやつてることは多岐に渡り、なおかつ膨大つてことだけはわかる。

「こんなじゃ、いずれ…」

「何でそんなに最強つてのに拘るんだよ?」

「…あなたには関係ないでしょ。」

ものすごく刺々しいな…何をそんなにカリカリしてんだか。

にしても、関係ない…ね。いつ聞いても効くなあ…その言葉は。

「…お前の頑張りは認めてるよ。だからこそ

もつと周りを頼れよ…な?」

「メンバーにはそんなこと求めてないわ。ただ、私の求める音をカタチにして奏でればいいの。」

「そんなんじゃねーだろ…バンドつて。」

「何よ…Poppin, Partyみたいな温いお友達ゴツゴツでもして、馴れ合えとでも言うの? ジャパニーズ」

お得意の友情ってヤツ？そんなモノ不要なのよ！」

おっととつと？今のは聞き捨てならねーなあ。

とはいえ、ヒートアップしてるコイツ相手に

俺までキレてちやキリがない……ここは冷静に。

「その不要なモノつてのがバンドつてのを

形成していくくんじゃねーの？俺はバンド経験が

ほぼないに等しいからわかんねーけどさ……

まるでプロデューサーの手足みたいだな……そんなん寂しいじゃんかよ。」

「Shut Up. 何も知らないクセに適当なこと

言わないで！」

「……………」

静寂。

1分程それが続いただろうか。

「……そうかよ。」

そうだ。その通りだな。

俺は何も知らない。

「……確かにな。お前の言うとおりで。お前のこと知ったつもりでいたけど、お前の名前

も…お前が音楽をやる理由も…俺は何も知らなかったんだな。」

「……………」

チュチュはちよつとばかり冷静になったよう

黙って俺の話を聞いていた。

「…俺さ、ちよつと前までは二度とギターなんかやらないって心に決めてたんだ。」

「…どうして?」

「人を傷つけたから。手を差しのべれば救えたはずだった…助けを求める手を俺は振り払っちゃまったんだよ。」

ギターを見ると思い出してしまう。

その傷は呪いのように俺を蝕む。

だから、遠ざけた。

罪のない相棒を。

「どうでもよくなつた。他人も自分も。一人でもいいと思つてた。でもな、現実はその許してくれなかった。何でか知らんけど、俺にお節焼くやつとか、話しかけてくるやつがたくさんいてな…それも悪くないなーと思ひ始めてたんだ。」

戸山に宇田川にクラススの連中…日菜先輩 e t c .

そして…

「ある時…一人のギタリストの演奏を聞いて…俺はそれに心を奪われた…純粹に上げあって思った。その時は気づかなかったけど…冷めてた心が熱を帯びたんだろうな。」

「…ようやくわかった気がするわ…優があの子を

推す理由が。」

「…それから、Poppin' Partyの主催ライブに行つて…バンドつていいな…つて思ったよ。絆つてのを感じた。」

「確かに…あれはちよつとだけ感動したわ。」

素直じゃねえの。

「そして…お前が現れた。」

「……………」

「何だこのチビは…それがお前への第一印象だった。ゴツコ遊びなら余所でやれよと…でも、違った。お前は本気だった。R・I・O・Tを聴いて一瞬でわかつたよ。ガールズバンド時代を終わらせる…半端じゃない覚悟と実力を備えてるってな。」

大言壮語は簡単に言える。

しかし、それを実行するとなると果たして何人の人間が動き出せるのだろうか？

「…楽しかったぜ？一夜限りだったけど…」

dubでやったあのライブは…俺はお前に
出会えて良かったと思ってるよ。」

…少しばかり、喋りすぎたかな。

「…だから、気が向いたらでいい…お前のことも
教えてくれよ。」

「…Sorry。少し言い過ぎたわ。」

「らしくねーな、気にすんなよ。」

「…どうして、私に話したの？言いたくないことだったはずでしょ？」

「さあ、何でかね？相手のことを知るには

まず自分のことを知ってもらってから始めろって親父に言われたことがあるから

や…」

「…そう。」

「つーわけで、邪魔したな。あ、ジャーキー置いてくから食つといてくれな。」

ていうか、食生活…いい加減何とかしろな。

「そーいや、両親は海外にいるんだっけか？」

寂しくねーの?」

「…別に。」

「ふーん、そっか。寂しくなったら言えよ?

俺でよければ相手してやるから。」

そう言い残し、スタジオを出る。

外に出るとちやうどよくパレオとすれ違った。

「お帰りですか?」

「ああ、暇だったんでちよつと邪魔してた。」

「実はユウさんに少しご相談したいことが…」

「相談?」

「…へえー、チュチュの誕生日か。」

「はい♪なので、ユウさんにもご協力いただきたいと思ひまして…」

「そういうことなら、はりきつちやうよ俺。」

「ますきさんと一緒にケーキでも作っちゃるか。」

「ありがとうございます！」

「あ、そうだ…パレオ。」

「はい？」

「あいつ、無茶しないようにさ…支えてやってくれよ。」

「もちろんです！」

「ん、さすがはチュチュ様のキーボードメイド。」

「パレオがいれば心配はいらないな。」

「お任せください♪」

「…って言ってたじゃねえかよ。」

「それが、どうして。」

「どこにいるんだよ…パレオ。」
どうして、いなくなっただよ。

不穏な予感

パレオが失踪した。

どうしてそうなったのかはまったくわからない。

俺のほうからもパレオに何度か電話を試してみたのだが全て繋がらなかった。

そのうえ折り返しもない…そうなるとパレオが

意図的にそうしているという説が濃厚になる。

チュチュに聞いても知らないっ！と

怒られる始末。

「知らないってどういうことだよ？」

メンバーのスケジュール管理とかもプロデューサーの仕事だろうが。ましてや、パレ

オだぞ？

お前が知らないわけ…」

「知らないっいたら知らないのー！」

ちっ…こいつ…。

こうなったら何言っても火に油注ぐだけか…

他の三人もまったく心当たりがないみたいだし…さて、どうしたものかな。

「…悪い予感が当たっちゃまったな…。」

できればその悪い予感は当たってほしくは
なかったのだが…

パレオ失踪から遡ること数日前。

「Poppin, Partyです！」

ただいまPoppin, Partyのライブ中。

何でも彼女達は3Weeksライブって名目で毎日

ライブをやるみたいだ。

とんだハードスケジュールだな…ブツ倒れたりしないか心配である。

毎日ライブってことなので毎日行きたいところではあるが、残念ながら現実的に無理な話だ…

なんとも勿体無い。

「えっ…dubでやるんですか？」

「う、うん…マッスーがdubでやろうって。」

そんな中、Poppin' PartyとRASがdubにてライブを行うという話を沙綾先輩から聞いた。

かねてより行こうと思っていた山吹ベーカリーさんにお邪魔中である。

dubでライブか…確かに現状最も有効な手段ではある。キャパが多いと入る票もおのずと多くなる。

ただ…相手が相手だ。

RASが相手となるとほとんど票が喰われてしまう可能性がある。それゆえ、どこのバンドも

RASとは対バンを避ける傾向にある。

必然的にRASのワンマンになってしまうというわけだ。

「それはまた…ハイリスクハイリターンってヤツですね。」

「…だね。」

大博打も大博打だ…そういうのはキライじゃないけど。

そうなると…チュチュがまた無駄に煽るんだろうなあ…あれからあいつとはなんとなく顔を合わせづらくて、会っていないけど。

「チュチュのやつがまた何か言うかもしれないけど…気にしないでくださいね。お仕置きしてやりませんで。」

「あはは…あんまり乱暴なことはしちゃダメだからね？」

それはたぶん無理な相談だなーと思いつつ、会計を済ませて店を出た。

しかし…

「…買いすぎたな。」

あまりに美味しそうなパンばかり並んでたもんだから…まあ、いいか。

「ポピパさんとdubでやるんですってね。」

「ああ、今から楽しみで仕方ねえ！」

燃えてんなーますきさん。

俺も楽しみだけどさ。

あ、今バイト中ね。

「チユチユはまたブツ潰してやるわ!とか言ってるんでしようね…まったく。」

「気合いが入ってるのはいいことだろ。」

「そうなんでしょうけど…なーんか嫌な予感がするんですよね…」

「なんだよ?嫌な予感って。」

「うまく説明はできないんですけど…なんとなく、そんな気がして…」

「気にしすぎじゃねーのか?」

「だといいんですが…」

「それより、優。お前にちよつと手伝ってほしいことがあるんだけどさ。」

「手伝ってほしいこと?」

「ああ。」

何でも近々、花さんの誕生日だそうで、プレゼントとか何だとかを色々と計画しているそうなの。

「そういうことなら。」

「頼んだぜ。」

誕生日の日付けを聞いて気づいたけど、もう
冬なんだな。

月日が経つのがって本当に早いもんだと

実感する。

ジャーネーの法則とかってあるけど、あれウソなんじゃないかって思うわ。

パレオは何処へ

RASとPoppin' Partyのdubでの対バン。

票数はRASが圧倒的だった。

ただの対バンならば手放しで喜べるのになあ…

どっちも応援している身としては

やはり複雑なところではある。

こればかりは票数という括りがある以上

仕方のない話なのだが。

「んじゃ、撮りますよー。」

来る12月4日。花さんの誕生日である。

ロックはスタッフとして、俺とますきさん

レイヤさんは手伝い兼観客として

GALAXYに来ていた。花さんが自分の誕生日を忘れているという珍事案があつたものの滞りなくライブも終わり現在に至る。

写真を撮り終わると同時にランキング更新のお知らせが来たようで、ポピパさんは上位圏内に入ったようだ。

ライブしまくつた甲斐があつたみたいだな。
これなら…

「あ…」

レイヤさんが小さく呟いた。

何があつたのか理由はすぐにわかつた。

「RAS…順位が落ちてる…」

そう…Roseliaが一位に浮上した。

とはいえ両者にそこまで差はなく、一度のライブでひっくり返るような票数ではある…

…と、アイツはそうは思わないだろうな。

その証拠にレイヤさん達は即招集がかかったようだ。

名残惜しそうではあったが、そのまま三人とは

別れることに。

「まさか、Roseliaがひっくり返すなんてな…」

市ヶ谷先輩が呟くが、俺はなんとなくそうなる

気がしていた。OVER THE FUTURE LIVEの影響は

計り知れなかったってわけだ。

…武道館への切符争いはより一層激しくなるだろうな。そうなってくると、心配なのはやっぱり

ポピパさん。ただでさえ、ライブハウスを梯子しているつてのに…これ以上頑張ると本当に誰かがブツ倒れかねない。

市ヶ谷先輩がここが正念場だぞ…と皆さんに

発破をかけている手前、口は出せないが。

その裏で、抱いていたイヤな予感が現実になろうとしているということに俺はまだ気づいていなかった。

期末試験…それは避けられぬ運命であり、高校生にとつては最大の試練である。くなればいい…と思う人間が大半を占めるだろう。かくいう俺もその一人だった…

そう…以前までは。

だが、今の俺は違う。

復習も体調管理（前日睡眠時間10時間）も

バツチリである。教室に入ると、私やつてない…やばいわーなどというやり取りがそこかしこで繰り返り広げられていた。

おいおい、仮にも進学校だろうにここは。

そりややばいんでねーの？

おっと、ここにも一人。

天下の大魔姫あこ様がヤマ勘だなんだと

おっしやっている。その言葉が出てくる時点で

不勉強がひしひしと伝わってくるな。
個性的にも国語ができないとマズイのでは？

「150ページからの古文はおそらく出るから

やつといたほうがいいぞー…ほら、教科書開いた。」

「あ、おはよー！」

「おはよう。」

「おっす。」

「…はあ。」

おーい、一人超絶ため息ついてるけど…

お前のことだぞロック。

RAS内で何かあったに千円。

戸山曰くさつきからこんな調子なのだとか。

「…一応、聞くけど何かあったのか？」

「あ、おはよう。」

気づいてなかったんかい。

「どうせまたチュチュのやつが何かアホなこと

言い出したんだろ？」

「…う、うん。」

「ほっとけよ。あいつの痲癩は今に始まったことじゃないだろ。いずれおさまるって。」

「…だといいやけど。」

話を聞くに Roselia に抜かれた影響か チュチュの

横暴っぷりは加速度的にひどくなっていたらしい。

すべてチュチュの指示に従うこと。

そんな条件を出してきたそうさ。

当然聞き入れられるわけもなく、ますきさんは

帰ってしまっただけ。

そりゃ、そうなるわ。

「つたく、何をやっつてるんだか…」

そんなことやつてる場合か…

外部の俺があまり口を出すことじゃないのかもしれないが…今回ばかりはちよつとな。

「…出ないな。」

チュチュに直通で電話をかけると確実にケンカになりかねないので、パレオを経由したのだが…

立て込んでるのか？様子を聞こうと思っただけけど。

頼むぜ…今日もライブがあるんだからな。

悪い影響がモロに出ないようにしてくれよ…

しかし、そんな俺の心配は無情にも打ち砕かれることになる。

「えっ？」

いよいよ、ライブが始まろうという時。

即座に違和感があることに気づく。

そう…パレオがいないのだ。

どういうわけだ、こりゃ。

そんなことはお構い無しとばかりに演奏が始まる。

おいおい…何のアナウンスもなしかよ？

どうしたんだ？パレオ…お前なら例え這つてでも火の中水の中ライブに来るはずだ

…

何かあったのか？

演奏のほうはというと…忸度なしに今までで一番酷いものだった。パレオがいないのを抜きにしてもだ。まるでバラバラだ。

「なにしてんだよ…」

バラバラなのを纏めあげるのがプロデューサーの

役目だろうが。

おかげで、続くはポピバさん達の演奏だというのに、あまり耳に入らなかった。

「…よう。」

「…来てたのね。」

「そりやあな。」

ライブ後。一人帰ろうとするチュチュを呼び止めた。

あまり口出しするつもりはなかったが、事情が

変わった。

「…パレオはどうした？電話かけても繋がんねーんだ…折り返しもないし…」
「…知らない。」

「知らないってどういうことだよ？メンバーの
スケジュール管理とかもプロデューサーの仕事だろうが。ましてや、パレオだぞ？お
前が知らないわけ…」

「知らない…知らぬ知らないの！」

チュチュはそう吐き捨てると有無を言わさず
帰って行った。

…知らないって顔じゃなかったぜ。

あれは心当たりがある顔だ。

いいのかよ…お前はそれで。

ちゆという少女

「やつぱり出ませんか…」

「…ああ、どうしちまつたんだ…パレオのやつ…」

ますきさんの電話にも出ないようだ。こうなるといよいよパレオの身に何かあったと考えるほかはない。

チュチュはさっさと帰っちまうし…

でも、あいつのあの表情は…心当たりがあるって感じがしたな。

絶対に何か知っている。

やつぱり直接問い詰めるしか方法はないか。

そもそもパレオがライブを欠席すること自体

例え天地がひっくり返ろうともあり得ない話なのだ。

チュチュ様〓 天地がひっくり返ること

…そんなような子だからな。

だから、そんな彼女が何も告げずに姿を消す

なんてのは繰り返し言うがあり得ない話なのだ。

あるとすれば…

「…まさか。」

浮かんでしまった。

とある一つの可能性。

「ちよつと待て…」

しかし、それはとても残酷な可能性…

「…おいおい、マジか。」

そんなことがあつていいのか？

「優君？」

「ちよつくら、プロデューサーさんとお邪魔してきます。」

俺の様子を不思議に思ったのか、呼びかける

レイヤさんにそう言い残し、スタジオを飛び出す。

「くそっ…!」

ふざけんなよ。

もし今考えたことが真実だとしたら…

パレオは…

パレオはもう戻ってこないかもしれない。

ふざけんよ。

間違いであつてくれ。

杞憂であつてくれ。

『ご心配をおかけしました！パレオは大丈夫ですよ♪』
早く折り返し電話をかけてきて、そう言つてくれよ。

「…意気消沈つて感じだな。」

「…ユウ。」

いや、意気消沈というよりも疲労困憊つて感じか。

まあ、それはどつちでもいい…

「…パレオに何て言ったんだ？」

「…!!」

チュチュの顔が驚きで染まる。

…やっぱりか。

できれば、当たってほしくはなかった。

どうしてわかったと…チュチュの目がそう言っていた。

「…はあ。 やっぱり…そうなんだな…」

そう…冷静に考えればすぐわかる話ではあるのだ。

パレオはチュチュのことを第一に考えている。

そのパレオがチュチュを裏切るような真似をするはずがない。

では、何故姿を消したのか。

…それは、チュチュから必要とされなくなつたから…拒絶、もしくはそれに近い言葉を投げ掛けられたのではないか？という結論に至る。

あの二人がどのように出会つたのかはわからない。けれど、パレオの並々ならぬ忠誠

心は見えていればわかる。

…そんなあいつにとつてはこれ以上ない仕打ちだろう。

身を切られるような思いのはずだ。

「…別に責めにきたわけじゃねえよ…俺も人のこと言えた義理じゃないしな。」

「……………」

「だがな、一つだけ言つとくぞ?」

「このままでとお前は絶対に後悔することになるぞ。」

「……………」

「パレオに…どんなことを言ったのかは知らないけどな…ふとした瞬間に…それは襲つてくる。どんなに忘れようとしても、そいつからは逃げられねえんだよ。」

チュチュは黙って聞いている。

「…どこ行くんだよ。」

と、思ったら階段を降りて下に行ってしまった。

初めて見る部屋だ。

こんな部屋があつたのか。

飾られた数々の楽器。

これ…いくらぐらいするんだろな…というそんな

場合じゃないだろ…というような感想しか浮かばない。

「…ちゆ？」

『ちゆ 8才』

プレートにはそう描かれていた。

どうやら、それはちゆという少女への誕生日

プレゼントのようだった。

ご丁寧な年齢ごとに分けられており、両親から

惜しみ無い愛情を注がれているということが

伺い知れた。

「…ちゆっていいのか。」

今さらながら初めて知った。

こいつの本当の名前。

「…毎年こんな誕生日プレゼントくれるなんて…

良い親御さん達じゃなか。

「…何も判つてない。」

…だ、そうだ。

惜しみ無い愛情を注がれているだろうに…何が

不服なのだろうか。反抗期？

「…確かに、Mum^母もdad^父も私のことを褒めてくれるわ…例えば私がどんなに酷い演奏

をしたとしても…」

…そうか。

チュチュには才能がなかったんだ。

そっち方面の才能と呼ぶべきだろうか。

こいつのことだ。

たくさん努力はしたのだろう。

けれど、満足の行く結果は得られなかった。

にも関わらず両親はそんな自分を褒める。

それは、どれほど惨めなことだろうか？

俺には想像もつかない。

そんな及ばない想像のなか、チユチユ：

いや、ちゆは生きてきたのか。

…少しはわかった気がする。

こいつの根源^{ルーツ}ってのが。

「お前は両親のために音楽やってんのかよ？」

「…何が、言いたいのよ？」

「…お前を見ているようで見ていない両親よりも…お前を本当に見てくれる人間を蔑ろにするのかつて言ってるんだよ。」

「…!!」

「パレオは今も苦しんでる…きつとな。」

「…パレオ。」

「そんなあいつの苦しみをどうにかできんのは…他でもない…お前の言葉だけなんだよ。」

瞳が揺らいでいる。

…苦しんでいるのはこいつも同じだ。

「…千葉の鴨川だつてな…パレオの住んでるところ。」

こうなつたら…最後の手段を取るか。

「…俺は一人でもパレオを探すぜ。このまま

はいそうですか…なんて納得できるかよ。」

引きずってでもこの場に連れてきてやる。

パレオ…待っとけよ。

パレオと令王那

いても立ってもいられずパレオが

住んでいる（であろう）鴨川まで来たはいいが…

正直、無計画にも程があつたと若干後悔している。あと反省も少々。

引きずつてでも…とは言つたものの、女子中学生に対してそんなことをしようものなら一発レッドカード。退場。俺が制帽を被つた青い制服の人達に連れて行かれる未来しか見えない。

ぶつちやけて言う…

「…詰んだ。」

せめて、チュチュに何か情報でも聞いてくるんだつた。いや、そもそもあいつが何か知ってるのかも怪しいところだけど…

しかし…本当に何も知らないでやんのな…

パレオのこと。手がかりはほぼナシのこの状況。

聞き込みでもするか…？

レオナちゃんって名前の女の子知ってますか？ 却下だな…完璧不審者だもん。

「さて、どーしたもんか…」

困った。

非常に困った。

啖呵切って出てきたはいいものの、収穫ナシで帰るだなんて…カツコ悪すぎるにもほどがある…

相変わらずのノープラン男だな…俺ってやつは。

と、思っていたらますますきさんから電話がかかってきた。タイミングが神すぎる。

不本意だが、四の五の言ってられる状況でもない…この人に泣きつこう。

「もしもし?」

「優! お前今どこにいるんだよ?」

「俺ですか? 聞いて驚かないでくださいよ?」

「…もしかして鴨川にいんのか?」

秒でバレた。

私はどこにいますでしょうかなんて茶目っ気

出してる場合でもないけど。

「はい。」

「…そっか、考えることは一緒だな。」

「えっ?」

一緒って…まさか。

「…そつちも鴨川にいるんですか?」

「…ああ、ロックも一緒だ。」

マジかい…何でこう…行動力の塊が多いかね。

しかし、そのおかげで一つ手間が省けた。

「それじゃあ、一旦合流しませんか? 情けない話

俺一人じゃどうしようもなくて…」

「わかった。」

いや、助かった…ホント良いタイミングで電話かけてきてくれたよ。

そして無事、二人と合流に成功。

「つたく、何も考えずに出てきたのかよ?」

「…面目ない。」

そつちもどうせ似たようなものでしょうに…とは言えない。めちやくちや言いたいけど。

「けど、どうします?」

「そりゃあ、聞いて回るしかないだろ。」

「ですよねー。」

中学校に行くのが手っ取り早いということになり

最寄りの中学校へと向かう。

到着した俺達は早速聞き込みを開始した。

手始めに、女子生徒三人組がいたのでその子達に聞き込みをすることにした。

「パレオってやつ知らねーか?」

「ちよっ…」

「ますきさん?そこから突っ込まなきゃいけませんか?」

「…それで通じるわけないっしょ。」

「ああ?じゃあ何て言えばいいんだよ?」

「ロツクが突っ込まないのを見ると、どうやらこの二人も無計画の極みだったようだ。人のこと言えないじゃないかよ。」

「レオナって名前の女の子を探してるんだけど…そんな名前の子いたりしないかな?」

「レオナ?…鳩原にゆうばらさんかな?」

「にゆうばらさん?」

どうやら心当たりがあるみたいだ。

「はい、同じクラスに鳩原にゆうばら 令王れおな那さんっていう女子生徒がいるんです。」

「…その子って、ピアノをやっていたりとかする?」

「はい!すごく伴奏が上手なんです!」

「ねー!」

これはほぼ確定かな?

いきなりビンゴとは運がいい。

一応ますきさんが写真を見せて確認をとる。

「え!?かわいいー!」

「でしょ? そうなんだよ…もう、かわいさの権化っていうのかね…かわいさが留まるところを知らないっていうか…」

どうやらこの鳩原 令王那さんはパレオ本人に間違いはないみたいだ。

「…あの、鳩原さんとはどういった?」

尤もな質問だ。

どう答えたらいいものか…

「…んー、音楽仲間…かな？」

これしかないよな。

「…だな。」

「はい！」

ますきさんとロックも肯定してくれる。

「鳩原さん…なんだか具合が悪いみたいだったから…連絡も取れないから心配になっちゃってさ…でも、俺ら誰も鳩原さんの住んでるところとか知らなくて…良かったらいいんだ…知ってたら教えてくれないかな？」

彼女にとつては迷惑かもしれない。

他でもないパレオが選択したことだ。

俺らがどうこう言ったところで簡単に揺らぐことはないだろう。

鳩原 令王那をパレオにしたのはチュチュだ。

殻に閉じ籠ってしまった令王那を再びパレオにすることができるのは…チュチュだけなんだ。

「お前、何でパレオの名前知ってたんだよ？」

教えてもらったパレオの家に向かう途中、ますきさんがそんなことを聞いてくる。

「まあ、仲良しっすから…俺ら。」

「何だそりゃ。」

「…どうしたよ、ロック。」

「…私、パレオさんのこと何も知らなかったんやなって…」

「…俺もだよ。」

知らないならばこれから知っていけばいい。

でも、そんな機会も失われてしまうかもしれない。

…そんなの寂しすぎるだろ。

チュチュ…お前は本当にそれでいいのかよ？

パレオはもう戻ってこないかもしれないんだぞ？

今ならまだ間に合うかもしれないんだ。

お前には…あんな思いはしてほしくない。

もう、御免だ…せつかくできた繋がりを失うのは。

「ん。」

メッセージ？

…レイヤさんからだ。

今どこにいるのかという所在を問う内容だった。

「…二人とも先に行つててもらえますか？」

「どうしたんだよ？」

「ちよつと野暮用が…すぐに追いつきますから。」

「わかつた…すぐに来いよ。」

どうやら、彼女も鴨川に来たようだ。

プロデューサーを伴つて。

「そうか…来たのか。」

それじゃああとは、任せよう。

アイツに託そう。

RASの運命を。

きつといつか

「チュチュ様あー！」

木霊するのは。パレオの絶叫。

終わってみればなんのことはない。

結局は。パレオは。パレオ。

チュチュ様からは離れられないってことだな。

何はともあれ一件落着である。

本当に良かった。

「なんて言うとも思ってたか！このバカちんが！」

「い、いたた！痛いですうー！」

痛いですうー！じゃねえ！

俺の気持ちも知らんでこの子はもう…

今回はね、わりと怒ってるよ？

心配させやがって。

罰として頭グリグリの刑に処してやるわ。

本人は若干涙目になっているがそんなのは

お構い無しだ。

「…つたく、心配したんだぞ。」

「す、すみません…」

本当だよ。

あー…胃が痛かった。

「ふふ…そのへんにしてあげて？」

「…わかりました。」

…レイヤさんに言われちゃしようがない。

このあたりで勘弁してあげるか。

しぶしぶパレオの頭から手を離す。

「…そんなじゃ、パレオも無事に戻ってきたことですし…帰るとしますか。」

「…ごめんなさい。」

チュチュは あたらしく 謝るを おぼえた！

これはびつくり。

帰りの電車内にてチュチュは自らの思いを

吐露した。

皆の気持ちからRASから離れていってしまうのではないかという焦燥…恐怖。それが表面化してしまったとのこと。

まったく…いらぬ心配を。

そんなわけではないのにな。

「こつちこそ、不安にさせてごめんね…」

こういう時にも謝れるレイヤさんは大人である。

「…ありがとう。」

「え、俺？」

本当にどうしたチュチュ？

明日の天気やばくねーかこれ。

「一体何が降るんだ？」

「あなたの言うとおりで…あのままだと後悔する

ところだった…」

「…謝って良かったろ？ま、終わりよければ何とやらってやつだな。」

「…ユウにもそういう経験があつたの？」

「…ああ。俺の場合は謝ることもできなかつたけどな。何も告げずに俺の前からいなくなつちまつた…」

「…そう。ごめんなさい、聞いちゃいけなかつたわね…」

「別にいいよ…謝るなって…らしくねーな。」

「しみみりするところじゃないだろ？お前はこれからのことを考えてりゃいいの。」

過去は過去。

後悔すれば戻れるのならいくらでもして

やるんだがな。

「これからも喧嘩したりすることもあるかもしれないけど…その度に乗り越えて…強いバンドになっていこうね。」

「はい。」

「レイヤ……」

うん、やっぱりこの人は言うことが違うね。

言葉の重みが違う。

チュチュのスタジオに到着。

時間も遅いが、とある目的のためにこのまま解散というわけにはいかないのだ。しばらくしてバイク移動組のますきさん、ロックが戻ってきた。

みんな、揃ったな。

「チュチュ様……誕生日おめでとうございます♪」

パレオを皮切りに各々が祝辞の言葉を述べる。

「……」

当の本人は何のことかわかっていない様子。

「今日は誕生日だろ？みんな、お前のために考えてくれたんだぞ？」

「……あー！」

忘れてたなこりや。

「さ、主役を特等席へとお連れしましょうか。」

「ちよ、ちよっと！」

皆それぞれ配置へとつく。

パレオがこの日のために作った曲。

『 Beautiful Birthday 』

…危うくお蔵入りになるところだったけど。

曲はパレオのキーボードから始まる。

うん…やっぱりこれがないとダメだな。

力強いメンバーの多いRASの中でも異彩を放つ綺麗な旋律を奏でるキーボーディスト。

それでいて、他に一切遅れを取らないという…

曲のほうもパレオ作ということもあり、普段とはまた違った感じだ。

でも…こういうのもアリだな。

また、違ったRASの一面が見れた気がした。

「…ずるいわよ！…こんなの…」

曲が終わり、程なくしてチュチュがぐずり出した。

そう言つて、泣きそうなんでしょ？

わかつてんよ。

とどめさしてやるか。

まだ、お祝いの言葉言つてなかつたし。

「12歳の誕生日おめでとう…チュチュ。」

「…14歳よ。」

あれ？

「んじや、このノリで深夜の○鉄大会とでも

いきますか？」

「何言つてんだ？帰るに決まつてんだろ。」

一番乗つてきそうなますきさんに却下された。

一回やつてみたかつたんだけどな…ていうかそもそもゲーム機がないか…このスタ

ジオ。

まあ、時間も遅いしね。

しかたないね。

「しっかし、パレオは大変だな。こつからまた

鴨川か。」

パレオ曰く、慣れてますからとのこと。

慣れるもんなのか？

夜道に女の子一人は危険なので、せめて駅まで

送ることにした。

「すみません、わざわざ。」

「いいんだよ。もつと頼ってくれても構わないんだってのに…一人で抱え込まれるほう

が

イヤなことだつてあるんだぜ？」

「…本当にご心配おかけしました。」

「これからは何かあつたら言うんだぞ？」

力になれるかもしれないからさ。」

「はい♪」

「しかし、そっちのパレオもいいな。オフモードっていうの？やっぱり、可愛い子はどんな格好しても可愛いもんなんだな。」

黒髪にメガネに制服。

たぶん、パツと見だとパレオだとわからんわ。

「そんな…恥ずかしいですよ…」

ちよつと赤くなってるし。

もう全部が可愛いな。

「…鳩原 令王那っていうんだな。」

「…はい。」

「いい名前じゃん。なんかカッコ良くね？」

令王那って響きがさ。」

「か、カッコ良い…ですか？そ、そんなこと言われたの…初めてです。」

「俺なんかさ、女の子みたい…ってよく

からかわれてたよ。」

全員に制裁加えたけど。

「チュチュは……ちゆつていうんだな。」

俺、今の今まで二人の名前も知らなかったんだなーつて。」

「……………」

急にパレオが押し黙ってしまふ。

「…私もです。」

「ん？」

「…言われた方も勿論辛いとは思いますが、言ってしまった方も同じくらいに辛いと思うんです。」

…ああ、そのことか。

「…言葉つてさ、恐ろしいものだよな。」

たった一つで何かを壊したりもするんだからさ。」

「…そうですね。ですが、救われたりもするんです…パレオは…チュチュ様のお言葉に救われました。」

「…そっか。」

「…その人とは、親しくされていたんですか？」

「うーん…まあ、そうかな？付き合いは短かったけど。ろくに友達もいなかったし…大

切な繋がりではあつたかな…けど、俺が壊しちゃつた。」

「……………」

つと、気を使わせちまつたかな？

「ユウさんは…パレオのことを本気で叱つてくれました…本気で心配してくれていました。そんな人が他人の気持ちもわからないなんて…パレオは思いません。」

「そう、かな。」

「その人も…きつとそのことはわかつていると思います…ユウさんは優しい方ですから…少なくとも、パレオはそう思います。」

「は…何だ、励ますつもりが励まされてやんのな。」

「す、すみません…差し出がましかつたでしょうか。」

「いや、ありがとな。」

救われたよ。

「きつといつか会えますよ。」

「そうかな？」

「はい…きつといつか届くと思います…ユウさんのお言葉が…お気持ち。」

「…だといいな。」

「はい♪」

もしも、その時がきたならば…謝ろう。

そう…俺は夜空に誓いを立てた。

俺ができること

【朗報】Poppin, Party・RAS・Roselia

武道館でライブすることが決定

朗報も朗報。

すべてはタイトルの通りである。

武道館への切符を手にしたのはこの三バンド。

投票の結果、一位通過はRoselia。

二位が同票数でPoppin, PartyとRAS。

どうせなら二バンドどっちもあげちゃおうぜ的な

感じで武道館行きが決まったらしい。

運営の人達に拍手。

マジでよくやった。

本来なら一位・二位のところ三バンドって…

同じ票数ってどんな確率だよ…

奇跡としかいいようがない。

いや、奇跡なんかじゃないな。

紛れもない実力で勝ち取ったモノか。

「今の気分は？」

ロックへ質問する。

「最高やー！」

だ、そうです。

「どうよ？」

続いて聖墮天使（どっちだ）あこ姫へ聞いてみる。

「ふっふっふ…よくぞ聞いて」

「はいはい、とつても嬉しいと。」

もつとこう、変化球で来いよな。

直球ストレートばかり投げやがって。

「戸山はボランティアスタッフだっけ？」

「うん。」

いつの間にやら加入していたらしい。

そんなのあるなら俺も入りたんだけど。

なにせよ良い子や…この子は。

そんなのはそうそうできることじゃない。

「…そういうのって、心の中に閉まっておくものじゃない？ すごく恥ずかしいんだけど…」

心の声が駄々もれだったみたい。

ちよいちよいあるな、こういうこと。

「何だよみんなして…俺も何か力になれんかね…」

応援してくれるだけでもあこは嬉しいよ！

とは宇田川。

ポピパさんと武道館だなんて…と、もはや

別世界にいるロツク。

第一印象が厨二病娘と鈍くさい地味眼鏡。

そんな二人が武道館とは今となつては

とてもじゃないが信じられん。

「世の中って何があるかわからないよな。」

「ホントだね。」

「頑張つてほしいよな…二人とも。」

「…うん。」

ふと、戸山がこちらを見ていることに気づいた。

「どうした？」

そんなに見つめられると恥ずかしいんだが。

「…優って変わったよね。」

「俺が？」

変わった？

「うん…最初は何事にも無関心…って感じだったけど。」

実際そうだったからな。

話しかけんなオーラ出してたつもりだし。

「何も期待なんかしてなかったからな…高校生活なんて…つまらないものだと思ってたし。」

けど、現実は違った。

つまらないなら面白くすればいい…

そういうパワーに溢れた人達がたくさんいて…

いつの間にかそんな人達のペースに

飲み込まれて…

案外悪くはないかもしれないって思い始めて…

「変わったって言うより、変えられたってほうが正しいかな。」

どうしてみんなそんなに一生懸命になれるのか

最初は不思議で仕方がなかった。

でも、今ならちよつとはわかる気がする。

「入学式の時にさ、日菜先輩が言ってた

るんよってしよーってのはこういうことなのかもな。」

「そうかもね。」

「…ありがとな。」

「…このタイミングでお礼？」

「最初に話しかけてくれたろ。ちよつと嬉しかったんだぜ？女子ばかりで不安だった

つや。」

本当に。

俺にはもったいなさすぎるくらい幸せな日々だ。

「優は？」

「んー？」

「バンド、組めばいいじゃん。」

「その発想はなかった。」

とは言うものの、たぶんそれは無いと思う。

「ライブとかやれば、あこも六花も

お姉ちゃん達もみんな観に行くと思うよ？」

「その発想もなかった。」

それならワンチャンありか？

…が、それはありえたとしても

まだまだ先のこと。

それよりも今は…ほんのちよつとだけ先のことに

目を向けよう。

…俺ができることは。

眼に焼き付けて、心に刻みつけて、精一杯応援

すること。

ガールズバンドの人達を。

彼女達のライブがより良いライブとなるように。

始まりは

放課後にパレオ失踪騒動の謝罪をするべく

ポピパさん達の通う花咲川女子学園に来ていた。

怪しい者だとは思われない…はず。

合手で文化祭もやったし俺の顔ぐらいは皆さん

知ってる…よな？長時間待つのはさすがに

キツイけど。

「とはいえ、さすがに帰ってるかな…」

時間も結構経っているし、今日のところは諦めて帰ろうか…

「ゆーくーん！」

と、そんなことを思った矢先に後ろから俺の

名前を呼ぶ声が聞こえた。

この声は…香澄さんかな？

そう思い振り返るってみると予想通り香澄さんが

俺のほうへ向かって…というかもう目の前まで
きてるんだが…

…ちよつと待て!?

「つとお!」

ギリギリセーフ!セーフ!?

抱きつこうとしてきた(?) 香澄さんから間一髪
逃れることができた。

…この人マジでか!?

今、俺に何しようとした!?

…ともかくにもだ。

危うく越えてはならない一線を越えるところ
だったのは確かだ。

…いや、本当に危なかった。

明日香
妹よ…お前の姉ちゃんは一体どうなっているんだ…俺にハグかまそうとしてきたぞ?

「か、香澄さん…」

「ん?」

「…相手は選んでください。」

「えー?」

えー?じゃなくて。

何でちよつと残念そうなんだよ。

「それよりどうしたの?」

「ああ…えつと…」

それよりで済ませちゃいけない気もするけど…

なんだつたつつけ…衝撃的すぎて当初の目的を忘れてしまった。

というか、今さらながらすげー髪型してんのな

この人は…猫耳ヘアーとでも言ったらいいのか。

「そうだ、ほら、RASのゴタゴタで色々ご心配をおかけしたじゃないですか?それの

謝罪をと

思っています…」

「全然いいのにー!でも良かったね!」

「まったくですよ…それで、他の皆さんはもう

帰っちゃいました?」

できれば皆さんにも謝りたかったのだが

塾にバイトに家の手伝いに生徒会と忙しいらしい。

「私だけ暇になっちゃって…」

「なるほど…それじゃあ仕方ないですね。」

それはまたの機会にするとしよう。

「というか、生徒会って…ちゃんとやれてるんですかね？あの人は。」

市ヶ谷先輩

「有咲？頑張ってるよ！」

お前にだけは言われたくねーよ！とか言われそうだけど…それを聞いて安心した。

香澄さんが連れ出してくれなかったら今頃どうなっていたことやら…そう考えると本当に感謝しかない。

「そういえば…」

「ん？」

「先輩ってどうやって市ヶ谷先輩と知り合ったんですか？前にチラつと本人から話は聞いたんですけど…」

大体、香澄のやつが——しか言ってなかったから要領を得なかった記憶しかない。ちなみに百回は軽く言ってたな…間違いなく。どっだけやねん。

「んーとねー…星のシールを見つけたから…」

かな？」

「星のシール…ですか。」

「うん！色んなところに貼ってあって…それを

追いかけていったら有咲の家の蔵に続いてたんだ！」

「たぶん、犯人はあの人本人ですね。」

そういうことか。

大体わかった。

「あの人が通ってたピアノ教室じゃ、ピアノが上手に弾けましたねってことで星のシールを貰えることになってたんですよ。」

「そうなんだー！」

それをその辺に悪戯で貼っていたんだな。

まったく…何をやってんだか。

なににせよそのおかげで…

「お二人は運命の出会いを果たしたと…」

「…泥棒に間違われちゃったけどね。」

フアーストコンタクト最悪だった。

何はともあれ、星のシールが香澄さんを導いたんだな。

それがPoppin', Partyという一つのバンドが生まれるきっかけになったわけで…

それはもう…

「…奇跡ですね。」

「ん？」

「あ、いえ…それで、ギターに出会ったんですね。」

「うん！それで有咲とライブハウスに行ってね！」

いや、行動早いな。

いきなりライブハウスで。

弾こうとしたのか？

ギター初心者だったんだよな？

無謀にも程がある…チュートリアル終わってないのにボス戦行くようなもんだぞ？

そうして、そこでグリグリというバンドの演奏を聴いてキラキラドキドキ？したそう
だ。

「キラキラドキドキ…ですか。」

「うん！」

なんとなくわかった気がした俺は日菜先輩確実にあの御方の影響を受けているな…うん。

しかし、小気味の良いフレーズだな。

なんだか気に入った。

「…香澄さん。」

「ん？」

「今度の武道館で俺にもさせてくださいよ…」

その、キラキラドキドキやってやつを。」

パアツと効果音が付きそうなくらい香澄さんの顔が明るくなる。

「もちろんだよー！ゆーくんをキラキラドキドキさせてあげるね！」

「ちよっ…!？」

…完全に油断してた。

「先輩！離してくださいってばーやばいってー！」

…当たってるし…何がとは言わないが。

引き剥がそうにも女性を手荒に扱う真似はできない。

…早い話が詰んだ。

誰か助けてくれ。

「じゃーねー！ゆーくん！」

「は、はい。」

…ようやく解放された。

なんだろう…すげー疲れた。色んな意味で。

ちなみにこの日、俺の中に香澄さんがデンジャラスな人物として追加されたのを追記しておく。

誓いと出会い

「おれがずっと守ってやるよ。」

そっだ。

俺はあの時、子供ながらに気恥ずかしい

誓いを立てたんだ。

「…ホント？」

「ああ！約束だ！やぶつたら針千本でもなんでも飲んでやる！」

「…うん！」

「ずっと一緒だ。おれがありさを守ってやるよ。」

…結局その誓いは破られることになるわけ

だけど。なにはともあれ、それが俺達二人の

出会いだった。

「うっわ…恥ずかしい。」

「は？いきなり何だよ？」

隣を歩く幼馴染市ヶ谷有咲が怪訝な顔をして俺に問いかける。言外に頭大丈夫か？つて顔をしていた。

「いや、俺らが出会った頃の過去を回想してたんですけど…超絶恥ずかしい台詞を吐いていたうえに約束まで破つちやつてるつていう余計なことまで思い出しちやつたつていうか…」

「約束？」

「覚えてませんか？」

「そうだよ。」

「何かの間違いだよ。」

「俺の記憶違いか何かなんだ…きつと。」

「…あぁー…」

「…何故顔を赤らめる？」

その反応はもう間違いないやつですよん。

確定しちゃったじゃん。

それが事実なら針千本飲むの俺？

いや、守る云々は俺が言い出したことなんだけど…

吐いた唾は飲めぬが針千本は飲めと？

「…確か公園だったよな？お前と初めて会ったのは。」

「ええ、そうです。」

そう、あれはいつだったか——幼少の頃。

偶々公園を通りかかった時のことだ。

何気なく見た先には泣きじやくる女の子の姿。

そして、それを取り囲む自らとそう歳の変わらないであろう男の子三人組。何が行われているかは明白だった。

「おい。」

考える間もなく体は動き出していた。

正義感からとかそんな高尚なものじゃない。

ただ単純に同じ男としてそいつらが気に入らなかつただけだ。

「女の子一人によつてたかつてたかつてだセーまねしてん

じゃねーよ。」

「なんだよ、お前?」

三人組のリーダー格であろう奴がこちらを睨みながら言う。

「おれか? おれは……」

「……………」

「…なんだろ?」

「なんだ、こいつ! バカにしてるのか!」

気の効いた台詞が思い浮かばなかつたんだつた。

なんともしまらない男である。

「その子、泣いてるだろ? やめてやれよ。」

「やだね!」

「そうか…じゃあしようがないな。」

「やるのか? こつちは三人いるんだぞ!」

確かに数的不利でこちらの勝ち目は薄い。

…正面からやればの話だが。

「…げっ！母ちゃん！」

「えっ？」

間抜けが俺から目を逸らす。

ウソだと言うのに。

「んなわけねーだろ！バーカ！」

隙だらけのリーダー格をここぞとばかりにボコボコにしてやった。

「うわーん！」

「た、たけし君がやられた！」

「…どこぞのガキ大将かよ。」

「ひ、ひきようだぞ！」

「は？三人で女の子一人いじめてるお前らに言われたくねーよ。」

正義の味方のつもりもないし。

当時は捻くれた子供だったから、悪役の怪獣とか怪人のほうが好きだったし。

「で？手下その1、その2はどうすんの？やるの？やらないの？」

「うっ…くそー！おぼえてろよ！」

完全に去り際が三下。

「おとといきやがれ…だっけ？」

今思えば結構危なっかしいことしてたんだなあ…俺つて。

「つと、そんなこと言ってる場合じゃないか。」

すすり泣く女の子のほうへと近づく。

「もう大丈夫だぞ。あいつらこらしめてやったから。」

「…あ、ありがと…」

「おれ、ゆうつて言うんだけど…名前はなんていうの？」

「…ありさ。」

「ありさつて言うのか。」

「…うん。」

「なあ、ありさ。今度からいっしょに遊ばないか？」

「え？」

「一人ぼっちでつままないなーって思ってたんだよ。ダメか？」

「…ううん。」

「そっか、じゃあ決まりだな！またあいつらみたいのが来てもさ、おれがぶつとばしてやるよー！」

「…お前が助けてくれたんだよな。」

「男の風上にも置けない連中でしたね。」

「あいつら、全員名門校に通ってるぞ。」

「…マジかよ。」

何があつたんだよ。

何でちよつと浄化されちゃってんだよ。

本当に人つてのは変わるものなんだと実感する。

「…まあ、過去の話はこのぐらいにしましょつか。」

今はそれよりも未来の話だ。

「明日なんですね…いよいよ。」

「…ああ。」

「先輩方は夢を現実にしたわけだ。」

「や、やべー…お前が急にそんなこと言うから

緊張してきただろ…」

「ふっ…みんなと同じもの目指すのいいな…つて?」

「…なっ!?おまつ…何でそれを!」

「良いこと言っちゃってまあ。」

「う、うるせー!」

「うぐっ……!」

この子いつから暴力振るうようになったん?

しかも結構いいの入ったんですけど。

「つたく、でかくなっても全然変わんねーな……」

お前は。」

「先輩がちっちゃすぎるんでっ……!!」

ちよっ! 何で正確に同じ場所に打ち込めるんだ!?

……まったく、小さいわりに一撃は重いな。

どつかの猫耳ヘッドフォンのプロデューサー然り、一体どこにそんなパワーを秘めて
いるんだか。

レイヤさんはあんなスラーツとしてるのにな。

背丈でいえば俺とそんな変わらんもん。

「しかし、すみませんね……明日は武道館だつていうのに……母ちゃんが会いたい会いた
うるさいもんですから……無理言つて来てもらっちゃいましたけど。」

「気にすんなよ。今日は練習もないし、おばさんには世話になったしな…挨拶ぐらいはしないと」

ダメだろ。」

「しなくていいと思いますけどね。」

「ただいまー。」

「おかえり…つてあらまー！」

「ご、ご無沙汰してます。」

「あーちゃん！久し振り！大きくなったわねえ！」

あーうるさい。

「どうぞあがつてあがつて！」

「お、お邪魔します。」

「優！ちゃんと隠すものは隠したの!? 変な本とかビデオとか置いてないでしょうね!？」

「あるわけねーだろ。」

余計なお世話だつての。

ビデオとか古いんだよ。

「は…相変わらずだな。」

「悪化してますよ。」

幼馴染との久し振りの語らいは母親が

終始ハツスルしててうざかったが、有意義な時間だった。

「お邪魔しました。」

「泊まっていけばいいのに。」

「あほか。」

どうせ、同じ部屋で寝るとか言うんだろうが。

見え見えなんだよ。

「明日のライブ頑張るんだよ！優、送ってってあげなさい。」

「ああ。」

「ここまででいいぞ？遠くなるだろ。」

「いやいや、家まで送りますよ。何かあるかわからんですし。」

「…何かあったら守ってくれるのか？」

「え？」

「守ってやるよって言ってくれたよな…あの時。」

その話か…こつ恥ずかしいからやめてもらいたいな。

「…あの時、すげー嬉しかったんだぜ?」

「…どうも。といつても、もう先輩には大切な人達がいるじゃないですか。」

「何言ってるんだよ…その大切な人達の中には…お前だつて入ってるんだからな。」

え、何このかわいい生き物。

やばいんだけど。

「…俺が有咲を守る。」

「お前…」

「それは今も昔も変わらないですよ。」

「はっ…途中、いなくなつたくせによ。」

「う、それは…」

「針千本でもなんでも飲んでやるって言ってたよな?」

なんてこつた。

きつちり覚えてやがった。

…俺の知らない間にこの人は色んなものを得ていた。そんな幼馴染の側に自分がいられるということが…そんな幼馴染の中に自分も確かにいるということが…何よりも嬉しかった。

番外編

一周年

本日は大晦日。

もう一つ寝たら正月である。

「もう今年も終わりか…早いもんだ。」

今年は特に早かった。

もうあつという間だ。

イベントも盛りだくさんの濃い一年だった。

こんな濃い一年を過ごしたのは、生まれて初めて

かもしれない。

「大掃除も終わってるし、もうひと眠りでもするか…ん？」

と、思ったらパレオからメツセージがきた。

なになに…

『如何お過ごしでしょうか？チュチュ様が皆様と歳末をお過ごししたいとおっしゃっているのです！もし、ご予定などなければぜひいらしてください！ご連絡お待ちしております』

ます♪』

「マジかよ……」

あいつがねえ……丸くなったもんだよな本当に。

俺としては嬉しい限りだけどき。

……仕方ない。

寂しいだろうから行ってやろうか。

家にいたところでどうせ昼寝して、夜はテレビのバラエティか格闘技を見るだけだし。母ちゃんは紅白見てるだろうし、親父は会社が家みてーなもんだし。

「つーことで母ちゃん、悪いけど年の暮れは一人寂しく過ごしてくれ。」

「楽しんできなよー！」

やけにあっさりだな。

見守るような表情がちよつと腹立つ。

「優！男を見せるのよー！」

アホなのかな？

「じゃ、行ってくるわ。」

しかし、不思議なものだな……年々、年越しなんてどうでもよくなってただけど……今はちよつと

楽しみだもん。

「ジャーキー…買ってつてやるか。」

パレオに連絡して、ちよつとお高めのジャーキーを買ってチュチュの住むマンションへと到着した。

…今さらだけど、これつて外泊じゃないよな？

…いや、話の流れ的にそうなのか？

だとしたら、やべえ。

「おい、チュチュ！俺年越したら帰るからな…と、悪い。」

どうやら、誰かと通話中だったようだ。

『ちゆのお友達？』

「Yes。」

もしかして、チュチュの母ちゃんか？

「Momよ。」

やっぱり…タイミング悪かったか。

『ちゆ…ボーイフレンドができたのね！』

「は？」

『是非ともお話したいわ！』

あれ…ひよつとして何かとんでもない勘違いされてる？

「いやあ…しかし、チュチュ…あ、いや…ちゆ様のお母様がこんなに若くてお綺麗な方だとは…」

『まあ！お上手なのね！』

「いやいや、ウチのMomとは大違いですよ。」

「誰がお母様よ…」

やかましい…こつちだつてキャラ設定が迷子になつてることぐらい承知のうえだわ。

『でも良かったわ！ちゆにボーイフレンドができて！』

ボーイフレンドつて…つまりはそういうことだよな？残念ですが、娘さんは私のストライクゾーンの対象外なのですが…

「お、おい…お前のMomなんか勘違いしてんぞ…いいのかよ？」

「はあ…相変わらずね…Mom…」

相変わらずね…じゃなくて！何でそんな悠長なんだよ。このままだと取り返しのつかないことになりそうな予感がするんですが？

「お母様、あのですね？僕とちゆさんはそのようなご関係ではなくてですね…」
『パパも呼んで四人でお食事でもどう？是非ともパパにも紹介したいわ！』

ほら見ろ。

何故かパパにも気に入られてトントン拍子に話が進むパターンだぞ…これ。

「はあ…疲れた。」

「悪いわね…。」

「あやうく、ゴールインするところだったな。」

なんとか誤解は解けた（？）けど…解けたよな？

ちゆをよろしく頼むわね！ってどちらとも取れるようなこと言ってたけど。

「Wedding Ceremonyなんてまだ早いわよ。」

「だよな…びつくりしたわ…にしても、邪魔して悪かったな。」

「別に、構わないわ。」

「ウ、ウエディング…!?!」

とか言ったらパレオがやって来た。

「おー、パレオ。」

「い、いつからお二人は…そのような、(っ)(っ)(っ)関係に…!?!」

「落ち着けよ。」

そんな事実は一切ねえ。

「みんな、まだ来てないのか？」

「はい！ですが、もうすぐいらつしやると思いますよ。」

しかし、どつと疲れた。

来て早々こんなことになるとは思ってもみなかった。

「おう。」

「ごきげんよう、ますきお姉様。」

「……………」

「すみません！ごめんなさい！もう言いませんから！コブラツイストはやめて！」

やっぱり、下手なことは口走るものじゃない。

来年からは気をつけよう。

「…ロツクが話したのか？」

「は、はい…それにしてもお姉様って…笑うなつてほうが無理…あ、ウソです！ウソです

！勘弁してください！」

「もう…二人とも何やってるの？」

「レイヤさん…こんにちは。いや、ただ挨拶しただけなんですよ?」

「お前のは悪意に満ちてるんだよ。」

「また何か言つたの? 優君。」

またつて…最近レイヤさんも俺に味方してくれなくなつてきてる気がする。

「何やこの状況!?!」

続いてロックもご到着。

何でもいいから助けて。

「パス。パレ出てんじゃん。」

さつきからパレオのテンションが高いと思つたら。

しかし、本当にすげーよな…テレビに出てるなんて。

そんなアイドルが身近にいるっていう状況もすごいけど。

『まんまるお山にいどろっ…』

いきなり囁んでるし…この人…確か丸山 彩さんだっけ。

一ヶ月後ぐらいにライブをやるらしく、その宣伝らしい。

「パレオはやっぱり行くのか?」

「はい! 今から楽しみです〜♪」

『私たちのライブユツ…』

また囁んでるし…ある意味持つてるな…この人。

そういえば、文化祭の時もテンパってたっけ…

『寒い季節が続きますが、大ガールズバンド時代の熱気はおさまりそうにありませんね！』

大ガールズバンド時代…か…よく言ったもんだよな。

この一年、そのガールズバンドというものを知ったのが一番の収穫だ。確実に…俺の世界を広げて、変えてくれた。

夜になり、年越しも近づいてきた。

「ちゅちゃんお眠？寝てもいいんだぞ？」

「Shut Up！」

「…一言いいか？」

「何よ…改まって。」

「いや、なんだ…その…俺は幸せ者だなんて思ってたよ。」

「そうね、ワタシ達の最強の音楽を間近で聴くことができるんだもの。」

「ああ…だから、来年も最強の音楽を奏で続けてくれよ…ってそういう話。」

「決まってるんだろ！」

「はい♪」

「そうだね。」

「が、頑張らんと…！」

「ってことで…来年も、よろしくお願いします。」